
STAY WITH ME ~ 続編 ~

yukino

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STAY WITH ME 〈続編〉

【Nコード】

N6663P

【作者名】

yukino

【あらすじ】

交通事故を装った殺人の罪で逮捕された菅原梓は、計画通りに心神喪失を装う。しかし、山梨県警捜査一課の倉田警部は、梓の心神喪失は偽装だという疑いを持っていた。「川村雄一郎と真理夫婦の愛の力」は梓の心を変える事が出来るのだろうか・・・
「悲しい愛」なのか・・・「幸せな愛」なのか・・・

第一章（前書き）

「STAY WITH ME」の続編です

第一章

「この度はご迷惑をおかけいたしましたして、誠に申し訳ございませんでした。またのご来館をお

待ちしております」

丁寧な頭を下げ、笑顔で挨拶をする若い女性フロントマンに背を向け、菅原梓はホテル玄関に向った。

玄関を出る時、突然、フロントを振り返った。

カウンター内にいた別の男性フロントマンとコソコソ話を始めようとしていた、女性フロント

マンが慌てて梓に笑顔を返した。

二人のフロントマンをじっと見つめた梓は、深々と礼をして玄関を出た。

7月2日金曜日、昨日から降っていた雨はまだ残っていたが、梅雨空の合間からハケ岳連邦

が少しでも顔を出し始めた。

ホテルの庭に咲き乱れるバラは見事だったが、山梨県にあるリゾートイン小淵沢という小さ

なホテルは、綺麗な外観と違って居心地は悪かった。

……居心地を悪くさせたのは梓自身であったのだが……

自分で直接「一泊」とホテルに予約したにも関わらず、チェックインの時から「予約は二泊で入っているはず」とクレームをつけた。

「申し訳ございません。お部屋は二泊でご用意出来ます」と、一瞬、慌てたが、詫び言葉と笑

顔で対応するフロントマンに「部屋が用意出来るとかそういう問題ではなく、二泊の予約を取

り間違える、と言うのはどういう事？ あなたでは話にならないから、上の人を呼んでください

い」クレーム客の常套句を言って、フロントマンを困らせた。

対応した総支配人は丁寧な対応を心がけていて、その対応に問題はなかったが「私をバカに

しているの？ どうしてこういう事になったのか？ 確認して

報告しなさい」と横柄で納得し

ない態度をとった。

その後は、何度もフロント前をウロウロしたり、挙動不審な行動で、ホテルに悪い印象を残してもおいた。

二泊の予約とごねたにも関わらず、一泊でチェックアウトをして「やっぱり嫌な気分だから

帰るわ」と、ついでに嫌味も言った。

バラ園の前でホテルスタッフとすれ違った時、ピンクのバラの花を一つもぎ取り「お世話に

なりました」とスタッフに手渡した。スタッフは啞然とした様子で梓を見た。

「後で役に立つ」

梓はスタッフに満面の笑みを返した。

一時間後、梓は、同じ山梨県にある八ヶ岳ガーデンリゾート

ホテルの従業員駐車場の端に車を停め、運転席から後部座席に移って「そろそろ出てくる頃…」と、じつと従業員出入り口を見つめた。

後部座席はスモークガラスになっているので、外からは自分の姿は確認出来ないだろう。

エンジンを切り、締め切った車内は蒸し暑かったが、流れる汗を拭おうともせず「STAFF ONLY」と書かれ、塗装の剥げかかった薄いグレーの、従業員出入り口の鉄の扉を見つめていた。

昨年暮れまで、重い扉を開けて出社する度に感じた「ときめき」を思い出し、胸が疼いた。

10時を過ぎた時「男」が姿を現した。

少し痩せたように思える長身のスポーツマンタイプのその男は、ホテルの制服である濃紺のブレザーと、薄いグレンチェックのズボンが似合っていた。梓は久しぶりに見た愛しい姿に、また胸のときめきを覚えたが、その気持ちを抑えて男をじっと見つめた。

男は、ドアから出て空を仰ぎ雨の降り具合を確認め、一瞬考えるような仕草をしてから、出入り口に用意されている透明のビニール傘を手にとった。

傘をさしながら従業員駐車場を見回した時、シルキーゴールドのエスティマに目を止めた。

「千葉ナンバーのレンタカーが、この場所に停めてある事に警戒感を抱かせてしまうか？」

梓は不安になったが、男は何のリアクションも起こさず、真っ直ぐに男の愛車である黒のチ

エロキーに向った。

ブレザーを脱ぎ丁寧にたたみ、ドアを開けて車に乗り込む瞬間、今度は右腕にはめてある腕時計を確認した。

「利き腕に時計をはめる男は、水商売の男が多い」

ウソか本当かは分からなかったが、以前そんな事を聞いた事がある梓は、その事でいつも男をからかった。

男のたくましい腕と長い指を持つ手は魅力的で、何故か「利き腕に時計をはめる」その事を色っぽく感じた事もあった。

「14時から東京港区芝公園にある、ガーデンリゾートホテル本部で定例会議」

男のスケジュールは分かっていた。

そして、その後……男は妻が待っている横浜に向うのだろう

……

男から漂う一途な雰囲気で、梓はそう確信した。

……男は妻に何を告げるのだろうか？……

チェロキーはゆっくりと発進した。

純正のメッシュのホイールをはいた、オーソドックスな黒のチェロキーリミテッドだったが、

直線的なスタイリングが、その男の魅力をそのまま表現しているようで、梓はその男が乗るチェロキーが好きだった。

駐車場からチェロキーが消えるのを確認して、運転席に乗り移りエンジンをかけエステイマを発進させた。

チェロキーは真っ直ぐ小淵沢ICに向う。ルートも分かっているので焦る事はなかった。ド

ライブテクニクには自信がある。ただ、気付かれさえないければいい……そして、タイミングと運命。

梓はハンドルを握りながら、助手席に置いてあったサンングラスをかけた。

駐車場を出て、ICに続く県道11号線に入ろうとした時、信号待ちをしているチェロキーを

確認した。すぐ後ろに着くのを避けて2台車を見過ごした。

片側一車線の県道はオンシーズンに入っていたが、雨の平日のせいか車も少なかった。梓の

運転するエステイマはチェロキーの三台後に続いた。

IC近くの信号で前の2台の車が車列を外れたため、ウィンカーを出して車を止め、ICに

向うチェロキーを見ていた。チェロキーがICに入ったのを確認して、一分程してからICに

向った。

中央自動車道に乗った時には、チェロキーの姿はなかった。スピードを上げて追い越し車線に入り、チェロキーを探した。しばらくして、走行車線にいるチェロキーを確認する事が出来たので、車線変更をしてチェロキーの二台後に続いた。

カーステレオもカーラジオもかかっていないエステイマの車内は静かで、タイヤが拾う道路の振動音だけが響いていた。

「川村雄一郎……」

梓は二台前のチェロキーに向って呟いた。声に出して名前を呟いた時、また胸が疼き「恋しい」気持ちが始まり、涙が溢れそうになった。

男は、ハケ岳ガーデンリゾートホテルの総支配人で、交通事故で亡くなった梓の夫の菅原幸一の上司であり、その後、自分の上司にもなった。そして……一年半程、秘密の関係を持っていた「愛する人」であった。

男とは一度も一緒に外を歩いた事もなく、梓が住む県営団地の小さな部屋が、いつも逢瀬の場所だったが、一週間に一度が二度、仕事帰りに訪れる男が待

ち遠しく、その僅かな時間のためだけに梓は生きていた。

男が結婚している事は承知であったが、自分の前で、単身赴任で別居している妻の話を全く

しなかった事もあり、何の約束もなく不安定な関係であったが、その男と自分が過ごす時間が

幸せだった。

同じ職場にいたので「男の現実」を見る事があり、その時は辛かったが、それでも職場を変

えようとは思わなかった。会社で将来を嘱望され、トップに立っている「男の愛人」という秘

密の関係は蜜の味で、その事は自分自身が生きている証でもあった。

……だから、ずっとこのままで良かった。何も望まなかった
……しかし、そうであっても、

無理があった。知らなくていい事を知る事になった。

……知らなくてもいい事……

その事は、梓と男の関係では大事な事であった筈なのに……
あの時、耳を塞ぎ、目を瞑って

いれば良かった……でも、そんな事は誰だって出来ないだろう

……

男を妻から奪うために「偽装妊娠」の罠を仕掛けた。

男は梓と歩む事を決意してくれたが、罠の成功に酔った梓は、自身が原因で、男の真実に気が

ついてしまった。だから、男には何も告げず姿を消した。

「自分を探して欲しい」とは考えなかったが「男の中に、自分の存在だけは残しておいて欲し

い」思っていた。

チェロキーを見つめる梓の目から涙が溢れた。

「このまま、次のＩＣで下り、そのまま千葉に帰ろう……」
何故か、そんな気持ちになった。

……と、男の妻の顔が浮かんだ。

職場である横浜のホテルで会ったその妻は美しく輝いていた。

何より、人を見る眼差しが優し

くスツと引き込まれそうな魅力があった。もし、その妻が自分の「敵」ではなかったら、きっと

とその魅力の虜になり、その女性と出会った事で幸せな気分になっただろう。

チェロキーは安定走行で、エスティマと一定の車間距離を保っていた。

慎重な男の運転ぶりにも、仕事が済んだ後の行動が表れているように感じた梓に、再び嫉妬心が沸き起こった。

気がつくと勝沼ＩＣを過ぎていた。

その時、激しいエンジン音を響かせ、白いベンツが追い越し車線走り抜けた。梓は、一瞬躊

躇したが、白いベンツにつられる様にアクセルを踏み込み、スピードを上げて追い越し車線か

ら、チェロキーを追い抜かした。

横にチェロキーが並んだ時、チェロキーの運転席の「愛しい

男」と目が合った。

サングラス越しに男の顔を見たが、男は表情一つ変えなかった。

「私という事に気がつかなかったのか？」

その事が無性に悔しくなった。

バックミラーで追い越し車線に後続車が続いている事を確認し、少しスピードを緩めチェ

ロキーに並行して走行し、再度運転席の男に顔を向けた。

男は梓を一瞥したが、やはり表情は変えなかった。梓は自分を否定されているような気がし

た。今まで自分が大事にしていた時間、そして自分の人生そのものまでも、否定されているような気持ちになった。

「そうだとしたら……許さない！」
心を決めた。

軽くアクセルを踏み込みスピードを上げた。時速は100kmを軽く超えていた。

助手席側のドアミラーに写るチェロキーが少し後ろに下がった時、目を瞑って左に急ハンドルを切った。その事で、チェロキーがどうなるのか、どうでも良かった。

激しくブレーキを踏む音と、運転する男の悲鳴が聞こえた気がした。

アッという間の出来事だった。

急ハンドルを切った事で、エステイマの後部が右に横滑りを始めた。

梓は咄嗟に、横滑りした方向と反対方向にハンドルを切り進路を立て直し、無意識に死から逃

れようとして、自分を安全圏内に置いていた。

梓が運転するエステイマの目の前に笹子トンネルが迫っていた。

バックミラーを見たが、後続車の姿は確認出来なかった。足がガクガク震えたが、そのままハンドルをしっかりと握った。

追い越し車線をシルバーのセダンが焦ったように走り抜けて行った。

追い越される時にセダンのドライバーが、何か喚いているように思えたが、無視して真っ直ぐ前だけを見つめた。

第二章

「アツ、携帯を忘れた。戻ってくれる？」

橋本章二は、妻の美佐子に言われて舌打ちをした。

「人の事はうるさく言うのに、自分はいつもこうだ！」

章二はコンビニの駐車場から自宅に戻るため、自慢の愛車であるアウディQ5を発進させた。

自宅の駐車場に半分だけ車を入れ、すぐに発進出来る体制で美佐子を待った。

携帯を取りに行っている、というのに美佐子は中々戻って来なかった。

「何やってるんだ！」

イライラしてきた章二は車から降りて煙草に火を点けた。ヘビースモーカーだが、購入した

ばかりのアウディQ5は禁煙車にしている。短距離の時は我慢が出来るが、長距離を運転する

時はSAに寄る回数が増える。

「また、スモキングタイム？」

その度に、美佐子は呆れたように言う。

「うるさい奴だ」

アウディを買う時もそうだった。章二は、ボディカラーには

オプションで、紺系のデニム
シーブルーパールエフェクトを選んだ。

「標準のホワイトが上品でいいのに……こういう色はすぐに飽きるわよ」

美佐子が異議を唱えて、散々文句を言った。

「俺の退職金で買う車だ。文句は言うな！」
退職金の一言が効いたのか、美佐子はそれで黙った。

「ごめん、ごめん。彩香から電話がかかってきて、シューロールケーキを買って来て、だって」

「なんだ、そうか……」

可愛い一人娘からの電話で手間取っていたのなら仕方ない。
娘には甘い父親だった。

「あの時、携帯を取りに戻らなければ良かった」
思わぬ出来事が起きた時、そういう事を言うようになるのか？
それとも「あの時、携帯を取りに戻って良かった」そう言う事になるのか？

「たまには起きてもいいだろう」
そう思いたくなる程、自分達にはそういう言葉が無縁の平々凡々な夫婦だった。

「無事に生まれました」

娘婿である土屋和幸から、初孫誕生の報せをもらったのは、昨夜の１１時過ぎだった。女の子という事が分かっていて、予定日は７月７日の七夕という事もあり、娘の彩香は「織姫の織を使って、詩織という名前にするの」と言っていたが、予定より一週間程早く生まれてしまっただけで、無事に生まれた孫の誕生は、章二にとってこの上ない喜びであった。

精密機械メーカーを定年退職後、山梨県甲府市の SHIPPING モールの警備員をしている章二は、幸いな事に今日は公休日だった。

「おじいちゃん孝行の孫ね」と妻の美佐子に言われて、初孫との対面を章二は楽しみにして自慢の愛車で出発した。娘夫婦にもアウディＱ５が初お披露目になる。それが、美佐子の忘れ物で少し機勢を削がれた気分がしたが「今日は勘弁してやろう」そう思っていた。

「雨は小降りになったけれどスリップしやすいから、運転には注意してね」

自分で承知している事を美佐子から改めて言われて「うるさいな！」と思っただけ、今日は特別な日だ、と思っただけで心配しなくて大丈夫だよ」また、グツと我慢の笑顔で返事をした。

甲府昭和ＩＣから入った中央自動車道は、平日という事もあ

って空いていた。

本線への合流でシルキーゴールドのエスティマの後ろに連いた。

「レンタカーか……」

エスティマを見て章二はつぶやいた。

「お父さん、ハイッ！」

本線の流れに乗り安定走行を始めた所で、美佐子が、缶コーヒートのプルタブを開けて章二に

手渡した。いろいろうるさく言うだけあって、運転時の状況やタイミングを考えながら、運転

している章二を旨くサポートしてくれる。それに、車の中では口数が少なくなるのが有り難い。

その事には満足していた。

カーステレオからは、美佐子が自分で編集したCDの「懐かしいフォークソング特集」から、

イルカの「なごり雪」が流れていた。

美佐子は、窓外に広がる甲府盆地を眺めながら口ずさんでいる。おそらく、孫の事でも考え

ているのだろう。章二もまだ見ぬ初孫を思い浮かべて思わず笑みがこぼれた。

天気が悪い事だけが少し不満だったが、何の問題もなかった。前のエスティマや、後続の白いトヨタ車のハイブリッドカーとの車間距離は充分だし、まずま

ずのドライブ気分を味わっていた。

カーステレオから流れる曲は「さよならをするために」に変わった。

「誰の曲だっけ？」

切ないメロディを聞いて、年甲斐もなく、甘酸っぱい気持ちになった章二が美佐子に尋ねた。

「ビリーバンバンよ」

美佐子が窓の景色を見ながら教えてくれた。

勝沼ICを過ぎ、数分で笹子トンネルにさしかかろうとしている頃、白いベンツが重いエンジン音を響かせ、猛スピードで追い越し車線を走り抜けて行った。

「狭い日本、そんなに急いで何処に行く？」

昔の交通標語が頭に浮かんだ。安全運転を心がけているが「急ぎたい」自分もそんな心境に

なっている事に気がつき、苦笑いをした。

「いつ聴いてもいい曲よね？」

カーステレオのポリウムを少し上げながら、美佐子は章二に同意を求めた。流れる曲は

「22歳の別れ」に変わっていた。

「別れの歌ばかりだな」

章二がつぶやいた時、前方のエステイマが変な動きを見せた。

白いベンツに刺激されたのか、右にウィンカーを出し、車線変更をする素振りを見せたが、

躊躇したようにウィンカーを消し、そのまま走行車線を走り続けた。

「嫌な運転の仕方だな」

章二は一瞬不安な気持ちに駆られた。

サイドミラーで追い越し車線に車がないのを確認して、車線変更をしてエステイマを追い

抜こうかと考えた時、エステイマの前を走っていた軽トラックが、追い越し車線に入った。章

二もそれに続こうとウィンカーを出そうとした時、再度エステイマが、右のウィンカーを点滅

させて、追い越し車線に入りスピードを上げた。

「全く下手くそな運転だな！」

章二は思わず声を出した。

「どうしたの？」

その声に美佐子が反応して、章二に顔を向けた。

「あのレンタカーのエステイマ、嫌な運転なんだよ」

「傍に行かない方がいいわよ。気をつけてね」

美佐子も不安げな表情でエステイマを見ていた。

章二は更に嫌な気分になった。

エステイマの動きはやはりおかしかった。追い越し車線に入つたものの、余りスピードをあげ

ず、章二の前を走っている黒の4WD車の横にピッタリつけていた。

章二はバックミラーで後続車がないのを確認して少しスピードを緩め、4WDとの車間距

離を開けた。万が一……余計な事に巻き込まれる事を警戒した。

「あの車も嫌な気分だろうなあー」

そう言った時、エステイマが少しスピードを上げて4WDを追い抜いた。

そして……急ハンドルを切って走行車線に割り込んできた。

「バカヤロー!」

章二は思わず叫んだ。

「何よ! どうしたの!」

美佐子も叫んだ。

章二の目に、急ブレーキを踏んだためにコントロールが出来なくなくなり、スピンを始めた

黒の4WD車の姿が飛び込んできた。まるで、映画のワンシーンを観ているようで、現実の出来事とは思えなかった。

そこで章二の記憶が途切れた。

気がついた時は、章二の運転するアウディQ5は路肩に停まり、章二はハンドルにもたれか

かっていた。

一瞬記憶はなくなっていたが、渾身の力を入れてブレーキペダルは踏んでいた。慌ててギア

をパーキングに入れ、サイドブレーキを思いっきり引いた。何

が起きたか分からなかったが

た。

「美佐子！」

返事がない美佐子の肩を掴んで助手席に引き上げた。美佐子は真っ青な顔で震えていた。

「大丈夫か？」

助手席を倒して、黙ってうなづくだけの美佐子を寝かせた。

「怪我はありませんか？」

しばらくして、引きつった顔の若い男が運転席の窓を叩いた。

章二は、慌ててパワーウィン

ドウのボタンを押した。

窓が下がって、そこで初めて現実を見た。

高速道路上は悲惨な状況になっていた。

クライスラーのチェロキーだろうか、黒の4WDは中央分離帯に激突して、タイヤ付近から

白い煙が出ていた。

数人が、高速道路上を喚きながら右往左往しているのを

見て、章二も慌てて車外に出た。

チェロキーの様子を見た男が「ダメだ」と言うように手を大きく振っていた。

高速道路の上には、ハザードランプを点けた車が、あっちこっちを向いて停まっていた。

窓を叩いた男が「大丈夫ですか？」と再び声をかけたが「大丈夫です」かすれた声で答えて、

章二はそのまま車の横に座り込んでしまった。

「エステイマがいない……」

章二のつぶやきに「エステイマ？ 何なのですか？ 何があったか見てたんですか？」と男

が叫ぶように尋ねた。

言わなくてはいけない事があったが、章二はショックで声が出なかった。

第三章

1

「当機は、まもなく成田国際空港に到着いたします。成田の天候は雨、気温は摂氏26度……」

機内アナウンスが流れた。日本航空JL720便はゆっくりと下降を始めていた。

「遂に日本に帰って来たか……」

杉山直樹は、窓の下に姿を現した雨に煙る九十九里浜を見ながら呟いた。

大学を卒業して、横浜ロイヤルガーデンホテルに入社6年目に、杉山はハンティングされ、

外資系の「グランドオリエンタルホテル」に転職した。

転職と同時にソウルに3年間赴任し、インドネシアのバリ島で6年、そして日本に呼び戻され、

今度は東京の台場。

会社の転勤命令に逆らう事は出来ないが、長いようで短かった、9年の東南アジアでの水

テルマン生活にはまだ未練が残っていた。

飛行機は無事滑走路に着陸し、シートベルト着用のサインも消え、通路に並んだ乗客の列が

動き始めたが、杉山は降りる事に躊躇っていた。

しかし、いつまでもこのままにいる事も出来ず降機の覚悟を決めた。

機内からボーディングブリッジに移る時に、一瞬蒸し暑さが身体を包んだ。バリ島での生活

が長かったので蒸し暑さには慣れていたが、日本の蒸し暑さは何となく不快に感じられ「まだ

日本に帰って来たくはなかった」という事を改めて感じた。

荷物受け取りでスーツケースを受け取り、税関を通過して到着ロビーに向った。

午前8時半を過ぎた時間だったがロビーは人で溢れかえっていた。

「凄い人込みだなあ」

成田空港のように綺麗でりっぱではないが、バリ島デンパサールのングライ空港が懐かし

くなつてため息をついた。

当たり前のようにタクシーに乗ろうと思って、玄関口に向おうとした時「バリではないのだ」

と我に返った。思案して、電車を利用する事にした。ソウル時代は、何度か日本に帰っていた

が、バリ島に赴任してからは、5年前、母親の葬儀で帰国してから一度も日本には帰ってはいなかった。

「浦島太郎になつたみたいだな」

また、ため息をついた。

バリ島で、日本の事は手に取るように分かっていたが、いざ自身の足で踏み入れた日本に、

日本人であるのに違和感を覚えた。それ位バリ島での生活は杉

山に合っていた。

杉山が赴任していた場所は、ビーチリゾートで有名なタンジユンブノアだった。近くにある

又サドウアやクタに行けば日本食も食べられたが、一度も日本食が恋しいと思った事はなかった。

た。休みの日、ブラツと出かけたクタで必ず寄る場所は、ビーチに面したシーサイドフードコ

ートや、欧米人のサーファー等で賑わう裏通りのローカルな食堂で、中華やタイ料理、インド

ネシア料理を好んで食べた。

しかし、食べ物や生活スタイルはバリ式だったが、バリ島に赴任して一年目に知り合った、

バリ人女性との結婚では失敗していた。正式に婚姻届は出していなかったが、肌が綺麗で、チ

ヤミミングな女性との生活は半年と続かなかった。

理由は分かっていた。でも、それを認める事は嫌で、それからは、女性と付き合う事に慎重

になっていた杉山に、新しいロマンスは生まれなかった。

転勤先は、臨海副都心として、アミューズメント施設やショッピング施設が進出し、ファッ

ションナブルな街に変貌した台場で、新しくオープンした転任先の「グランドオリエンタル・東

京」は400室余りの客室を擁し、台場地区で一番の高さを誇っていた。

杉山の新しい職務は、現場の監査役という「インスペクター」であった。

客室は元より、ホテルにおける各種サービスや、施設の品質が、一定基準を守っているかどうか

かを、客の視点でチェックし、必要であれば改善命令も発動出

来る。その事の繰り返しが上質

のサービスを確立させ、顧客満足度の向上に繋がり更にホテルの質を高める。杉山に課せられた責務は重かった。

ホテルに到着し、外壁が総鏡張りの外観をまじまじと眺め、気を引き締めて杉山は、新しい

職場に足を踏み入れた。外国人を意識したのであるが、日本の伝統的な美と、現代的なモダ

ンさを取り入れた広大なロビーは、外観と全く別の顔を持っていた。余りの素晴らしさにしば

し見とれてしまった。

「帰ってきたか。待っていたぞ」

そう言って笑顔で握手を求めて来たのは、エグゼクティブ・

インスペクターの沢野井克彦だった。

「お久しぶりです。今日からまたお世話になります」

二人は固い握手を交わした。

「お前も随分と遅くなったな」

沢野井は杉山の肩を叩きながら、成長ぶりに目を細めた。

「まだまだ発展途上ですよ」

杉山は照れながらも笑顔で答えた。

沢野井はランドオリエンタル・ソウル時代のフロントでの上司であり、杉山を日本に戻した張本人であった。

「迎えにも行けず悪かったな。久しぶりの日本はどうだ？」

優秀なホテルマンである沢野井は、プライベートでは口数が少なくなる。饒舌さはないが、

常に部下を思いやり、細かく気遣う沢野井を杉山は尊敬していた。

「すっかり浦島太郎になった気分ですよ」

杉山は頭を掻いた。

「たまには浦島太郎もいいだろう。当分は浦島太郎に成りきつて、別の角度から日本を見てみるよ」

昔と変わらない温かい沢野井を感じて、杉山は、日本に足を踏み入れてから初めて、

安心感を覚えた。

沢野井から部署のスタッフを紹介され、業務の説明を受けて館内周りをして「週末までお前

はフリーだから、じっくり日本を自分の目で確かめて来いよ。

お袋さんの墓参りも忘れるなよ」

と言われ、ベルパーソンの案内で、当分の間滞在する事になる、デラックスビュースイートの

部屋に落ち着いた時には、夕刻になっていた。

まだ、杉山の正体を知らないベルパーソンの対応は、フロントとも上手く連携を取れている

ようで、印象が良かった。

職場であるホテルの部屋に初めて足を踏み入れた時に、肌でどんな空気を感じるのか？ 杉

山は神経を集中した。

ホテルであり、ホテルではないような、自分のくつろぎの空間の雰囲気、杉山を包み込んだ。そして、その後に感じたのはやはり「高級感」と「満足感」だった。

「杉山様、ごゆっくりお過ごしください」
部屋を辞去するベルパーソンに「ありがとう。素晴らしい部屋だね」満足した杉山は、思わず声をかけた。

「デラックスビュー・ツインでこの満足感だとしたら、他の部屋も期待出来るだろう」

黒を基調とした70平米程の広さの部屋は、オリエンタルムードに溢れていた。

大きな窓からはレインボーブリッジが望め、導線的にも無駄がなく、バスルームやドレッサー

ルームも程良い広さで、落ち着いた雰囲気があった。アメニティグッズは、植物素材を使用し

た南フランスプロヴァンス製品を使っており、種類も豊富で、女性客に喜ばれそうであった。

杉山は一通り部屋をチェックした後、真っ先に、壁に据え付けられたプラズマテレビのスイ

ッチを入れた。バリ島時代にはなかった事だが、日本に帰って来て、当たり前のようにテレビ

を点けた自分が可笑しくなって、思わず苦笑した。

テレビを点け、仕事モードから抜けた杉山は、黒檀のテーブル

ルに置かれたワインクーラーに入ったモエ・エ・シャンドンに目をとめた。

「これは常時のサービスではないだろう。好みを知っている沢野井さんからのプレゼントだ」

そう思つて、沢野井に内線電話をかけた。

「部屋の感想はどうだ？」と問う沢野井に印象を伝え、シャンパンの礼を言つた。

「一人で飲むのは勿体ないので、宜しかったらご一緒にいかがですか？」

杉山は沢野井を誘つた。

「招待はありがたいのだが、今日は里香の誕生日で、仕事が終わったら直帰しなくちゃならない。里香もこの春で中学生になったんだよ。たまには父親をしないと、しつぺ返しが怖いからな」

沢野井は嬉しそうに答えた。

「そうですか。里香ちゃんはそんなに大きくなりましたか！」
ソウル時代によく遊んだ沢野井の一人娘の里香の、おしゃま
で可愛い姿が目に見えた。

「僕からも、お誕生日おめでとう。と言っていたと伝えてください」

「ありがとう。伝えておくよ。里香も喜ぶだろうから、落ち着いたら俺の家でゆっくり飲もう。」

今日は残念だけど、帰国一日目をモエでゆっくり味わってくれ」

「早速、頂きます」

そう言って電話を切ったが、杉山は、上品な赤褐色かったピンク色のモエ・エ・シャンド

ンを、ワインクーラーから取り出して冷蔵庫に入れ直した。

一人で飲むのはやはり勿体なかった。

「後で電話をして、驚かせよう」

横浜ロイヤルガーデンホテル時代の上司である川村雄一郎、
と同期の川村真理の顔を思い浮

かべ、上手くスケジュールが合えば横浜に行つて、モエを三人
で飲もう、と決めた。二人には

話したい事がたくさんある。杉山はひととき昔の思い出に浸つ
た。

少しして過去から現実に戻り、杉山はモエ・エ・シャンドン
の代わりに、冷蔵庫の中のハー

フボトルの赤ワインを手に取った。

「甲州ワインか」

ホテルのミニバーではフランスワインが主流であつたので意
外な気がした。

「そうか！ 日本の社長が山梨出身か……」

杉山は納得した。

封を開け、クリアーな香りを味わった。少し酸味に欠ける気
もしたが、口当たりが優しく丸

みのあるワインを味わいながら、窓の外から見えるレインボー

ブリッジを眺め、週明けから始まる新しい仕事に思いを馳せた。

「死亡が確認されたのは、乗用車を運転していた神奈川県のかわむらゆついちろさん、43歳……」

「何？」

杉山の思考がそこで止まった。アナウンサーが告げる「かわむらゆついちろう」という言葉に敏感に反応した。

昼間起きた中央自動車道での大きな事故を伝えるテレビの前に立ち、リモコンを操作しよう

として「生のニュース番組だから巻き戻しは出来ない」という事に気が付き、慌ててチャンネルを変えた。しかし、切り替えても他のチャンネルでは、事故のニュースは流れていなかった。

少しの間、テレビのチャンネルを変えたりしていたが、バツグからパソコンを取り出し、電

源を入れた。パソコンが作動するまで苛立った。やっとgoogleのメイン画面が開き、

トピックスに事故のニュースを見つけクックしたが、死傷者の名前は載っていないかった。

「かわむらゆついちろうさん、43歳。確かにそう聞いた。チーフ？ 年齢は合ってる

……まさか？」

咄嗟の事で何をどうしたらいいか分からなかったが、取り敢えず携帯電話を手につた。

「ダメだ」

杉山の携帯はまだ日本では使えなかった。

2

何も確証がないのに、何故か心臓が大きく波打ってきた。

「冷静に考えろ」と自分を諭し、バッグから手帳を取り出し、客室用の電話の受話器取り、川

村雄一郎の携帯に電話をかけた。

「もしもし……」

聞き覚えのない声の男が応えた。携帯を変えたのだ、と思ったが「川村さんですか？」念のために訊いた。

「違いますよ」

相手は不機嫌そうに応え電話を切った。

次に、杉山は川村真理の携帯に電話をかけた。コール音が響いていたが、そのまま留守電に切り替わった。受話器を手に持ちながら考えて、今度は、ハケ岳ガーデンリゾートホテルに電話をかけてみる事にした。

「ありがとうございます。ハケ岳ガーデンリゾートホテル中澤でございます」

女性が可愛い声で応えた。

「杉山と申しますが、川村総支配人をお願いいたします」

気のせいか、相手が息を呑む気配を感じた。

「少々お待ちくださいませ」

相手の返答に「ホテルにいるのか。やっぱり人違いか」と少しホツとし、突然の電話にチー

フは驚くだろうな、と想像して胸が躍った。

「大変お待たせいたしました。総支配人は外出をしております、本日は帰社の予定はございませんが……」

消えかけた不安感がまた首をもたげてきた。どうしようかと考え「分かりました。ありがとうございます」と電話を切った。

万が一チーフに何かが起きたとしても、おそらく中澤という可愛い声の女性は、自分には、何も教えてくれないだろう。

思い余った杉山は、今度は横浜ロイヤルガーデンホテルに電話をかけた。ホテルに電話をするのは9年ぶりだったが、指はしっかりと電話番号を覚えていた。

「お電話ありがとうございます。横浜ロイヤルガーデン早瀬でございます」

ハキハキとした知らぬ女性の声が応えた。

「杉山と申しますが、ゲストサービス部支配人の矢沢……川村真理さんをお願いしたいのです
が」

旧姓を告げた事に思わず苦笑したが、やはりここでも電話の

相手が、一瞬身構えたような気配が伝わり気になった。

「大変申し訳ございません。川村は席を外しております」

川村真理はプレミアム・クラブに在籍している筈だが、フロントの電話に出た、早瀬という

女性が、直ぐに真理の不在を告げた事が意外だった。

どうしようか？ 杉山はまた考え「分かりました。恐れ入りますが、村上健司さんをお願いいたします」と告げた。

大陸的だが横柄な村上の顔が浮かんだ。

「かしこまりました。少しお待ちくださいませ」

懐かしい保留音が流れて来たが、その向こうで何かが起きている……そんな気がした。

「お待たせいたしましたして大変申し訳ございません。村上も席を外しております。館内かとは思

いますが、連絡が取れない様子ですので、宜しければご用件を承ります」

早瀬というホテルスタッフは、申し訳なさそうに答えた。

「そうですか。至急に確認したい事がありますので、村上さんにご連絡を取って頂き、これから申し上げます電話番号にご連絡を頂きたい旨、伝えて頂きたいのですが」

やはり何か起きている。直感した杉山は、何としてでも村上と話をしたかった。

「かしこまりました。早急に村上に連絡を取りますので、恐れ入りますが、ご連絡先をお願いいたします」

「ちよつと待つてください。すみません」

ホテルの電話番号を覚えていなかった杉山は、慌てて、名刺入れから沢野井の名刺を取り出した。

「お待たせしました。よろしいですか。電話は03-5550
……グランドオリエンタル・東

京 2310号室に宿泊しています杉山直樹宛にお願いします。

「

「確認いたします。グランドオリエンタル・東京、2310号
室杉山直樹様、電話は03-5

500……確かに承りました」

「お手数かけますが、出来るだけ早く連絡を頂けます様、くれぐれもよろしくお願いいたします」

「かしこまりました。杉山様のご用件は早瀬が承りました」

杉山は早瀬という女性の声が震えているように感じられた。

村上からはなかなか連絡がなかった。

「間違いであつて欲しい……」

村上からの電話を待っている間に、スーツケースを片付けよ

う、と思いスーツケースを開いたが、不安な気持ちが広がり、思うように片付ける事が出来なかった。

いつの間にかワインは空になっていた。冷蔵庫から缶ビールを取り出して飲んだ。日本のビールはコクがあつて美味しかったが、不安な気持ちの分、苦味が強かった。

客室の電話が鳴つたのは、7時のNHKのニュースが始まつた時間だつた。

「杉山です」

相手は村上だ、と確信して受話器を取つて応えた。

「直樹！ やつぱりお前か！」

何年かぶりで聞く村上の声は懐かしく、元気があり、その声を聞いた瞬間「心配は無用だつ

たかもしれない」という期待をまた抱いた。

「お久しぶりです。お忙しいのにすみません、電話を頂きありがとうございます。実は今日

バリ島から生還しました。今度はお台場で、インスペクターの仕事です。村上さんはお元気そうですね」

「俺は元気だよ。そうか……今日帰ってきたばかりか……それで俺に帰国の挨拶か？ 嬉しいよなあ……だが、そうじゃないよな。ニュースを見たんだろう？」

村上の声の調子が変わり、一度消えかけた不安な気持ちが戻って来た。

「見たって……？」

杉山はひとり言のように村上の言葉を繰り返した。

「……」

村上からの返答はなかった。

「見たって、という事はどいう事ですか？」

「……」

それでも村上からの返答はない。杉山に不安が広がった。

「やっぱり間違いないんですか？ チーフが……あの交通事故の被害者は、やっぱりチーフですか……？」

「何を言っているんだ？ 俺には分からない。日本語で話せよ」
村上は泣いているようだった。

「すみません。さっきテレビで大きな交通事故のニュースを見ました。アナウンサーが、亡くなつたのはかわむらゆいちろうさん、そう言っていました。その人は、横浜ロイヤルガーデ
ンホテル時代の僕の上司だった、元チーフの川村雄一郎さん、
そうなのですか？」

一言一言をゆっくりと話した。

「そうだ」

村上は、観念したかのように辛そうに答えた。

「何言っているんですか！」

信じたくない杉山は、村上を責める口調になった。

「昔みたいに、杉山が先走って余計な事を言って……だから、バカヤローって言うてくださいよ！」

杉山は声を荒げた。

「……」

村上からの返事はなかった。

「村上さん！ 聞いているんですか？」

「……」

「村上さん！ 今何処にいるんですか？ 真理はどうしていますか？」

杉山は必死に訴えた。

「真理は壊れた」

やっと答えた村上の嗚咽が受話器越しに伝わって来た。

「何がどうなっているんですか？ 村上さん教えてください！ チーフは僕にとって大事な人なのでしょ！」

「悪かったな…… 真理は今、山梨だ。真理の叔父さんと叔母さんと、俺のカミサンが一緒だ。」

俺は六角橋だ。居酒屋で飲んだくれている。以上だ」
村上は泣いていた。

杉山直樹は部署こそ違っていたが、横浜ロイヤルガーデンホテルで、村上も可愛がっていた
部下だった。転職し、久しぶりに帰って来た杉山の声を聞いて、
伝えたい事がたくさんあった

が、村上は悲しみが大き過ぎて話が出来なかった。

「村上さん、しっかりしてくださいよ！ 六角橋の何処にいる
んですか？ 今から行きます」

「本当か？ 来てくれるのか……」
杉山は村上の涙声を初めて聞いた。

「東神奈川からタクシーに乗れ。六角橋商店街入り口の漁火っ
て言えば、タクシーは届けてく
れるよ。早く来いよ！」

漁火という居酒屋の住所と電話番号を言い終わって村上は声
をあげて泣いた。

「すぐに行きます」
そう返事はしたが、焦っていて行動が伴わなかった。

洗面所で顔を洗って「落ち着け」と自分に向かって話しかけ「
財布、携帯、手帳、カードキー

……」と声を出してバッグに納めた。

部屋を出る時に、ハーフパンツとＴシャツに、ホテルのスリ
ッパ姿に気が付き、そんな自分

に悪態をついた。慌ててスーツケースから、ポロシャツとジー

ンズとスニーカーを取り出して

着替えたが、ポロシャツのボタンをはめるのに手間取って、イライラした。

台場から横浜の六角橋まで、どの経路で行ったら一番早く着けるのか？ 浦島太郎になった

杉山には分からなかった。

部屋を飛び出し、ホテルのロビーを出て、玄関前で待機していたタクシーに乗り込んで「横

浜の六角橋商店街まで。いくらお金を使っても構わないから、一番早く到着出来るルートを使

ってください！」

そう叫んだ。

第四章

1

ホテルマンとしての今の杉山直樹があるのは「川村雄一郎」のお陰だった。

大学を卒業して、横浜ロイヤルガーデンホテルに入社して、フロントチーフであった川村雄

一郎と出会った。学生気分が抜けない杉山から見るチーフは力ツコ良かった。

「自分もあんなカッコいいフロントマンになりたい」
杉山は雄一郎に憧れた。

最初は外見だけだったが、部下として雄一郎と接していく間に「ホテルマンとして、人間としての川村雄一郎」の姿を見て、目標にして行く事で、杉山は自身を高める事が出来るようになった。

グランドオリエンタルホテルから引き抜きの話があった時は、真っ先に雄一郎に相談をした。

雄一郎は、赴任先のハケ岳ガーデンリゾートホテルのガーデン・レジデンスルームを、杉山の

ために用意してくれていた。メイン棟から独立した、メゾネットタイプのレジデンスルームは、

自然と調和し開放感に溢れ、非日常の遊び心に富み、フロント支配人の雄一郎の人柄を表わす

かのように、この上なく居心地が良かった。久しぶりに会う雄一郎も、横浜ロイヤルガーデン

ホテル時代より、人間的にひと回り大きくなったような気がした。

杉山が「実は……グランドオリエンタルから引き抜きの話が来ています」と告げた時「遂に

そういう時が来たのか」雄一郎は感慨深げに答えた。

「ロイヤルガーデンホテルチェーンを、日本のライバルホテルや、外資系のホテルに負けない

日本一のホテルにしたい。俺はそういう気持ちで仕事をしているんだよ。そう考えた時に、君

の力が必要だから、正直に言う外に出したくはない。とは思
うよ」

杉山を見る雄一郎の目が少し淋しそうだった。

「だが、それは俺の夢だ。君には君の夢がある。君を縛る事は出来ない。『出てみたい』そう

いう気持ちがあるのなら『勉強してこい！ 羽ばたいてみる！』
って、その言葉を贈るよ。う

ん、俺は応援する。でも、俺も真理も君に負ける気持ちはない。
だから、その事だけは忘れる
なよな」

そう言っ、杉山に握手を求めてきた。

「ホテル業は素晴らしい、と思っているよ。世界経済を動かしているのは、政治家だし、経済

界、メーカーだったり、金融関連だったり、そうだよな？
だが、世界中を飛び回る『世界

を動かしている人物』を黒子としてある部分、陰で支えているのは『ホテル』なんだよ。俺は

そう思っている。だから、ホテルの仕事を選んだ。『ホテル』イコール『観光』とはまた別の

部分でさ。世界のトップクラスが世界中を飛び回っていて、滞在するホテルの居心地が悪かつ

たらどうなる？ きつと貧しい気持ちになってイライラして、広い視野を持った素晴らしい考

えなんて浮かばないだろうし、世界中の人間は不幸になる。そうさせないように、人間を豊か

な気持ちにさせる事がホテルの役目だ。そう信じているよ。それに添うように、ホテルマンも

自分を磨かなくてはならない。仕事が人間を成長させる。そして、人間が社会を成長させる」

雄一郎の目は輝いていた。

「この人は本当にホテルの仕事が好きなんだ。自分の仕事に誇りを持っているのだ」

杉山はそう感じた。自分もそうなりたいし、人に幸せや、勇気を与える事が出来るようになりたい。とその時に決心した。

外交官を目指していた杉山は、上級公務員試験にものの見事に失敗した。

有名私立小学校から、エスカレーター式に大学まで順調に進んだが、挫折を初めて味わった。

「落ち込み」から立ち直って、次に就職先を選んだのはホテルだった。

「別の角度で生の人間を見る事が出来る」

ホテル業を選んだ理由はその事だった。そして、ハンティングをされ、チーフである雄一郎

に相談した時に、自分に贈ってくれた言葉を聞いて「自分の選択肢は間違っていなかった」と

確信した。

ホテルマンも人間だから、理想とは程遠い事も多い。

でも、気持ちの何処かで、雄一郎からの教えをしつかりと受け止めていれば、自身の生き方も

前向きになり、小さい時から夢見ていた「世界を動かす人になる」裏方でも、その事に少しず

つ近づけられるような気がした。

だから……そういう事を教えてくれた「川村雄一郎」は、杉山にとって、かけがえのな大事

な人だった。

そして、それは雄一郎だけではなく、雄一郎のパートナーの真理も同じであった。

杉山と同期入社の矢沢真理も「川村雄一郎」に傾倒していた。

価値観が同じなのだろうか？ 「あの二人は似ている」と杉

山は感じていた。

川村雄一郎も矢沢真理も外見だけではない、内面からの魅力に溢れていた。一緒にいると「気

持ちが豊かになる」そんな魅力があった。

「人間が好き」なのだ……杉山はそう解釈していた。

真理は、大学時代1年間留学していたので、同期であっても杉山よりは1歳年上であった。

少女がそのまま大人になったような真理には、最初は、年上というより、妹のような感情を抱いていた。それがいつの間にか恋愛感情に変わっていった。そして、お互いに励まし合いながら「早く一人前のフロントマンになろう」二人で毎日頑張っていた。

「美人が多い」と評判の横浜ロイヤルガーデンホテルで、真理の美しさは際立っていた。杉山は、そんな真理を複雑な思いで見っていた。

……今でもハッキリ覚えている。自分の中で、真理への感情が変化して行った瞬間の「ときめきの気持ち」と、その真理が、自分を恋愛対象として考えていない、と感じた時の「辛い気持ち」を……

カウンター越しの真理への目つきが特別な客も数多くいたし、実際に顧客に口説かれているシーンを目撃した事もあった。しかし、真理はいつもそういう相手に対し、その気がないのに煮え切らない態度で接し、相手に誤解を招かれるような素振りを見せていた。

そんな真理に、杉山は「嫌ならはっきりとNOと言わなくてはダメだ」と忠告した事あった。

「だって……むげに断るのは悪い気がして……」と真理はいつも言い訳していた。

相手をその気にさせて美味しい部分だけ頂く。そんな打算や旨いあしらいが出来ない、という事は分かっていたが、杉山はそんな真理が歯がゆかった。

「お前は勘違いしているんだよ。NOと言わないのが、優しさだと思っっているだろうけれど、

それは気が小さいだけなんだよ。相手の事を考えたら、はつきりNOと言える勇気を持つ事が、人間としての優しさなんだよ」

杉山は何度も真理にそう説いた。

サッカーリーグの花形プレイヤーから、真理は、かなりしつこく言い寄られていた事があった。

「杉山君、今晚私と付き合ってくれろ？」

入社して約3ヶ月が経ち、夏休みを控えホテルも忙しくなり、少しだけだが、フロントマン

の何たるかも分かり始めた頃、杉山は真理からそんな誘いを受けた。

「今日は特に予定もないから、付き合ってもいいけどさ……」

早番のその日は予定もなく、シフトが終わったら、磯子の独身寮に帰るだけだった杉山は、カッコつけて誘いを受けた。

「良かった！ 6時に新山下のアジヤンタに来てね」

真理からそう言われて、杉山は、言葉とは裏腹にイソイソとした気持ちで、新山下にある多

国籍パブに向った。

着いた時に、アジヤンタの入り口で真理が不安そうな顔をして杉山を待っていた。

「何だよ。店に入って待っていれば良かったのに」と言う杉山に、花柄のクラシックな雰囲気のリゾートドレスに、Gジャンを羽織ったチャームिंगな真理は笑顔を見せた。

モデルのような真理と、ひと時を過ごせる事を幸運に思った杉山は、大人ぶって真理をエス

コートした。若者に人気の「アジヤンタ」は、6時というまだ日が暮れない時間帯にも関わらず、ほぼ満席状態だった。

店内に入り真理が誰かを探している様子を見た時、杉山は一瞬嫌な予感がした。

その時、横浜港に面した窓側の席にいる男が、真理の姿を見つけ手を上げた。

その男は「真理にご執心」とホテルで噂されていた、Jリーガーの三橋大輔であった。

杉山は真理と一緒にいる自分の姿を見て、三橋の顔が曇るのを見逃さなかった。

「そうか、そういう事だったのか」

三橋と二人きりで会う事に躊躇った真理が自分を誘った。そ

の事に気が付き「自分は邪魔者

かもしれない」そう思ったが、三橋と真理を、二人つきりにさせる事の方が嫌だった。

「待たせちゃったみたいでごめんなさい」

真理は、杉山や三橋の気持ちに気付く様子もなかった。

「ホテルの同期の杉山君です。杉山君は知っているでしょう？
」リーガーの三橋さん。

今日は誘って頂いてありがとうございました」

悪びれる事なく、真理は杉山を三橋に紹介した。

真理に向ける三橋の顔は真の笑顔だったが、杉山に向ける三橋の笑顔は引きつっていた。

そして、杉山は、テーブルに置いていた、おそらく真理へのプレゼントだったのだろう、リ

ボンがかかった小さな箱を、三橋がさりげなくバッグにしまうのを見た。

「真理は世間知らずのバカだ！」

三橋大輔の気持ちを考えて、この場を去るのが懸命だと思っ
たが、出来なかった。

それは「真理の事が好き」なだけではない「悪気のない真理の
気持ち」……それを感じて「真

理を守る」事に決めた。それに、自分が居なかったら、真理は
三橋に食われるかもしれない……

それだけは絶対に阻止したかった。

3人のデートは杉山にとっては最悪だった。

三橋はさすがにエンタティナーで、その場を盛り上げるのが上手かったが、杉山を見る目だけは「普通の男」でしかなかった。

杉山は、結局その日は最後まで三橋と真理に付き合い、三橋の憎まれ役になった。

その後、三橋がホテルに現れる事はなかった。

真理は素直で純粹だったが、その純粹さが時には「残酷」になる事もあった。

それで自分と同じように辛い気持ちを味わったスタッフもいる。そうだ……村上さんだ……真理の夫の川村雄一郎の親友であり、後に真理の上司となった村上健司だ。仕事に厳しい村上の真理を見る目だけは優しくかった。

杉山は真理が好きだったから、真理の事はよく分かっていた。同じフロントマンでも、シフトが一緒になる事は少なかったが、真理が出社後、フロントオフ

イスに入って真っ先に何をするかも分かっていた。

出勤して最初にする事……まず、フロントオフィスかフロントカウンターを見て、上司であるチーフの川村雄一郎の姿を探す。そして居なかった時、オフ

イス内のスタッフスケジュール表

で、チーフの出勤スケジュールを確認する。そんな事をしなくても、チーフのシフトは頭に入っていた筈だ。

そして、チーフの真理への思いにも気付いた。

二人の思いが一緒だったら、それが成就するのは時間の問題で、その過程を、脇でじつと見

ているのは辛かった……だから、飲み会にチーフを誘い、酔ったチーフのエスコート役に真理

を付けた。その事で自分の気持ちに決着をつけ、杉山は決着を付ける事が出来た。

二人は杉山の計らいで急接近し、電撃結婚を遂げた。

その事を知った時、杉山は「辛い」とか「悲しい」という気持ちは沸かず、真理が幸せになる事、それが自分の幸せになる。そう思っていた。

「本当に愛するという事は、愛する人が幸せになる事を喜べる気持ち」

青臭いそんな事を思っていた。

それでも、二人の結婚式が近づき、真理から「私の友人としてスピーチをお願いね」と頼ま

れた時には、青臭い夢の世界から現実に戻り、自暴自棄になり「悪さ」をした。

「悪さ」をしたその相手の女子高生がある日、ホテルに乗り込んで来た。逃げる杉山に代わっ

て、真理が内密で対応してくれたお陰で問題にならず、会社に知られる事もなかった。

どうして真理が事を旨く納めてくれたのか、杉山は分からなかった。

「彼女がありがとう。って言っていたのよ」と言うだけで、何も教えてくれなかった。

相手から「ありがとう」と言われる筋合いもなく、深く追求しなかったのだが、怖くて出来な

くて、だからそれで終わりにしたが「いつか真理に聞いてみた

い」とずっと思っていた。

雄一郎と真理と接し、人間との「心の繋がり」を基本として、ホテルマンの仕事の極意を学んだ。そして、今の自分が出来上がった。

「川村雄一郎」は自分の手本であった上司であり、ホテルマンとしての自分を作り上げてくれた大切な人でもあったが、この世を去った……

「川村真理」はかつて自分が愛した女性であったが、その真理が壊れてしまった……しかも……

自分が日本に9年ぶりに帰って来たその日に。杉山は運命の巡り合わせを呪った。

2

「お客さん、六角橋に着きましたけれど、お目当ての場所は何処ですか？」

タクシー運転手の問いかけで、杉山は過去から現実に取り戻された。

「ここなんですけれど……」

村上から聞いた住所が書かれたメモを運転手に見せた。運転手は住所をナビに入力し「すぐ

近くですよ。店の前までは行かれないから、此処で降りた方がいいですよ」とナビを指差しながら親切に教えてくれた。

「日本は凄いな」

浦島太郎が顔を出した。

ホテルを出てから一時間も経っていなかった。運転手が料金を告げたが、一刻も早く、村上

に会いたい事だけを考えていた杉山は、金額も聞いていなかった。札入れから一万円札を2枚

取り出し「ありがとうございます」と言つて運転手に渡した。

早く村上がいる漁火に到着したい事で、頭がいつぱいだつた

杉山は、渡したお金が妥当かど

うか分からなかった。運転手はつり銭を渡す素振りを見せたが、その時にはタクシーを降りていた。

「漁火」はすぐに見つかった。はやる気持ちを抑えて店内に入つた。

「いらつしゃい！」

カウンターのの中にいる、粹な雰囲気のマスターが杉山を迎えた。杉山を見て、マスターは察

したのか、襖が閉まっている奥の部屋を指差して「待ってますよ」と案内した。

杉山は、襖の向こうがどういふ状態になっているか不安で、少しの間、襖を開けるのを躊躇

つた。マスターが、生ビールのジョッキと数種類の肴をトレイに乗せ「大丈夫ですよ」と促した。

「失礼します」

声をかけて恐る恐る襖を開けたが、村上の姿は見えなかった。

「杉山です」と声をかけた時、村上がゆっくりと起き上がった。

「おう！久しぶりだな」

村上は杉山を見て笑顔に向けたが、心なしかその笑顔は悲しげに見えた。

「おやじさん、俺の後輩のワヤンだ。今日、インドネシアから入国したばかりの、バリバリのバリ人だよ」

村上は、バリ島に多くある名前で、トレイをもったマスターに杉山を紹介した。

「通りでいい色に日焼けしていると思ったけれど、そうですか……インドネシアの方ですか」

漁火のマスターは、村上の話を真に受けていなかったが、本気で杉山をインドネシア人だと思っているようなフリをした。

……今日の村上さんには、逆らわない方がいいだろう……何となくそんな事を感じていた。

「ごゆっくり」

マスターはテーブルにビールと肴を並べ、静かに襖を閉めた。

「村上さんは相変わらずですよ。マスターは本気で、インドネシア人と思っっているみたいでしたよ」

そう言っても杉山は、くだらないジョークを言う村上が結構好きだった。

村上と会うのは5年ぶりだった。

バリ島に赴任した翌年の冬に、家族を連れて遊びに来てくれたが「サーフィンをやるために来た」とカッコつけていた。たった一度だけサーフィンにトライしたが、一度もボードに乗る事が出来なくて、仏頂面でビーチでビールを飲んでいた姿を、杉山は思い出した。昔からの横柄な態度は変わらなかったが、人間的に丸味が出てきたように感じた。

「村上さんには勿体ないような奥さんと、村上さんには似ていなくて、幸せなお子さんはお元気ですか？」

杉山はさっきのお返しをした。

「苦勞の人生をそのまま描いたような、俺の哀愁漂った顔を見れば分かるだろう。元氣過ぎて困る」

家族の話題を出されて、言葉とは反比例して村上は笑顔になった。笑うと出来る目尻の皺が優しそうだった。

「飲んだくれている」と村上は言っていたが、実際は、ビールをジョッキ一杯飲んだ程度で、ウイスキーのボトルは封を開けていなかった。二人は、マスターが用意してくれた生ビールで乾杯をした。

「不法入国早々で疲れているのに、よく来てくれたな」
村上の言葉遊びに、杉山は声を出して笑った。

「村上さんこそお元気そうで、いつ出て来たんですか？」

「俺は今回は恩赦だ」

真面目顔の村上を見て、杉山は腹を抱えて笑った。

「5年ぶりの日本で、最初の大笑いと飲み相手が村上さんで、前途多難ですが、思いがけずお

会い出来て嬉しいですよ」

会えたきっかけは辛い事だったが、先輩である村上との再会は懐かしくもあり、嬉しい事だった。

「俺を見て、しっかり学習しろよ」

村上も嬉しそうだった。

「ところで、グランドオリエンタルはどうだ？」

「ソウルもバリも自慢出来ますけれど、東京はそれ以上に見事です。ハード面ですけれどね。」

ソフト面は、これからじっくり見る事になります」

「インスペクターは神経を使うな」

「正直言って、職責重くてプレッシャーかかってます」

「感覚が鋭くて、細かい部分に目が届くお前ならではの仕事だ

な。益々、磨きがかかっただろ

う？」

村上は、杉山の姿に雄一郎を重ねた。

「いやー、どうですかね。バリで結構楽しんじやいましたから」

「村上さんはどうですか？ 横浜ロイヤルガーデンも、世界の名ホテルに名前を連ねて、僕も、

未練心沸いたりしちゃってたんですよ」

「辞めた会社に未練を持つ、という事は悪い事じゃないよ。それはお前が、ロイヤルガーデン

での時間を大事にしていた、という証拠だと俺は思う」

辛い話は後回しにしたいのだろうか。村上はバッグからキャメルの煙草を取り出し、セロハンを剥がした。

「この刺身、最高に美味いですね」

杉山は漁火の刺身に舌鼓をうちながら、村上の動作をじっと見つめた。

神奈川県が4月から施行した、ホテルにとって少なからずも影響がある、受動喫煙防止条例

については、バリ島にいる杉山も知っていたし、ホテル業界誌で「横浜ロイヤルガーデンホテ

ルは、社員に自主的な禁煙指令」という記事も読んでいた。会社からの通達には、いち早く反

応する村上はそれに従ったのだらう。しかし、ここに来て、禁を破らざるを得ない精神状態に

なった。キャメルのセロハンを剥がす事と、火を点ける時に使

っている「漁火」とロゴが入っ

た真新しいライターが、その事を物語っているようだ……と杉山は考えていた。

「バリだつて、美味しい刺身が食えただろう？」

煙草に火を点け、天井に向けて煙を吐き出した村上が訊いた。

「日本料理店もたくさんあったから不自由はしませんでしたが、やっぱり、日本で食べる刺身が一番美味しいですよ」

お互いの気持ちの中に、引っ掛かっている事があるためか、時間が経つにつれ、会話が擬古地なくなった。

……村上さんから切り出してくれればいい……自分から切り出す事が出来なかった杉山は、それを望んでいた。

「水かお湯かソーダで割るか？」

村上はウィスキーのボトルに手をかけて、杉山に尋ねた。

「ハイボールをお願いします」

先輩である村上に酒を作らせる事に恐縮したが、杉山は甘える事にした。

「せっかくお前が帰って来たのに、お前の成長した姿を見れなくて、川村は悔しいだろうな」

ハイボールのグラスを杉山の前に置きながら、やっと村上が

口火を切った。

その言葉に杉山の胸に熱いものがこみあげた。「死んだ」というような直接的な言い方より、

何故か、遠まわしの言葉が胸を突いた。

「何処で二ニュースを見た？」

村上は無表情で尋ねた。

「仕事が終わって、会社が用意してくれたホテルの部屋です」

杉山にとっては因縁でしかなかった。

あの時、部屋のテレビを点けていなかったら……もし、一日早くか、一日遅く日本に帰って来たとしたら……おそらく、大事故だったとしても、起きた事故のニュースに気を留める事はなかっただろう。

「どうして、こんな事になったのですか？」

「川村は、本部の会議に出席するための道中で事故に巻き込まれたらしい。俺も直接聞いているわけではないから、詳しい事は分からない。夕方、山梨にいるカミサンから連絡があったが、その時点では警察から詳しい話は聞けていない。事故に合ったのは、あいつの運命だったんだよ」

「運命……なんて、そんな簡単な事じゃないですよ！」

「バカヤロー！ 誰が簡単だ、って言ったんだよ！俺は運命だ。って言っただけだ」

取り乱したが、すぐに村上は「悪かったな」と杉山に頭を下げた。

「食堂で、昼飯を食べながらテレビを観ていたら事故の速報が入った。川村の予定を知ってい

たから、事故の事を伝えようと思って、あいつの携帯に電話をかけたが、ドライブモードにな

っていて繋がらなかった。心配になって八ヶ岳に電話をしたら、ホテルを出発している事を知

った。何度も携帯に電話を掛けたがドライブモードは変わらなかったし、あいつから連絡はな

かった。警察に確認しようと思っていた時、警察から真理に連絡が入った。真理が携帯を落と

した音を聞いた事までは覚えているが、その後の事は全く覚えていないだよ。さつきホテルか

らの電話で聞いた話だと、俺は、真理が落とした携帯を拾い警察と話をして、八ヶ岳ガーデン

リゾートに電話をした。会社に報告して、それから、真理の叔父さんに連絡をして、俺のカミ

サンにも電話をして、真理を山梨に向わせる手筈を整え、執るべき行動は全て執っていたらし

い。ついでに、俺の息子にも連絡を取って、母さんは出かけるし、父さんも今日は帰れなくな

るかもしれないから頼む。と一応親父の役目も果たしていた。だが、俺が気がついたのは、お

前と電話をしていた時だったんだよ」

村上の表情は悲しげだった。

「チーフの身内はいらっしゃらないのですか？」

「川村も真理も一人っ子で両親は亡くなっているから、近い身内は、真理の叔父さんと叔母さんぐらいなんだろう」

「そうなんですか……村上さんは山梨に行かなくて大丈夫なのですか？」

「俺が行ったって何の役にも立たないよ」
態度がデカイ村上……の面影はなかった。

「真理が壊れた……って。真理はどうなったのですか？」

「真理がどうなったか？　って俺は全く覚えていない。カミサンの話だと、表向きは気丈に振る舞っている、と言っていたが……だけど、真理の気持ちを考えたら、壊れたんだろう。そう思っただけだ」

「僕は日曜日までフリーです。だから、何か出来る事はありませんか？」

その時、村上の携帯が鳴った。
「弓恵」という着信名を確認して「どうした？」開口一番に尋ねた。

「司法解剖が終わったから、これから川村さんを横浜に連れて帰ります」

弓恵の声はしつかりしていた。

「司法解剖？ 何だ！ 川村に何をしたんだ！」

村上は電話に向って叫んだ。

「お願いだからそんなに興奮しないで。詳しい事は帰ってから話すから。警察が、葬儀社の車

を手配してくれているので、また出る時に連絡するけれど。パパには、真理ちゃんのマンション

ンに行つて、川村さんを迎える準備をしていて欲しいの。真理ちゃんのホテルのデスクの一番

上の引き出しに、マンションの合鍵が付いている鍵の束があるの。レザーの飛行機のキーホル

ダーが付いているからすぐに判ると思つて。パパ、酔っ払っているみたいだけれど大丈夫？」

「バカヤロー。お前は俺を何だと思っているんだよ！」

「パパ、お願いだから落ち着いてね。真理ちゃんもしつかりしているのよ。じゃあ、頼んだ事

お願いね」

電話は弓恵から切られた。

「司法解剖をしたんですか？ どうして？ 交通事故で……」

「出番だ。これから、ホテルに合鍵を取りに行つて川村のマンションに行くぞ」

杉山の問いかけには答えず、村上は腰をあげた。

「おやじさん、急用だから今日はこれで帰るよ。じっそうさん」

村上は一万円札をカウンターに置き、外に出た。

「ごちそうさまでした」

杉山も慌てて村上の後を追った。

「お前も入れよ」

横浜ロイヤルガーデンホテルの従業員入り口で、村上は杉山に中に入るように促した。

「僕はここで待っています」

9年ぶりに訪れた古巣は懐かしく、中に入れば、懐かしい仲間との再会が待っているだろう

が、今はそういう気分ではなかった。

「そうか」

村上は従業員入り口の重い扉を開いた。

「待たせたな」

そう言つて、村上が出て来たのは30分後だった。

「川村が着くのは12時過ぎになるらしい」

歩きながら村上がポツリと言った。

「待ってますよ」

二人はタクシーに乗り込んだ。

雄一郎と真理のマンションに足を踏み入れた村上は「ここに来る時はいつも辛い時だ」

とため息をついた。

初めてこの部屋を訪れたのは一昨年 of 年末だった。あの時、真理が子宮外妊娠で、子供をダメにして、そして、雄一郎を慰めるために訪れた。ホテルで真理は具合が悪くなり、村上は救急車で付き添ったのだが、駆けつけた雄一郎にいきなり殴られた。あの時、殴られた唇は切れて腫れあがりかなり痛かった。それでも、心の痛みはなかった。

部屋の中は蒸し暑かったが綺麗に片付けられていた。リビングに入って、ダイニングテーブルの上に飾ってある、ピンクのガーベラの花が真理の気持ちいを物語っていた。

「真理は川村が、この部屋に帰って来るのを心待ちにしていたのだ」

村上の胸に熱いものがこみ上げてきた。

辛い気持ちに背を向けて、ベランダに面した掃き出し窓を開けると、運河の方向から涼しい風が流れ込んだ。

杉山は、雄一郎と真理のマンションに初めて足を踏み入れた時「人の匂いがしない」と感じ

た。リビング・ダイニングルームは、アイアンと籐とガラスを上手く使った、お洒落な丸いダイニングテーブルセットが置かれ、籐のコーナーソファが程良く配置された、いかにも真理が好きそうなアジアチックで、お洒落な部屋だったが、二人が営んでいたであろう、幸せな家庭生活の気配がなかった。

「二人の間に何かあったのか？」
そんな思いが杉山の頭を過ぎった。

カウンターの隅に飾ってある2つのテディベアを見て「雄真と理子って、誰ですか？」
杉山は村上に尋ねた。

「川村と真理の子供だよ」
村上のその一言で全てを察した杉山は、それ以上質問はしなかった。

第五章

1

雄一郎が帰って来た時は、日付が変わっていた。

真理は杉山の姿を見つけ「帰って来たの！」と懐かしさの余り思わず抱きついた。

「川村がやきもちを焼くぞ」
村上が二人を睨んだ。

「やきもちを焼いているのはパパじゃないの？」
弓恵の言葉に全員が笑った。

白い布に包まれて、葬儀社の大きな車に納められているのが「川村雄一郎」とは、誰も思っていなかった。「川村雄一郎は生きて其処にいる」そう思っていた。

新たな悲しみに包まれたのは、和室に寝かされた雄一郎の姿を、改めて確認した時だった。

「チーフ！」

そう言つて杉山が嗚咽を漏らした。真理の叔母の矢沢友美が、ハンカチでそつと目頭を押さえ、

叔父の矢沢勲は、涙を流しながら雄一郎を見つめ、村上は、声を殺して泣いていた。

「真理ちゃんは傍に付いていてあげなさい」と言う弓恵に「大丈夫よ」と、真理はキッチンで酒の用意を始めた。

「本当に今日はありがとうございました。みんな疲れていると思うし、遅くなっちゃったけれど、雄一郎さんのために献杯をしてくれる？ 久しぶりに帰って来た横浜で、大好きなみんなに迎えてもらって、喜んでいると思うの」

雄一郎の枕元にビールを供えて、真理はみんなにビールを奨めた。

「お帰り！」

叔父の勲の音頭で、全員が雄一郎に向ってグラスを持ち上げた。

「紹介が遅れてごめんなさい。私の叔父の矢沢勲と叔母の矢沢友美よ。こちらが、雄一郎さんの親友の村上健司さん、雄一郎さんの可愛い部下だった杉山直樹君。ずっと、バリ島に赴任していたの」

真理はみんなを見回しながら、笑顔でそれぞれを紹介した。

「杉山です。正確に言うと、来週からお台場のグラウンドオリエンタル・東京に赴任します。横浜

ロイヤルガーデンでは、川村さんにお世話になっていました」
杉山は頭を下げた。

「でも、本当に良く来てくれて……」
しばらくの間は杉山中心の話題となった。

「これからはどういう予定になっていますか？」

杉山の話が一段落し、沈黙が訪れそうになった時に村上が口を開いた。

「4日の日曜日が通夜で、5日に葬儀を考えています」

叔父の矢沢勲がそう答えた。

「事故の方も、急ブレーキを踏んだ事が引き金になったようですが、一番の原因元ではないよう

なので、過失を問われる可能性も少ないだろうと考えています」

「一番の原因元と言うのは、どんな事だったのですか？」

今度は、杉山が口を開いた。

「走行車線を走っていた川村君の車の前に、急ハンドルを切つて割り込んだ車があったそうです。

その車は逃走してしまいましたが、目撃者もいるし、高速道路なので、追跡も可能で犯人逮捕は

時間の問題でしょう」

勲の言葉を受けた村上が「自動車運転過失致死罪か、状況によつては、危険運転過失致罪にな

るだろうな」と、苦しげに答えた。

沈黙の時間が流れた。

「殺人罪……」

ポツリとつぶやいた真理の言葉に、ハツとなった全員が真理

を見た。

真理は震えていた。叔母の友美がハンカチを目頭にあてた。弓恵が泣きながら真理を抱きしめ

たが、真理だけは泣いてはいなかった。

「壊れている……」

杉山は真理を見てそう感じた。

「真理の言う通りだ」

言った村上に、弓恵が「刺激しないで」と言う様に首を振った。

「明日、警察から連絡が入る事になっています。そうすれば詳しい事も分かるでしょう」

叔父の勲が口を開き、部屋の空気がピンと張り詰めたようになつた。

「真理ちゃん、私達はこれで失礼するけれど、今日は雄一郎さんと二人でゆっくりしてね」

真理を一人残す事には心配もあつたが「二人つきり」を、雄一郎も真理も望んでいるだろう。

そう思った叔母の友美が、重苦しい空気を振り払うように真理に言った。

「そつだな。また、明日午前中に来るよ」

勲も腰を上げた。

「私達は明日の午後に来ます。お前はどうする？」

叔父夫婦の様子を見て、村上也腰を上げながら、杉山に尋ね

た。

「自分の仕事を優先しろよ……これは元チーフの彼の言葉よ」
弓恵に肩を抱かれたままの真理が、杉山に声をかけた。

「分かりました。お言葉に甘えてそうさせて頂きます。日曜日の早い時間にまた伺います」

真理を見ずに……真理の顔が見れなかった杉山は、雄一郎に向って頭を下げた。

「お前はホテルに帰るのか？ 良かったら家に泊まるか？」
村上が再び杉山に尋ねた。

「ありがとうございます。初日なのでホテルに帰ります。お氣遣いありがとうございます」

杉山は丁寧な頭を下げた。

2

みんなが帰った後の部屋は急に静かになった。

雄一郎と我が家で「二人つきり」は久しぶりだった。

いつだったのか？ そう……あれは3月の始めだった……ダイニングテーブルに向かい合って、

雄一郎から「別れて欲しい」と突然に離婚を告げられた。あの時も、現実味が沸かなかった。

そして今も。でも、ずっとそうだったのかもしれない。雄一

郎と過ごした時間の全てが現実で

はなかった……そんな気がした。

警察で雄一郎と対面した時「雄一郎がいなくなった」その実感は沸かなかつたから、真理は泣

かなかつた。じつと黙って夫を見つめている妻を見て、おそらく警察官も、他のみんなも不思議に思っただろう。

横浜ロイヤルガーデンホテルに入社して、社内新人研修も終わり、フロントマネージャーに案

内されたフロントロビーで、初めて雄一郎と会った。

カウンター内で数人のフロントマンが接客を行なっていたが、新人の真理の目から見ても、雄

一郎の接客ぶりが一番スマートであった。その姿に見とれていた真理と、笑顔で客を見送った雄

一郎の目が合った……その瞬間、真理は雄一郎の虜になった……

初めてフロントカウンターに立った時「立つ位置が後ろ過ぎるよ。もう少し前に出なさい」と、

軽く背中を押された。背中を押す、チーフである雄一郎の手は優しくて温かった。今、胸の上で

固く結ばれている手は、二度と真理の背中を押してくれる事はない。

しばらくの間、静かに眠っているような雄一郎を見つめていたが、雄一郎に、伝えたくても伝

えられなかった言葉が頭に浮かんだ時、胸の中に熱い塊がこみ上げて来た。

深夜に雄一郎から電話があった。あの時、雄一郎は泣いていた。

「何かあったのだろう。私に救いを求めて来たのかもしれない」
そう思ったら居ても立ってもいられず、横浜から車を飛ばして、山梨に向った。久しぶりに会

った雄一郎は憔悴しきっていたが「話せる時が来るまで、時間が欲しい」そう言った。

別れた後、自分の気持ちを伝えたい、と思ったが出来なかった。

「どうしてあの時、引き返して伝えなかったのだろう」

最後の最後に、雄一郎に甘える事が出来ず、素直に自分の気持ちが伝えられなかった。という

後悔の気持ちが身体中を駆け巡り、崩れ落ちそうになった。それでも、胸の中の熱い塊を飲み込んで涙を堪えた。

「ごめんね。あの時伝えなかったのに。バカで意地っ張りな私を許してくれる？」

「意地っ張りな真理が好きだったよ」
心の中に、雄一郎の声が聞こえた。

「あなたの事は許す。真理が愛する人はあなただけだから」
そう伝えた時、雄一郎の顔が微笑んだような気がした。

その時、音が部屋中に響き渡った。その音が自宅の電話の呼び出し音だ、という事に気がつく

まで少し時間がかかった。

慌てて電話に駆け寄ろうとした時、左胸がまたチクチク痛みだした。真理は手で胸をさすりな

がら、ナンバーディスプレイに「非通知」と表示された電話機を見つめ「こんな時間に誰だろう？

警察？」そう考えて「はい、川村です」と気丈な声で応えた。

「……」

相手からの返事はなかった。

「どちら様ですか？」

また、問いかけたが返事はない。

「無言電話？……もしかして……」

忘れたくても忘れる事が出来ない女性の名前と顔が浮かび、痛みもあつて早鐘のように打ち始

めた心臓が壊れそうになった。相手の気配を読み取ろうと、受話器を耳に押しあて様子を伺った。

受話器からは何の音も聞こえなかったが、相手も、真理の気配をじつと伺っているような緊張感が伝わった。

少しの間、双方で我慢比べをしていたが、我慢が出来なくなったのか、電話は相手から切られた。

「彼を奪われてしまう」

真理は急に不安になり、慌てて雄一郎の所に飛んで行き「もう、何処にも行かないでね」そう

言つて、しばらくの間、布団の上から雄一郎をきつく抱きしめ

ていた。

「今まで一度も無言電話なんてかかって来た事はなかった。それなのに、こんな時に……」

恐ろしい考えが頭に浮かんだ。

「真実を突きとめるからね。だからそれまで……まだ、私は泣かないの。約束するから、分かっ
てね」

約束したが、約束はすぐに破られた。

雄一郎は今度は「分かったよ」とは真理に言っではくれなかった。急に涙が溢れ、真理は、い
つまでもいつまでも雄一郎にすがって泣いていた。

3

菅原梓は公衆電話のフックをゆつくりと指で押した。

返却口に戻される小銭の音に驚いて思わず辺りを見回した。深

夜の住宅地は、人通りもなく静ま

り返っていたが、自宅近くにある公衆電話ボックスの中から、
しばらくの間は出る事が出来な
った。

自分が起こした行為が原因で事故が起き、男が死亡した事は
知っていた。明日になれば、警察

が自分を逮捕するために訪れるだろう。全て承知していたが、

たった今聞いた、名前も呼びたく

ない「男の妻」の冷静な声には承知出来なかった。自分が犯した事に悔いはなく、満足していた

が「男の妻」には満足出来なかった。

「男の妻」の傍には「永遠の眠りについた男」がいる筈だ。悲しみに打ちひしがれ、深夜の電話

に取り乱し、涙声の妻を想像して期待していたが「男の妻」は、横浜のホテルで聞いた凜とした

声と同じだった。

「あの女はいつもそうだ。私を不安にさせる。でも、幕があがったのよ。これからが勝負」

梓はひとり言を言って電話ボックスを出た。

「刑法39条第1項 心神喪失者の行為は罰しない。第2項 心身耗弱者の行為はその刑を減輕する」

同じ言葉を何度も繰り返しながら歩いていた時、コインパーキングに止まっている黒っぽいチ

ェロキーが目について思わず足を止めた。男のチェロキーと、色もホイールも同じリミテッドだった。

じつと見つめていた梓の目に涙が溢れた。

「もう、あの車に乗って彼が私の元を訪れる事は永遠にない」
そうさせたのは紛れもなく梓自身であつたが、悲しみが押し寄せ、手で顔を覆って、声を殺して泣きながら自宅に戻った。

梓が描いたシナリオは「心神喪失者の犯罪」だった。

事故を仕掛けて、自分も巻き添えになる覚悟はしていた。
巻き添えになったら「彼は私と一緒に逝きたかった。私を愛してくれていた」というになる。

でも、巻き添えにならなかったら「彼は私を拒んだ。私を愛してはいない」と、そのどちらかに賭けた。

そして結局、巻き添えにはならなかった。

「彼は連れて行ってはくれなかった。これで私が取る道はただ一つ」

山梨から幕張に引越しをしたのは5月末だったが、勤め始めた雑貨店には、3日間だけ出勤し

ただけで無断欠勤をした。怒った店長から電話がかかって来たが無視をした。

その間に精神科の病院にかかり、不眠症と被害妄想を訴えた。病院では「短期精神性障害」と

診断され、抗うつ剤を処方され「しばらくの間、通院して様子をみましょう」と言われたが、そ

の後治療には行かなかった。

「心神喪失とは、やって良いこととやってはいけないことを判断したり、または、やってはいけ

ない行為を抑えることが『全くできない』状態」と買った本に出ていたので、その事だけを頭に

入れた。無知な人間が、本を読んで心身喪失者になりました

時に、余りにも基本的行動パターン

ンをとる可能性があると考えて、一通り目を通しただけで、本は処分をした。自分自身で考えた

「変な行」を取る事にした。

「なりきれるか？」

不安もいっぱいあったが、自信もあった。

車を借りたレンタカーの店でも異様な態度を取った。契約に行く時は、化粧もせず素顔で行き、
何度も車種の変更をした。引き取りに行く時は濃い化粧をして、レンタカー店のスタッフを啞然とさせた。

そして、逮捕した警察官の前で、精神障害者の役を演じる。

取調べでは、警察官や検事との会話は、罪を罪として捉えるのではなく、起こした行動は「天の

声」という態度を取る。

上手く演技をすれば簡易精神鑑定が受けられる。簡易精神鑑定で不起訴になった人間はたくさんいる。と本で読んだ。もし、簡易精神鑑定での心神喪失が認められず、男の妻の証言や世論な

どで、本鑑定に回され、起訴になった場合、国選弁護人が付くだろうから、その前でも、精一杯

精神障害者になりきる。そうすれば弁護人は助けてくれるだろう。

そして、不起訴となって精神科の病院に入院して、後は本当の自分に戻って、退院の日を待つ

ばかり。不起訴で無罪となって病院送りになれば、二度と再審が出来ない。

「事故で死亡した男……川村雄一郎」と密かな関係を結び、雄一郎の前で、あれだけの演技が出

来たのだから、心神喪失者の役を演じるのはそれより簡単。だから、大丈夫。

精神科の病院の通院歴を作ったし、何より、雄一郎との一年半の関係での出来事そのものが

「心神喪失」を物語っている。

警察官や検事の前で、その事を全て告白し「殺したい程、男を愛した女」の切ない気持ちを中心

を込めて、うつろな表情で話してあげよう。彼らは「悲しいラブストーリー」に涙を流すだろう。

第六章

「まだ泣かないの」と真理が雄一郎に約束した事は、あの夜から、葬儀でも守る事が出来なかった。

通夜と葬儀では気丈に振る舞って喪主を務めあげたが、火葬場で、雄一郎を茶毘に付さねばならな

い、本当の別れの時間が来た時「止めて！」と叫び、棺の前に立ち塞がった。そして、火葬場の係

官や、村上達にすがって「お願いだから止めさせて！私から奪っていかないで！」と必死に訴え、参

列者の涙を誘った。

「逃走した車が判明し、被疑者が逮捕されました」

警察から電話があつたのは、土曜日の夕方になってからだつた。

「悪質な行為である事から、山梨県警本部の捜査一課で引き続き事故原因の究明を行います。お預かり

している遺品の返却もありますので、近日中に改めてお伺いさせて頂きますので、その時はご協力を

よろしくお願いいたします」

矢沢勲が電話を受けたが、山梨県警本部の倉田修という警部の対応は丁寧だった。

勲が「被疑者の名前」を真理に伝えたのは、葬儀と合わせて行った初七日の法要が済んだ、日曜日

の夕方であった。他に村上夫婦、会社に事情を説明し、公休を取っていた杉山直樹が顔を揃えていた。

「被疑者は菅原梓」という事を聞いて、真理は絶句した。辛い出来事が浮かんで泣き崩れた。

「酷すぎる……」

叔母の友美が真理を抱きしめた。

「話す事がある」

矢沢夫婦が帰り、真理と村上夫婦、杉山の四人だけになった時、村上が真理に告げた。

「初めに伝えるが、川村は、直接お前に話をしたかったが出来なくなった。だから、俺が川村に代わ

って伝える。それから、川村がお前に話をする前に、俺に話をした事を許してやって欲しい。あいつ

は辛くて不安だったんだ」

「大丈夫よ。でも、彼の前で話せる？」

「話せるよ。これは川村の真実だから」

村上はそう答えた。

雄一郎と真理との間で何かが起きた、という事は感じていたが、その事を聞く事が躊躇われた杉山は「僕は失礼します」と帰る素振りをみせた。

「杉山君も一緒に村上さんの話を聞いてくれる？」
真理の頼みに少し躊躇したが、黙って雄一郎の遺影の前に座った。

「川村は真理を心から愛していたよ」
村上の最初の言葉に、真理はハッとして雄一郎の遺影を見つめた。見つめる目から思わず涙が溢れた。

「だが、川村は別の女も同時に愛していた」
村上は意識して名前は出さなかった。

「二人を愛していた事は事実だが『愛の種類が違つ』と川村は言っていた。女は、川村のホテルで働いていたシャトルバスの運転手の女房だった。その運転手は、事故に巻き込まれ亡くなった。川村は、手続きでその女と接しているうちに、亭主を亡くしたショックで声を失った女に同情心が沸いた。それで、運転手の女房に、ホテルの仕事を斡旋した。そして同情が愛情に変わり不倫関係が始まった。

川村は幸せだったそうだ。真理がいて、その女がいて。それでも、真理を裏切る事が辛かったから、何度か『別れる』と自分自身に言い聞かせていた。だが、自分の気持ちに決着をつけられずにいた時、

女から『子供が出来た』と告げられた。話を聞いて、真つ先に真理の顔が浮かんだ。次に亡くした子

供の事が浮かんだ。そして、新しく生まれる子供に罪はない。そう思ったそうだ。女との子供を育て

あげる決心をした。だから、真理に別れを告げ、その女と歩む事に決めた。何の選択枝もない非力で、

ただ親だけが頼りの子供を育てるためには、どんな非難も受ける覚悟をしていた。真理との間に亡く

した子供の兄弟だから。川村は、そう言っていたよ」

そこまで話して、村上也雄一郎の遺影をじつと見つめた。

「あの時、俺はお前に『地獄に堕ちろ！』と言った。悪かったな」

心の中で雄一郎に詫びた。

「真理には詫びても許される事ではないだろうが、本当に申し訳ない。そう言っていたが、川村は、

生まれて来る子供を心待ちにしていた」

村上是話を止めた。真理を見たが、真理の気持ちは読み取れなかった。

「子供が生まれる事は、真理には絶対に話はしない。夏が終わったら会社を辞めて、別の場所で生活

を始める予定にしていた。真理には勿論だが、女の前でも、一度も真理の話をした事がなかったそ

うだ。二人が大事だったから、それがせめてもの二人に対する誠意。川村はそう思っていた。だが、

選んだ女がそれを壊した。真理の前に姿を現した。それを知った川村は女を責めた。その事だけは許

せなかった。それが原因だったのだろうが、女は突然に姿を消

した。川村は女の隣の家に住む主婦から聞いた。と言っていた。それで川村は全てを知った。女の失声症も妊娠もウソだったんだ」

突然、真理の身体が大きく揺れた。

杉山と弓恵は、じっと村上を見つめていた。部屋の中に、糸をビーンと張り詰めたような緊張感が走った。

「初めからそんな事は無理だった、と言っていた。度量もないくせに、一人前の男ぶって恥ずかしかった。あいつは自分を責めていたよ。女の偽装を知って川村は、自分の愚かさ、自分が犯した罪の深さにやっと気がついた。退職も覚悟して、異動願いを出すつもりだったし、真理に戻って来てほしい、という話をするつもりだった。もし、真理が許してくれなかったら……って、その覚悟もしていたよ」

雄一郎の遺影を見つめる真理の身体が、小刻みに震えていた。

「真理には信じられない話だろうが、これが川村の真実だよ。最後に言いたい真実は……川村は心の底から真理を愛していた。という事だ。そして、川村は、俺の前で女の悪口も言わなかったし、騙されたとも言わなかった。俺はそんな川村を信じている」

話し終えた村上が真理を見た。

真理は、さつきからずっと雄一郎の遺影を見つめていた。煙草を銜えて、雄一郎が現れるような気がした。

「でも、愛してくれるのなら……私一人だけを愛していて欲しい、って思うの」

真理がポツリと呟いた。

「誰だってそうでしょう？ 弓恵さんだって、村上さんには、弓恵さんだけを愛していて欲しいって。」

だって、妻だものね」

真理は弓恵の顔を覗き込んだ。

「私達だけじゃなくて、世の中のほとんどの人はそう思うでしょうね。でもね、川村さんが真理ちゃん以外の人を愛していた間、別れを告げられるまでの間、真理

ちゃんは、何も気がつかなくて幸せだったでしょう？

川村さんは自分だけを愛してくれている、って思ってたでしょう？ 川村さんは自分だけを愛してくれている、って思ってたでしょう？ だか

らと言って、川村さんの行為を認めているのではないのよ。でも、それが川村さんに出来る精一杯の誠意だった、と思うの。だから……」

弓恵は声を詰まらせた。

「そうなの。『許そう』と思っていたの」

真理の言葉に、感極まった弓恵は手で顔を覆って泣きだした。

「異動願いなんて、一人で背負う事なんてなかったのに。彼の方が私よりずっと人間的だった」

そこで真理は遺影から目を離して、村上の顔を見た。

「川村に100%責任がある、と言うのは違つかもしいないが、川村は、自分のやった事に責任を持

ちたかったのだろう。もし、やり直せる事になったら、今度こそ、真理を守りたいと思ったのだろう」

「私は社会的に認められる立場になり、彼と同等だっと思ってけれど、そうではなくて、私は、彼を

更に輝かせる。そう、彼の付加価値でいたかった。その事に気がついたのは、別れを告げられてから

よ。別れを告げられて仕事への意欲を失った。でも、それは『離婚』という事で、落ち込んでいたの

ではなくて、私は彼の付加価値ではなくなる、そう感じたからなの。でも、感じただけではダメなの

よね。伝える事はちゃんと伝えないと。私って、いつもそうだった。伝えられない自分をもどかしく

思っていて、自分でちゃんと分かっていたのに。自分が殻を被っているのに、相手に殻を破って欲しい、なんて都合のいい話よね。愚かでバカなのは私なの。だってね……夜中に、電話がかかって来た

事があつたでしょう？ 今、思えば、彼が彼女の偽装を知った日だったのよね。私は気になって夜中

に山梨に向って、そして彼と会ったの。私に、SOSを発信しているのかもしれないと思ったから。

でも、私は、自分が傷つくのが怖くて、まだ殻を被っていて、彼のSOSを受けとめる事が出来なかつた。彼はボロボロになっていたのに。救いを求めているって

感じていたのに。それでね、私が帰る時に『バリツとした姿を見せたい』って、シャワーを浴びて出

て来た彼は、いつもの川村雄一郎だっ

た。私は、満足して安心したけれど、彼は辛かった、と思う。

私は自分中心に彼を見ていたから、ず

っとそうだったから、だから、彼が別の女性を求めるのは仕方ない事だった。と知っているの。それ

にね、彼が別の女性の元に行つて、立場が変わつても、傍にいて欲しかったとも思つたの。そんなの

変でしょう？ 棄てられた妻が愛人の立場になる、なんて。でも、それでも傍にいて欲しかったの。

だから、彼に伝えようと思つたけれど……やっぱり出来なかったの。勇気がなかったから。彼の本心

が分からなくて、傷つくのが怖かったから。『愛される』より『愛する』その事の方が幸せて思つ

ていたのに」

真理は急に立ち上がつて、雄一郎の前に座つた。

「ごめんね、私に勇気があれば……あなたは死ななくても済んだかもしれない……私があなたを殺した……」

真理はそう言つて雄一郎の前で泣き崩れた。

村上は居たたまれなくなつてベランダに出た。ベランダに座り込んで誰はばかり事なく、思いつきり泣いた。

杉山は……村上の話にはショックを受けた。確かに「川村雄一郎の真実」なのだろうが、自分が知つてゐる川村雄一郎と、川村真理とは程遠かつた。いつの間に、

二人はきちんと向き合う事をしなく

なったのだろうか？ 生き甲斐だった仕事が二人を変えたのか？ 真理は夫の不貞を知って苦しんだ

のだろう。その過程で悩み、考えたのだろうか、それでも、夫である雄一郎を庇い、自分だけを責め

る真理の気持ちは、理解出来ないものがあつた。

「私、明日、警察に行こうと思ってるの」

地の底からから発しているように感じられる真理の声に、みんなが真理を見た。

「警察に行く？」

ベランダからリビングに戻った村上が訊いた。

「雄一郎さんがこの家に帰って来た日の夜、みんなが帰った後、無言電話があつたの。

今まで一度もなかったのに。その時にもしかして、と思ったのよ」

「無言電話？」

また村上が訊いた。

「そう。多分相手は……」

誰も何も言わなかった。

「電話口から激しい敵意を感じたの。雄一郎さんを取られちゃう心配になったの。その時初めて彼女

が怖い。と思ったの。でも、村上さんから話を聞いて……私は、

私が判らない彼女の真実に向かい合

って全て突き止めたい、そう思ったの。彼女と面と向い合いた
い。その彼女の気持ちを突きとめて、

彼女の気持ちを知った時、私が、見れなくて見過ごしていた彼
の気持ちを知る事が出来るかもしれない

い。彼女とも、いつかはきつと分かり合える事があるかもしれ
ない。立場が違っても二人とも彼を愛

した。その思いは一緒だから」

「それは無理だろう。犯人と会えないだろうし」

村上が口を開いた。

……村上は、真理が分からなくなった……

「でも、警察に行つて話をしたいの。私達の事を、自分の口か
ら話をしたいの」

「向こうから出向くまで待つていればいいじゃないか」

「待つ事はしないの。私は待つていたからこういう事になった。
だから、もう待たない。自分から行

くの。私は進んで話をしなくちゃいけないのよ。警察に起きた
事の全てを話して、警察でも事実を掴

んでもらつて、一日も早く雄一郎さんに伝えなくちゃいけない
の。だって、彼は何も分からないまま
に死んじゃったのよ」

「真理がそう決心したのなら、そうすればいい。と僕は思うよ。
ただ、犯人に対しては期待しない方

がいいと思う。世の中の人が皆、自分と同じ価値観を持ってい

る、と思うのは間違いなんだと僕は思

う。人を信じたい、分かり合えたい。そういう気持ちは大事だけれど。その真理の純粹さや素直さが、

他人には受け入れられなくて、それで結果、自分が傷つく事があるよ」

初めて杉山が口を開いた。

「もう、これ以上傷つく事なんてないのよ」

真理の目から涙は消えていた。

「そうか……だけど、一人で背負い込むなよな。俺たちも杉山がいる、という事は忘れるな」

村上は杉山の肩を叩いた。

「そうだよ。余り頼りにならないけれど喜んで協力するよ。僕にとっても、チーフは本当に大事な人

なんだから」……真理も大事だよ……という言葉を吞み込んで、今度は、杉山が真理の肩を叩いた。

「もう、昔からそうなんだから。いい加減に『頼りになるよ』って言ってみて。ねえ、そう思うでしょう?」

真理は口を尖らせて、雄一郎に同意を求めるような仕草をした。

自ら警察に向き、「自分達に起きた事を話す」という真理の決意に、尋常ではない事を感じた杉山

は心配だった。気持ちの奥底には、自分達が分からない程の大きな悲しみを抱いているのであろうが、

涙を流していても、気丈に振る舞っている真理の後ろ姿を見て

「こづいづのを強い、と言っのだろっ
か？……」杉山も真理が分からなかった。

その時、振り向いた真理と目が合った。真理の焦点は定まらず泳いでいた。

「本当に一人で大丈夫なのか？」
心配になって声をかけようとした時「お腹空いたでしょう？
お寿司でも取る？」突然真理の表情
が変わった。

真理の言葉でその場の張り詰めた雰囲気も消えた。真理は立ち上がって、カウンターから出前専門
の寿司屋のメニューを取り出して「これでいい？」と訊いて受話器を取った。

「川村の分も忘れるなよ！」

「勿論よ！」

真理の元気な声が合図で、弓恵がキッチンに立って準備を始めた。

「僕も手伝います」

何故か、真理の傍にるのが辛くなった杉山もキッチンに入
った。

第七章

1

翌日の火曜日、真理は山梨北署内に設置された捜査本部を訪れた。

市町村合併の際に、新しく建て替えられたばかりのモダンな庁舎は、他の警察署とは雰囲気が違う。ていたが、真理は緊張した。

受付にいた婦人警官の案内で、小奇麗な小会議室に通され、担当の山梨県警本部捜査一課の倉田修警部を紹介された。

警察官と言うよりは、何処にでもいそうな中年のサラリーマン風情の倉田を見て、少しホッとした。が、すれ違う所轄の警察官に比べて鋭さを感じたのは「山梨県警察本部捜査一課」という肩書きのせいなのだろうか？

倉田は真理に丁寧に「ご主人の持ち物のご返却や、お話を伺いたい事がありましたので、こちらから出向く予定でした。わざわざお越し頂いてありがとうございます」と優しい笑顔を向けた。

「この度は、いろいろお世話になりありがとうございます。本日は主人と私との間に起きた事をお話

したいと思ひまして伺わせて頂きました。それとも一つ、菅原梓に関して、厳正な捜査と処罰を望

みたいと思ひ気持ちもありますので、その事をお伝えしたいと思ひました」

真理は倉田の目を見つめながらハッキリとした声で伝えた。

「分かりました。これから川村さんにお話を伺う事になります。伺った内容は全て記録させて頂くよ

うになりますので、予めご了承下さい。恐れ入りますが少しお待ち頂けますか」

そう言つて倉田は部屋を出て行つた。

一人残されて真理は小さな部屋を見回した。警察署内の部屋というより、何処かの会社のミーティ

ングルームのような雰囲気を持っている部屋は、就職試験の面接を受けているような気分になつた。

しかし、待つてゐる間にコーヒーを出してくれた女性の制服姿を見て、現実に戻された。

「菅原梓もこの署内に勾留されているのだ」

そう思つとどうにも落ち着かない気分になつた。

「落ち着きなさい」

自分に言い聞かせ目を閉じた。

「お待ちせして申し訳ありません」

しばらくして、倉田が若い刑事と、先程コーヒーを運んで来てくれた婦人警官を伴つて現れた。

「テレビで観る刑事ドラマと同じ」

真理は少し可笑しくなり、緊張が少しほぐれた。

「こちらは山梨北署の米山巡査部長です。同じ山梨北署の深沢巡査です」

同行の二人を真理に紹介して、倉田は真理の向かいに座り、一つ離れた席に米山、筆記係の深沢は端の席に座った。

「今日は少しお時間がかかるかもしれませんが。途中で具合が悪くなったり、トイレに行きたくなったり、喉が渴いたり、そういう時は遠慮なく仰ってください」

「分かりました」

答える声が少し震えた。

「あの……、加害者に会わせて頂く事は出来ませんか？」

「申し訳ありませんが、その事は出来かねます」

さつきと違った倉田の雰囲気を感じて、真理の中に失望感と緊張感が走った。

「……」

顔を伏せた真理を見て、倉田は取り調べ中の菅原梓の様子を思い浮かべた。

「早速ですが、奥様のお話したい事というのを伺わせて頂けますか？」

「はい……」

昨日からここに来るまでの間、あれだけ考えて、何度も自分の中で繰り返していたが、いざその時が来たのに最初の言葉が出てこなかった。

「これは取り調べではありませんから、そんなに緊張されなくても大丈夫ですよ。奥さんが思った事を素直に、正直にお話してくれば、それでいいのですからね」

倉田の言葉は優しくだったが、それでも真っ先に雄一郎の不名誉な話をしなくてはならない、という事に躊躇いがあった。

「申し訳ありません。いろいろ考えて来たのですが……」

「誰だってそうですよ。少しずつで結構ですから、気を楽にしてお話してください」

「分かりました……これは、私にとっては辛い事ですし、主人と私にとっては不名誉な事です、それを話さないと始まりませんから……実は、私達には離婚話が出ていました。3月の初めに主人から

『他に好きな人がいるから別れたい』そう告げられました」

そう言つて、真理はこみあげて来たものを飲み込んだ。

「主人の相手は菅原梓さんです。今日、伺ったのは、事故の起きた日の深夜にかかつて来た無言電話

がきっかけでした。今まで一度も無言電話なんてかかつて来た事はなかったので不信に思つたのです

が、その時、もしや……という気持ちが沸きました。勘でしかなかったのですが。そして、私が、叔

父から被疑者の名前を聞いたのは葬儀が済んだ後でした。その時に私の勘は間違っていない、と確信

しました。彼女の行なった行為、逃走した事も含めてですが、これは殺人行為以外の何物でもない。

と思いました。何故、彼女がそんな事をしたのか？ 主人は死ななくてはならなかったのか？ 一日

も早く、真相を明らかにして欲しかったからです」

「奥様のお気持ちは真摯に受け止め、警察としても嚴重且つ慎重に捜査を行ないます。これから、

こちらから細かい事をお伺いします。お辛いかとは思いますが、ご容赦ください。まず、ご主人に離婚

婚を告げられた時の状況から詳しくご説明願います」

「主人から突然離婚話を切り出されたのは、単身赴任先の山梨から久しぶりに帰って来た3月初めの

平日です」

真理は、あの辛い出来事の話始めた。

離婚を告げられた時の様子。その後の事。梓がホテルに現れて知った本当の理由。その時の辛い気持ち

を癒すために、村上と会った事。そして、雄一郎が知った現実。自分に救いを求めていると思って、

夢中で山梨に行ったが、殻を被っていた自分が最後の最後になっても、雄一郎の気持ちを救ってあげ

る事が出来なかった、と後悔した事。村上から聞いた「雄一郎の真実」

「分かりました」

真理からの話を聞き終えた倉田は、ただ一言、そう答えた。

「遠くまで出向いて頂き、更に辛い事をきちんとお話頂いた事に感謝いたします。菅原梓が、故意に

事故を起こし、ご主人を亡き者にした事は事実です。今は、取り調べ中ですので奥さんにも詳しいお

話をする事は出来ませんが、奥さんの真実を突き止めて欲しい。というお気持ちは重々承知しており

ます。その……すみません。詳しい事をお話出来なくて申し訳ないのですが……私達は、真実を突き

止めますので、もう少しお時間をください。また、ご主人と菅原梓との事については、直接ご主人と

お話をされた村上さんにも、話を伺わせて頂くようになります。悪質な行為で、交通犯罪の抑止力から、

マスコミが取材に伺う事もあるかもしれませんが、その時はご対応をお願いいたします。今日はこのまま横浜にお帰りですか？」

「主人を一人残していますので、すぐに帰ります」

真理は一刻も早く横浜に、雄一郎の元に帰りたかった。

しかし、倉田に笑顔を向けた真理の胸に今度は焼け付くような痛みが襲った。

「具合がお悪いのですか？」

顔をしかめ胸をさする真理の様子を見て、倉田が心配顔で尋ねた。

「大丈夫です。最近、煙草の本数が増えて……気をつけなくては思っています」

「そうですか。無理をしないで、お身体を大事にしてください。くれぐれも運転には注意をしてくだ

さいね」

倉田はそう言って、米山に目配せをした。倉田の目配せに米山が部屋を出て行った。

「綺麗ごとに聞こえると思いますし、ご理解頂けないかとは思いますが、私は主人を許そうと思っていました」

胸の痛みが去って、真理がポツリと話を始めた。思いつめたような言い方に、倉田と婦人警官の深

沢は思わず真理を見た。

「信じていましたが、もし、主人が戻って来なかったとしたら、私は『立場が変わってもいいから傍

にいたい』そう伝えようと思っていました。主人が、私に相手の方の妊娠を告げなかったのは、気の

弱さだったのかもしれませんが、私は、せめてもの主人の誠意だと思っています。決して主人を擁護

しているわけではありませんが、そういう人だと信じています。

主人は私には非はない、と言っています。したが、そうではなくてお互い半分ずつ非があったのです。ある人が「愛する事、信じる事、忘れる

事は人生の3つの試練」という言葉を教えてくれました。彼女とは一度だけ会っただけで、その時は

『嫌な女だ』と思いました。憎しみは沸きませんでした。そ

れは今でも同じです。もし、許される

のなら直接会って、同じ人を愛した彼女の本当の気持ちを聞きたい、と思っています。何度も言いま

すが、彼女の事は憎んではいません。ただ、彼女の犯した行為だけは憎んでいますし、許せません。

私が言いたいのはその事だけです」

問わず語りで始めた真理の話聞いて、深沢がそつと目頭を押さえた。

「悲しみの上に、また悲しみを重ねる事になるかもしれない」

倉田は、真理の雄一郎への思いを感じていたが、少しずつ自供を始めている梓の様子をまた思い浮かべた。

そこに段ボール箱を抱えた米山が戻って来た。

「遅くなつてしまいましたが、捜査上必要ではなくなったご主人の遺品をお返しいたします」

倉田はそう言つて段ボール箱を真理の横に置いた。そして、段ボールから密閉されたビニール袋を

取り出し、真理に差し出した。

「中身の瓶が壊れてしまつていたので箱だけになってしまいました」

真理は倉田からビニール袋を受け取つたが、その袋から懐かしい香りが漂っているのに気がつき

「エタニティ！」と声をあげた。箱は潰れ汚れていたが、真理

が愛用している香水の箱だった。そし

て、袋の中には香水が沁み込んだメッセージカードも入っていた。袋から取り出さなくても、そのま

までハッキリと文字が読み取れるカードのメッセージを読んで、堪えきれなくなった真理は泣き崩れた。

倉田が慌てて真理を抱きかかえた。深沢もすすり泣いていて、米山の目も潤んでいた。

「これが、ご主人の奥さんへの本当のお気持ちですよ」

倉田は、真理を椅子に座らせて優しく話しかけた。

「真理へ

新たに……二人で一緒に時を刻んで行ってくれる事を願
って。

雄

一郎

メッセージカードにはそう書かれていた。

2

「辛いな」

真理を見送った倉田は一人言を言って、深いため息をついた。

自ら警察署に出向いて話をする、という被害者家族は初めてであった。被害者の事については言い

たくない事もあつただろうが、自分が知りうる全ての事を、正直に話してくれた真理の気持ちに感

謝し、辛い気持ちを思い図った。

「こういう結果を招いたのは、『自分に非がある』と責めているのだろっ」

そう思うとやるせなくて切なかった。そして、その気持ちと同じ位、真理が雄一郎を愛していたという気持ちを感じた。

倉田は送検が決まった後も、警察署内に勾留されている菅原梓が取り調べられている取調室に向った。

逮捕されたのが土曜日の夕方で、翌日の午後から梓は少しずつ自供を始めていた。

部屋のドアを静かに開けた時、自分に梓が怪しげに微笑んだのを見た倉田は、嫌悪感のようなものを感じた。倉田は梓の取調べをしている、県警捜査一課の柳田淳巡查の肩を叩いて、廊下に出るように命じた。

「どんな様子だ」

倉田は取調室を顎で指して柳田に訊いた。

「ガイシャとの関係を具体的に話してます。自供にウソはないようですが、描写が具体的に細かいの

でウンザリですよ。その部分を飛ばして話を進めると、機嫌が悪くなって口を閉ざします」

柳田はいかにもウンザリといった様に首に手をあてて、首を回した。

「意図的にそういう風になっている様子か？」

倉田は眉根に皺を寄せて、柳田に訊いた。

「意図的ではないようですが、自分達の熱愛話を自慢したいよ
うな、そういう雰囲気があります。自分

がした事も承知していますが、反省はないですね。相変わらず、
事故を起こしたのは『天の声』そう言

っています。それと、性的な部分への強い執着心、異性や恋愛
に対しての強い執着心のようなものを感じ
ます」

「そうか……まあ、余り先入観や固定観念を持つなよ。今日は
これで打ち切りにした方がいいだろう。

こっちで聞いた話と調書を照らし合わせる必要もあるし」

「分かりました」

柳田はそう言って取調室に戻った。

柳田より一足遅れて取調室に入った倉田は、そこでまた自分
に向ける梓の怪しげな視線を感じた。

「菅原さん、疲れたでしょう？ 今日これで終わりにして、
また明日ゆつくりとお話を聞かせてくだ

さい。それから、一つだけお願いがあります。こうして菅原さ
んの話の聞いているのは、いろいろな人生

経験少ない若い刑事が多いので、事件に直接関係ない事での、その……余り具体的な描写は少し慎んで

もらえますか？ 彼らも恥ずかしいようですよ」

倉田は敢えてその事を口にして梓の反応を見た。梓の視線が泳いだ。

梓の真意は読み取れなかったが、何か引つかかるものは感じていた。

一時間後、倉田は捜査本部のデスクで、甲府地方検察庁からわざわざ出向いて来てくれた、担当検事

である遠藤浩二郎と、真理の調書と、梓の調書を一つ一つチェックしていた。

遠藤検事とは何度か捜査を担当した事はあるが、40代後半のいかにも切れ者で「悪は見逃さない」

という姿勢の遠藤を信頼していた。

菅原梓は、被害者の川村雄一郎とは不倫関係にあった事と、失声症と妊娠はウソである事は認めていた。

被害者に亡き夫の面影を見て好きになったのは、夫の菅原幸一の葬儀の席上だった。諸手続きのために被害者が訪問するという事を聞いた時には運命だと思った。失声症を演じたのは、被害者の同情をか

うためで、その思惑通りに被害者とは深い関係になった。失声症を演じるのは苦しかったが「失声症が

治った」という事は「被害者へのクリスマスプレゼント」と決めていたので我慢をした。

偽装妊娠は、被害者を独占するためであった。妊娠を被害者に告げた後、つわりのような症状が起き

「頑張れ」という声も聞いたので、そのまま演じ続けた。「始末して欲しい」と言われたら、その時に

次の事を考えるつもりだったが、被害者は「一緒に歩む道」を選択してくれた。そして、離婚が決まっ

たら「流産した」と報告するつもりだった。しかし、被害者の妻である川村真理が勤めるホテルに行っ

た事を、被害者に責められた事で、生きる気力を失くしてうつ状態になった。挙げ句、被害者と別れる

決心をして引越しをした。その後、山梨県北杜市の隣家に住んでいた主婦から、失声症と偽装妊娠が被

害者にバレてしまった事を聞き、自分が愛している被害者に憎まれている、と思うようになった事でう

つ状態が酷くなった。就職が決まっていた雑貨屋で仕事を始めたが、店の店長や客が自分の悪口を言っ

ていて怖くなり、店には出勤したくないと思い、3日だけ仕事をして辞める事にした。その後、不眠症

にもなったので精神病院で治療を受けた。事故前日から山梨に行ったのは、被害者に会いたかったから

で、八ヶ岳ガーデンリゾートホテルの駐車場で被害者を見た時に、感情が高ぶり無意識のうちに後をつ

けていた。高速道路上で被害者の車を見ていると「一緒に行きなさい」という幻聴が聞こえ始め、咄嗟

に行動を起こした。殺意は全くなく、聞こえた幻聴は被害者と自分を「幸せの国に導いてくれる」天の

声だと思った。その後「自分は行けなかった」という事に気がつき、天の声の言う事をきかなかった事

が怖くなって逃走した。と供述していた。

「簡易精神鑑定を受けさせる要素は充分に有りですね。夫を亡くして、その葬儀の席で被害者に好意を持ち、そして演技をした。その事から始まった一連の行為。でも、倉田さんは疑問を持っているのでしよう?」

どちらかと言うと、女性的な独特な話し方で遠藤は倉田に訊いた。

「まず、一番に『子供を武器にしている』という事が気に食わんですよ。世の中には、子供が欲しくても授からなくて、悩んでいる夫婦がたくさんいる。被害者だってそうでしょう。人の弱みにつけ込んで気持ちを弄ぶ。それに、偽装妊娠を図って、欲しい物を手にいれた後、流産したと言う。こんな酷い話がありますか? だいたい、自分だって同じ事を経験しているのに」

倉田は心の底から怒っていた。

遠藤は黙って、倉田の話を聞いている。

「菅原梓は故郷の福島でも同じような事をしています。福島では成功して結婚を果たしている。言わば常習犯です。そういう恋愛しか出来ない、と言えばそうでしょうが。だから今回の事も全て計算ずくだ

と考えてしまいます。それに、ガイシャは優秀なホテルマンだった。43歳という若さで総支配人という事と、ホテルの評判でのガイシャの人間性で、その事は充分は納得出来るものがあります。我々とは

違った部分でたくさん人間を見ている、その優秀なホテルマンが『演技』は見抜けなかったとしても、

菅原梓に潜んでいる『精神的な病』を見抜けなかったのだろうか？ という事が正直引つかかるのです。

まあ、男と女の関係には、私なんかは経験不足で、理解しがたい部分があるとしても、ですけどね」

唸って倉田は頭を掻いた。

「確かに梓はウソがばれた後、うつ状態になり精神科で診断を受けている。失声症、偽装妊娠、ホテル

に現れた事、突然姿を消した事、その後の行動の全てを考えると、精神障害も考えられます。ですがね、

裏を返せばそれなりの演技も出来るという事に繋がる。というのが私の見識なんですよ」

「倉田さんの怒りの気持ちは分かりますよ。行った行為は許されるものではありません。でも、先入観を取り払って考えましょう」

さつき、倉田が取調官の柳田に言った言葉と同じ事を、遠藤は倉田に言った。

「分かりました。もう一つ、これからはここだけの話というか、私が一個人として感じている気持ちで

終わらせてもらいたいのです。実はね、あの二人の様な夫婦が世の中に存在するのか？ と言うのが正

直な感想だったのです。まるで絵に描いたように、旦那はイケ男、奥さんは美人。しかも二人ともそれ

なりの役職についていて社会的に認められ、高収入も得ている。いろいろ苦労はあったとしても……で

も、さつき会った川村真理さんを見て『アリ！』なんだ、思っただけですよ」

イマ風な表現をした倉田に、遠藤は少し驚いた。

「本当に綺麗な人でしたよ。言っておきますが、私は、その美貌に惹かれたわけではありませんよ」

倉田の言葉に、思わず遠藤検事は笑みを浮かべた。

「何度も言いますが、勤めていたホテルでのガイシャの評判、奥さんである川村真理さんに会って直接

聞いて感じた事、うーん……例えば、相手を思いやる気持ちとか、真に愛する気持ち、私達が忘れてい

る何か大切な事、そういう事を私達に思い起こさせるために、この夫婦が存在している。そんな気持ち

がして来たんです。この年になってそんな事を言うのも恥ずかしいのですが……」

そう言って倉田は、コーヒーマーカーからコーヒをカップに注いだ。

遠藤は倉田の動作を見ながら、次の倉田の言葉を待っていた。

「そういう川村夫婦を目の辺りにした時の菅原梓の気持ちを思ったのです。おそらく、嫉妬心が沸々と

沸きあがり、普通の神経でいられなかったと思いますよ。正常な神経では立ち向かえない。ガイシャの

妻である川村真理さんに向い合うには、正常な生き方では負けてしまう。そうなったら、自分が勝ち残

れる事、女として生き残る道、やはり現実的ではない演技をして奪うしかない。あれだけの演技をした

菅原梓だったら、それをする覚悟は出来ると思います。」

「心神喪失を装う演技だと言うのですか？」

遠藤は倉田に訊いた。

「今回の事故は、怨恨絡みの殺人事件です。菅原梓に合わせる相手は、精神科の医師ではなくて、川村真理さんだと思っています。彼女と面と向わせて、菅原梓の反応を見る。簡易精神鑑定より真実が見えてくると思いますがね。無茶な話ですが……これは、警察官としての考えではなく、私個人の考えなのでご容赦ください」

「そう承知しています。これからは警察官として話をしてください。菅原梓の殺害や心神喪失の可能性については、本人からの話、レンタカー、宿泊したホテルなどからの話から受ける、要は第三者が感じた事で状況証拠ではありません。でも、たった一つ、精神科の医師が下した『短期精神障害』という診断結果は見逃す事は出来ませんから、私は簡易精神鑑定を申請します。もし、演技であれば鑑定医が見逃さないでしょう」

「うーん……」

簡易精神鑑定を受けさせる可能性は大きいと考えていたが、そこからの判断は危険だ、という考えも

あった倉田は、納得出来ないという様に唸った。

「倉田さんではありませんが、これは検察官としての私の意見ではなく、個人での意見です。倉田さんの考えに賛同していますよ」

二人しか居ない部屋で、遠藤は小声になった。

「賛同している気持ちを、検事として自分の心の底に置く事は出来ませんが、人間として留めおく事は出来ます。ですが、正確な状況判断と公平さできちんと判断させて頂きます」

「明日からの聴取なんですが、少し変えようかと。細かい部分の確認作業になっているのですが、被疑者の世界に引きずり込まれているので、それを立て直す必要があります。どうもね、気になりましてね。」

「今日も取調室に入った瞬間、私を見る目が異常なんですがしくりこないんですよ。これも先入観かも知れませんが、なかなかしたたかな部分ありますから」
倉田は冷めたコーヒーを飲みながら、ため息をついた。

「倉田さんがため息をつく位に手ごわいですかね？」

「事故そのものについては本人も認めているし、責任能力と殺意の有無だけと言う事になるのですが、有る無しだけで終わらせてはいけない、その裏側に何かがあるような気がして。今時流行らない『刑事の勘』でしょうが」

倉田はずっと感じていた「切ない気持ち」を遠藤に伝えようか迷っていた。一人を死亡させ、怪我はなかったとしても、その他にもたくさんの人間を巻き込んだ菅原梓の犯罪は見逃せない。また、心神喪失を装っている可能性がある菅原梓の行為は許されない。40歳過ぎの分別がある大人の犯行は、生い立ちや育った環境が影響してくる、などの言い訳は通用しない。しかし『罪を憎んで人を憎まず』という言葉が

ある。だから、菅原梓の中に潜んでいるものを探りだしたい。倉田はそんな思いがあった。今日、川村真

理に会ったからか？……そこまで考えが巡って、倉田は首を振った。

「心理合戦になりそうですね」

黙りこくって考え事をしながら首を振っている倉田を見て、遠藤も覚悟を決めた。

「それから、ハケ岳と小淵沢のホテルと、例の隣に住んでいた主婦の聞き取りですが、私も同行したいのですが」

「分かりました、明日朝9時に迎えに行きます」

第八章

1

10時過ぎに、遠藤検事と山梨北署の米山巡查長を伴った倉田は、ハケ岳ガーデンリゾートに到着した。倉田はすでに一度ホテルを訪れているが、今回は菅原梓の話を聞く事が一番の目的であった。

天候不順にも関わらず、オンシーズンに入ったハケ岳ガーデンリゾートのロビーは、リゾート客で賑わっていた。

「お待たせいたしました。客室課の相馬と申します」
ラウンジで出されたコーヒーを飲み終わった頃に、宿泊部署客室課支配人の相馬俊介が現れた。

「ロビーより応接室の方が話をしやすいので、移動して頂けますか」という相馬に案内された三人は、
応接室に移動した。

倉田は同行の二人を紹介し、早速話を始めた。

菅原梓が入社当時からの上司であった相馬は「正直言って、菅原さんがまさか。という気持ちで今でも信じられません。それにも増して総支配人の事は大きなショックです」と苦悩の表情を見せた。

「一昨年の春に、ホテルの送迎バスの運転手をしていた菅原さんのご主人が、勤務中に事故で亡くなら

れて、その後、川村総支配人……… 当時は宿泊部支配人でしたが、総支配人のお声がかかりでパート待遇で

入社してきました。仕事内容は、バックヤードの清掃、業務委託しています清掃会社の補助など、用務

員的な仕事が主な業務でした。自宅の庭の花を事務所や従業員食堂、トイレなどに飾ってくれたり、ス

タッフを裏からサポートしてくれていて評判も良かったんですよ。声が出なくて、その事をとでも気に

していましたが、真面目によく働いてくれました。ですから、総支配人と……… その……… そういう関

係にあったという事は私は勿論ですが、社内で知っている人間はいませんでした」

「川村さんのお声がかかり、と言うのはその頃から、特別な関係にあったという事だったのでしょうか？」

「いや、そうではないと思います。総支配人はそういう所がある人でした。仕事には厳しかった人です

が『スタッフは家族』というような日本的な情があつて、ご主人を亡くされた菅原さんをフォローした

い。そういう気持ちだったと思います」

相馬は雄一郎の事を思つて少し涙ぐんだ。

「声が出ない、という事は演技だったのですが、半年近く一緒に仕事をされていて、全く気がつか

なかったのですか？」

「お恥ずかしい限りですが、全く気がつきませんでした。病院

でカウンセリングを受けている、という

事も聞いていましたので信用していました。社内での連絡は、全て携帯メールを通じてやり取りしてい

ましたが、特に不都合もなかったですし……多分、本人もコンプレックスを感じていたからだと思いま

すが、いつも目立たないようにしていて、社内で特に親しくしていた人もいなかったようです。ただ、

一つだけ、昨日ですが、気になる事を聞きました」

三人の相馬を見る視線が鋭くなったため、相馬は姿勢を正した。

「今日、刑事さんが見えるという事を伺って、当時の人事担当に確認しました。菅原さんが入社当時は

渥美というスタッフが人事担当でしたが、菅原さんと入れ替わりに本部に異動になっています。渥美も

今まで全く忘れていて迂闊だった、と反省していましたが。総支配人から『菅原さんは声が出ない』と

伝えられたのですが、葬儀の時など直接話をしていたので、その時に变だなと思ったようです。総支配

人に確認しようと思ってもいたそうですが、葬儀が済んだ後に声が出なくなったのかもしれない。と思

っていて、菅原さんとは一度も会う事もなく、異動になってしまったため、忘れてしまっていたようです

す。渥美は警察に直接話をする必要があるのであれば、いつでも出向くと言っておりました。総支配人の同情をかうために演技したのでしょうかね」

梓からも「同情をかうためだった」という証言を得ている。

「やはり、なかなかのしたたか者だ……」

倉田の中で少し見えてくるものがあつた。

「分かりました。声が出るようになってからの菅原梓の様子はどうでしたか？」

「そうですね……あの時、クリスマスでした……確か声が出て、社内のスタッフに挨拶していましたね。

私に真っ先に『今までご迷惑をおかけしました』そんな事を言っていました。それから少し明るくな

りましたよ。相変わらず人を避ける、というか、自分からスタッフに溶け込む事はなかったのですが、

一生懸命仕事をしていました」

「川村さんとの様子はどうでしたか？」

「二人の事は考えた事もなかったですね。総支配人も長い間単身赴任でしたから、それなりの誘惑など

はあつたと思いますよ。実際に乗ったかどうかは別として。でも、そういう事はなかったと私は思いま

す。総支配人を偶像視する訳ではないのですが、部下として見ていて、総支配人には仕事に対する強い

信念を感じていましたし、それに奥さんをとてとても大事にしていましたから、間違いは犯さない。そう思

っていました。総支配人もお酒が好きだったから、一緒によく飲んだのですが『趣味は仕事なんだよ』

って笑っていました。マンションに帰ってお酒を飲みながら、奥さんと、電話やメールで仕事の話をする

るのが一番のストレス解消だ。って言っていました。嬉しそうに話す総支配人の顔が忘れられません。

だから全く信じられないのですが、あの、もしかして一方的な

菅原さんの作り話という事はないのです

か？」

相馬が訊いてきた。

「そういう事はありません。関係は事実です」

倉田は答えた。

「という事は？……」

そこまで言いかけて、相馬は口をつぐんだ。

「どういう事ですか？ 何か心当たりでもあるのですか？」

「いえ、そうではありません。ただ……奥さんが知っていたとしたら、その、気の毒だと思ったものですから」

相馬は手で顔をこすった。

「今だから思う事ですが、総支配人と菅原さんとの間に全く接点がなかった、と言うのが、何と言うのか、事実を物語っていたのかな。という気がしました。さっき

も言いましたように、総支配人は『スタ

ッフは家族』という気持ちで、特に末端のスタッフへの気遣いがありました。自分が仕事を紹介したに

も関わらず、菅原さんと総支配人が接している場面を見た事はありませんでした。敢えて避けていたの

かな？ と今は思っています。菅原さんがスタッフと親しくしていなかったのも、それが起因している

のかもしれない」

「川村さんが奥様を大事にしていた。というのはどういう部分

で感じましたか？」

倉田は道が外れたか？ と思ったが、部下の目から見た、川村雄一郎の妻への気持ちを知りたかった。

「飲んだ時以外は特に具体的に奥様の事を話されたり、そういう事はありませんでしたが、何と言うか、

普段の雰囲気になんかそういうのが現れているんですよね。何年か前に、奥様が身体を悪くされて入院された

事がありました。勿論、総支配人はその事は何も言いませんし、本人は普通に仕事をしているのですが、

総支配人の痛い気持ちが伝わってくるのです。反対に横浜に奥様に会いに行く時とか、奥様が昇格され

たり、雑誌に出たりした時は、喜びの気持ちが伝わるのです。

口に出さない重み……とでも言うのですし

ようか。上手く言えないのですが……」

「愛妻家でいらっしゃったんですね」

「愛妻家…… と言えばそうですが、奥様なしでは生きていかれないような、よく言うラブラブとかそう

いうのとは違いますが、人生のベストパートナーとでも言うのでしょうか。私はそう感じていました」

「話を戻します。菅原梓が退職した理由は何でしょうか？」

「去年末で退職したのですが、理由としては、本格的に接客の仕事をしたから。と私は聞きました。

正直、菅原さんが辞めるのは困る部分もあったので、引き留めをしましたが、今のこのホテルでは、菅

原さんの希望するポジションはなかった事もありましたし、こ

れから一人で生活して行くためにも、き

ちんとした仕事に就く方が良いだろう。と私は思いましたので退職願を受理しました」

「一年半程接していて、菅原梓はどんな人だったと思いますか？」

「そうですね。一言で言えば『真面目で地味な普通の人』でしょう。付き合いは良くなかったのですが、仕事ぶりはきちんとしていましたし、特に問題もなかったで、今回の事はとにかく『驚き』以外何物でもありません。事故の事も、総支配人との事も全て、そうですね。問われないと特に話す事もない、そういう人でした。ね。社内のスタッフも大体私と同じ考えです」

「私生活を知っている人はいないのですか？」

「私とはそういう話をした事はありませんでした。その部分では私より、ハウスキーパーと話をした方がいいかもれません。リネン室で一緒にいる事が多かったで、情報が聞けると思います。呼びましようか？」

倉田は遠藤検事を見て「どうしますか？」と訊き、遠藤がうなづいたのを確認して、相馬に、ハウスキーパーを呼ぶように頼んだ。

「職場での精神的な状態はどうでしたか？」
ハウスキーパーを待つ間に、倉田は相馬に尋ねた。

「いつも穏やかで、安定していましたね」

「最後になりますが、退職後菅原梓と会った事がありますか？
また、どなたかから菅原梓の噂話などを聞かれた事がありますか？」

「一度もありません。送別会も本人から辞退して来ました。退職後、会社からの年金手帳などの返却は全て郵送で行なっていたようです。噂話も聞いた事ないですね。社内で『菅原さんはどうしているのか？』と話をした記憶はありますが、仕事面では必要な人でしたが、仕事を離れると存在感がない、そういうタイプの人ですね」

そこに、ハウスキーパーの保坂真澄が緊張した面持ちで現れた。

「外注の清掃会社コスモサービスのハウスキーパーリーダーの保坂真澄です」

相馬が三人に紹介をした。

「忙しいのですよね。ご面倒かけて申し訳ありません」

倉田は、真澄の緊張をほぐすように笑顔で話しかけた。

「早速ですが、菅原梓の事です。保坂さんの知っている範囲で教えてください」

「菅原さんはどうなるのですか？」
いつもの元気の良い様子とは違って、真澄はおどおどした様

子で質問をした。

「それはまだ分かりません。これからきちんとした判断をくだす事になりますが、その前にこうして皆

さんにお話を伺っています。楽にしてお話してくださいね」

「菅原さんは綺麗だったし、いい人でした。どうしても女が多いので、いろいろ面倒な事がありますが、いつも一步下がって見ているような所もあって、余計な事も言わないし、だから評判は良かったですよ。

アメニティの補充作業をやってくれていましたが、菅原さんがやるようになってから、こまめにチェツ

クしてくれるので、補充漏れや欠品もなくなりました。それに、リネン室も私達が作業しやすいように

整理して、綺麗にもしてくれていました。昼休憩は出勤時間が私達より遅いので、入れ替わりにリネン

室で一人で食べていましたから、余り個人的な話はした事はありません。それでも時々、おせっかいな

人から何か聞かれても、うまく流していましたよ。私は『賢い人だ』といつも思っていました」

「仕事の面でもきちんとしていたという事です。川村さんの事で何か気付かれた事

はありますか？」

「総支配人との事も全く知らなかったです。むしろホテルの人には興味がなくて『亡くなったご主人を

思い続けている』そう思っていました。仕事帰りにスーパーで、仏壇に供える花を買ったり、ご主人が

好きなビールを買っている姿を何度か見た事があります。でも、

さつきもみんなと話していたのですが、
総支配人との事は、菅原さんの勝手な思い込みじゃないか？
って」

「実は、相馬さんも先程同じ事を仰ってました。菅原さんは自分の思い込みとか、そういう部分がある
人でしたか？」

「そういう事はなかったのですが……余りにも意外だったし、
信じたくない。みたいな気持ちもあります。

あー、でも、いつだったか？メイド仲間から、菅原さんは一人暮らしなのに、たくさん食料品を買い
込んでいる姿を見た。と聞いた事がありましたけれど、総支配
人と結びつけて考えた事はないです。そ

れに、去年の秋ですが、総支配人が夏の慰労を兼ねて、私達を
飲み会に誘ってくれた事がありました。

相馬さんは参加していなかったけれど、そうでしたよね？」

そう言って、真澄は相馬に同意を求めた。

「あの時、菅原さんも参加していましたけれど、総支配人と何
かある、という雰囲気もなかったですよ。

結構そういう事に敏感でうるさい人もいますが、そんな話も出
なかったし」

「ハッキリ申し上げますが、川村さんとお付き合いの事は事
実です」

倉田の言葉を聞いて、真澄は「そうなんですか……」とため
息をついた。

「保坂さんは、菅原さんをどう思っていましたか？」

「菅原さんが辞める時は『淋しい』と思いました、でも、いつの間にか忘れていて、そういう意味では印象が薄い人でした。印象が薄いと言うか、私は情が沸きませんでした。菅原さんとは1年半程の付き合いでしたが「賢くて、いい人」と言うのが、一番当たっている表現かもしれません。でも、それにしても、総支配人は本当に優しい人でした……」

また真澄は大きなため息をついた。

「どういう部分でそう感じられたのですか？ 良かったらお話ししてください」

「『権力がある者が先に折れる』って、総支配人はその事を実践していました。挨拶だって総支配人の方からしてくれるんです。私達はホテル所属ではないのに、コスモサービスの人間より、私達の事をいろいろ見てくれていると思っていました。そんなに細かく気を遣って大丈夫なのか？ と思った事があるって、総支配人に聞いた事があります。まだ、宿泊部支配人の頃です。『コスモサービスさんの仕事の一つ一つがこのホテルを作っているんです。大事な仕事なんです。皆さんが頑張ってくれているから、だから評判がいいんですよ。良いホテルを作り上げてくれる人達の事を、自分が気にかけるのは当たり前ですよ』って、そう言われて、総支配人の気持ち嬉しいと感じた事を覚えています。いい加減に手抜きしたりすると……忙しくて清掃に追われると、そういう事が起きてしまうのですが、そういう時は厳しく注意されました。うちの会社の人間ともトラブルになっ

たりした事もあります。でも、必ず後で

フオローしてくれて……メイドの中には『総支配人は細かくてうるさい』って文句言う人もいましたが、

私は総支配人は正しい、と思っていたのでメイドには『仕事だから細かくて厳しいのは当たり前。でも、

総支配人はちゃんと認めてくれている』と伝えていました。菅原さんとの事はよく分かりませんが、総

支配人がこんな事になって……」

そこまで話して、真澄は声を詰まらせ持っていたタオルで涙を拭った。

「保坂さんのお話しはとても良く分かりました。お忙しいのに本当にありがとうございます」

「亡くなられた川村さんは、スタッフの方に思われていてお幸せな方ですね」

初めて口を開いた遠藤検事の言葉に「まだ、信じられなくて

……」真澄は泣きながら呟き、相馬も目

頭を押さえた。

2

ハケ岳ガーデンリゾートホテルを辞去した三人は、かつて菅原梓が住んでいた、北杜市の県営住宅を

訪れた。

菅原梓の隣に住んでいる片岡ふみ子も、硬い雰囲気で三人を迎えたが、片岡ふみ子の第一声は、ハケ

岳ガーデンリゾートホテルのスタッフとは違っていた。

「菅原さんねー、やっぱり、こういう事になっちゃったのですね」

ふみ子がこれから話をする事は、今後の捜査にどういう影響を与える事になるだろう？

「いい人でしたよ」という答えが返ってくるか、と思っていた倉田は興味を持った。

「刑事さん、私は怖いんですよ。だってね、私が話した事がきっかけで、こういう事になっちゃったのか？ って。そう思うと居てもたつてもいられない、どうしようかって不安なんですよ」

片岡ふみ子は60代前半の、いかにも「噂話が好きそうなお節介なおばさん」の雰囲気があった。

「片岡さん大丈夫ですか？ 気を楽にしてくださいね。初めに伺いますが、自分がきっかけ、と言つのはどういふ事ですか？」

「私が亡くなった川村さんに菅原さんの事を話して、その事をまた、菅原さんに話をしてしまったから。

だから、菅原さんがああいう事をしたって。でも、私が話をしなくてはならなくなったのは、川村さん

が言い出したからなんですよ」

ふみ子は落ち着きがなく、不安そうな顔で話を始めた。

「分かりました。では、菅原梓がお隣に引越しをした時の事から、現在までを順番に話をしてくださいね」

「その前に教えてください。新聞に菅原さんと亡くなった川村さんとは、不倫関係と出てましたけれど、いつ頃からの関係だったのでしょうか？」

「2年近く前からです」

「2年近く前……という事はご主人が亡くなって半年も経たない頃でしょう。全くねえ……」

ふみ子は「堪らない」という表情をしてため息をついた。

「菅原さんが引越しをして来たのは6年程前だったと思います。それまでは、小淵沢駅の近くのアパ―

トに住んでいたが、空き家の抽選に当たったと言っていました。地元の人ではない、という事を知って、

私も県外者だったので嬉しかったですよ。亡くなったご主人とは年が離れていると思っていましたが、

仲が良さそうでした。団地は近所付き合いも薄く気が楽だ、と思われていますが、田舎の団地はうるさ

くてね、私は嫌なんですよ」

ふみ子は眉根に皺を寄せて、いかにも「面倒くさい」という表情をした。

「でも、菅原さん達は付き合い方に節度を持って、だからとても楽でしたよ。お互いの家に上がり込んで

だりとかはなかったですが、ベランダ越しに世間話をしたり、時々はおかずを持って来てくれたりで、

私も主人を亡くして一人で淋しかったけれど、面倒な近所付き合いは嫌だったから、程よい付き合い方

で、いい人達が越して来てくれた、と思っていました」

最初に感じた印象と違うふみ子を、倉田は黙って見つめていた。

「ご主人が亡くなった時は、可哀相な位に落ち込んでいました。だつて、急にあんな事で亡くしちゃつ

て。交通事故の事は知っていますよね？」

「ええ、知っています」

「ご主人が勤めていたホテルで仕事が出来なくなった事も、私はベランダでの会話で知りました。

それから少しずつ元気になって来ましたよ。ベランダで洗濯物を干している時に鼻歌を歌ったりして。

それにしても、菅原さんの部屋に男の人が出入りしている、なんていう事には気がつきませんでした。

でも、夜、ベランダに出た時、隣から煙草の匂いがしていました。だが、私は、菅原さんがまた煙草を吸

い始めた、と思っていました。奥さんが煙草を吸うのは知っていて、でも、やっと禁煙出来たのよ。

と聞いていましたが、ご主人が亡くなってから、また煙草を吸い始めたと思っていました」

そこまで話をしたふみ子は、倉田達に出すお茶の葉を入れ替えるためにキッチンに立った。

「菅原梓の少し違う顔が見えそうですね」

遠藤が倉田に耳打ちした。

「普段の生活ぶりはどういう様子でしたか？」

ふみ子が新しくお茶を入れ直してから、倉田は尋ねた。

「私は病院の清掃の仕事をしていますから、朝、8時には仕事に出ちゃうし。菅原さんの方が遅くて、

帰りも私より早かったから……それに、休みも違うし。そうですよねえ、特に目立ってどうのこうの

と言つのは、なかったと思いますよ。男の人が出来てから派手になったとかもなかったし。今朝、ゴ

ミを捨てに行った時に上の階の人とも話をしましたけれど、みんな『まさか！』って驚いていましたよ」

「細かい部分で変わったという事はなかったのですか？」

「私が変に思ったのは、急に引越しをする事になった、と言って来た時です。菅原さんの田舎は福島

で、両親も亡くなったから福島には戻れないけれど、北杜市の田園風景が福島に似ているから、一生

山梨にいる。そう言っていたのにねえ。しかも、私に引越しの話をしたのは引越しの前日でしたよ。

転居先も教えると言っておきながら、何も教えてくれないまま引越しちゃって、淋しかったですよ。

全く……」

そう言つて、ふみ子はため息をついた。

「引越しの理由は話していましたか？」

「やっぱりここに居ると亡くなったご主人を思い出すから、と

言ってましたよ。どうなんだか……」

「その時の様子はどうでしたか？」

「特に変な様子はなかったですよ。とにかく私は淋しいと思っ
たから、でも、菅原さんの事情もある
し、私がとやかくいう筋合いはないので黙っていました」

「引越し当日はどうでしたか？」

「運送会社の人だけで、お手伝いの人もいなかったから、手伝
いましょうか？ って言ったら『大丈夫
夫』って言って忙しそうにしていましたよ。後も綺麗にしてい
て、そういう所はねえ、きちんとした
人でしたよ。出発する時に何か言ってくるかなと思っていて、
待っていたら、いつの間にか終わって
いて出発しちゃったんですよ」
ふみ子は口を尖らせて言った。

「川村さんが訪れた時の様子はどうでしたか？」

「あの日、私が仕事を終えて帰って来たら、菅原さんの部屋の
前に、背の高い男の人が立っていて呼
び鈴を鳴らしているの、私は引越しましたよ。って伝えま
した。名刺をもらって……あの人が亡
くなつた川村さんだったのですよね……そう言えば、あの時、
この団地に似つかわしくない良い匂い
がして……何処かでこの匂いを嗅いだ、と思っていました、
ドアの外の階段の踊り場で嗅いだ匂い
だったのですよね。その時に、その人が菅原さんの部屋を訪れ

ていたんでしょうね」

ふみ子は複雑な表情を見せた。

「私が引越した、と伝えたら、気の毒になる位に驚いていました。どういうご用ですか、と聞いた

ら向こうから『菅原さんは子供が出来て結婚をするので、お祝い金を渡す手続きに来た』って言い出

しました。その人の話が変わったので、私は部屋に上がってもらったんです。そこで、菅原さんに子

供が生まれるという事と、声が出ない。という事を聞きました。そんな事有り得ないので、私は人違

いじゃないか？ と何度も尋ねましたけれど、間違いない。そう言っていましたよ」

「その時の川村さんの様子はどうでしたか？」

「その時は、そういう仲だなんて考えもしなかったので、会社の人が驚いて、困っているとは思わ

なかったですね……だから、菅原さんの事『病気で子供が産めなくなった事と、私とはずっと会話

を交わしていた』と言う事を話したんです。本当の事ですし、それを言わないと納得しないだろう、

と思ったからです。きちんとした人で、帰る時にも丁寧にお礼を言われて、この話は内緒にしてください

さい。と釘を刺されましたよ」

「菅原梓から電話があつたのはいつでしたか？」

「その次の日です。黙って引越してごめんなさい。って謝っていて、私に引越し先の住所を教えて

くれました。『誰か訪ねて来ませんでしたか？ 迷惑かけていませんか？』って訊かれたので、ちょうど良かった。って私は会社の人が来た事を伝えて、川村さんに菅原さんの事情も話した。と言ったら菅原さん怒っていましたよ。『そんな事まで話したんですか？』って責められました。余計な事を話した私も悪いんですけど、ちゃんとしなかった菅原さんが悪いって、私も文句言っちゃいました。それで、電話をしながら分かったんですよ。昨夜の人と菅原さんの間で何かあったのではないかな？だから『余計な事に巻き込まないでね』そう言っただけで電話を切りました」

「菅原梓の様子はどうでしたか？」

「自分が悪いって言うていました……口調はそうでもなかったけれど、内心は相当怒っていたと思います。まずよ。私も後味悪かったけれど面倒くさくて、これっきりにして欲しい。と思いました」

「菅原梓は取り乱したりはしていませんでしたか？」

「冷静でしたよ。だから余計に嫌だったんですよ。自分が悪い、みたいなそういう所も……腹が立ちましたよ」

その時の感情を思い出したのか、ふみ子は怒った表情になった。

「菅原梓の今までの印象はどうですか？」

「印象……ですか？ その事が無ければいい人だと思っていた
と思いますよ。貞淑な妻の顔をしてお
きながら、不倫していた……なんて、しかも偽装工作までして
……」

「いい人だと思っていた。という印象は、今となってみたら、
という事ですか？ それを知らない時
の印象はどうでしょうか？」

「言われてみればそうですね。でも、その事を抜きになん
て考えられないですよ。だって、偽装
妊娠や、会社や自分の家に引き込む男の人には、声が出ない演
技をしているなんて、普通じゃ有り得
ないでしょう？ 酷い話ですよ」

「精神的に問題がある、という事ですか？」

「そうじゃないですよ。精神異常ではなくて、したたかで計算
している、という事です。電話をか
けて来たのだって、タイミングが良すぎると思わないですか？
私が懐かしくなったのではなくて、
様子を探りたいから、そうでしょう？ この年まで生きて来て、
こんな嫌な思いしたのは初めてです
よ。本当に人との付き合いって難しいと、今更ながら思ってま
すよ。でも、精神何とか……精神鑑定
でしたかしら、警察ではそれをするのですか？」

「まだそういう事はこれから決める事で、その為にもいろいろ
お話を伺っているのです」

「私が話した事も大きく影響するって事ですか？」

「そんなに深刻に考えなくて大丈夫ですよ。いろいろな人のお話を伺って、本人からの話を聞きながら判断して行きます。片岡さんは事実と思った事を、そのままお話頂ければそれで結構です」

ふみ子の気持ちをほぐすように、倉田は笑顔で伝えた。

「刑事さんだって、私が話した事が『きつかけ』だって思っているのですよね？」

「片岡さんには責任はないと思いますよ。川村さんが片岡さんに具体的な事をお話したのは、何故、

菅原梓が突然に引越しをしたのか？ その理由を川村さんが探るための事だったからでしょう。片岡

さんがお話しなくても、いつか川村さんはその事実を知る事になりましたよ。菅原梓に話をした事だ

って、菅原梓が探ってきたからです。こういう言い方をして失礼かもしれませんが、片岡さんは利用

された、のですよ。それより、その前の菅原梓の行為そのものが問題だったのです。いつまでも隠し

通せる、と思っていたのが間違いだったのですから、ご自分を責める必要はありません」

「本当にそう思ってくれますか？　ずっと眠れなくて、仕事も休んです」

「お気持ちは分かりますよ。嫌な事に巻き込まれちゃいましたね。倉田が言うように、片岡さんが気に病む事はありません」

遠藤が声をかけた。

「刑事さん達がそう言ってくれて……少しは安心しましたけど。でも、川村さんにもご家族がいるの

ですよ？ 菅原さんは、相手の家族や亡くなったご主人のためにも、きちんと罪を認めて謝罪して、

罪を償ってもらいたいと思いますよ」

ふみ子は少し安心したのか、急に泣き始めた。

「片岡さんの仰る通りです」

「もし、菅原さんがまた演技をしているのなら『もういい加減にしなさい』と、私が言っていたと伝

えてください。『したたかで計算している』なんて言っちゃいましたけれど、こんな私に良くしてくれた菅原さんの事は嫌いじゃないですよ。好きだから、ちゃんとしてももらいたいんですよ。それで、

もし、罪を償って戻って来た時、行く所がなかったら……またここに帰って来てでもいいんですよ。よ

そ者同士、仲良く生活しましょう。ってその事も伝えてください」

そう言ってふみ子は本格的に泣き出した。

「片岡さんのお気持ちは菅原梓に伝えます。今日は本当にありがとうございました。何度も言います

が、ご自分を責める事はなさらないでくださいね」

「ありがとうございます。明日から仕事に出ます」

膝を庇うような仕草でふみ子は立ち上がり、玄関口で三人を見送った。

「せんない……ですよね」

次の聞き込み先である、リゾートイン小淵沢というホテルに向う車内で、遠藤がポツリと呟いた。

「それに、やるせない……という思いもプラスしてます」

検事である遠藤と、県警捜査一課の倉田に遠慮てか、今まで口を挟む事がなかった米山が、ハンド
ルを握りながら初めて口を開いた。

「菅原梓は、親子程年が違う片岡さんからの言葉を聞いてどう思っ
つのでしょうか？ 僕は、菅原梓に

は、片岡さんや川村さんの奥さんと対峙させたいと思います」

「お前の言いたい気持ちは判るが、そう熱くなるな。片岡さん
も言っていただろう？ したたかに計

算しているって。こつちが熱くなったら、見えるものも見えな
くなるぞ」

倉田は自分にも言い聞かせるように言って、運転している米
山の肩をそつとたたいた。

三番目に訪れたリゾートイン小淵沢での菅原梓は、ハケ岳ガ
ーデンリゾートホテルや片岡ふみ子の
話とは全く違っていた。

宿泊予約日数が違うとクレームを付け、嫌味を言い、ロビー
で挙動不審な行動を取り、最後にはバ
ラの花を折って帰った。しかし、宿泊した部屋は綺麗できちん

としていた。

帰る時にホテルの部屋を片付けて帰る、というのは「たしなみ」だろうし、後で清掃する人への思

いやりでもある。大袈裟に言えば、利用した人間の品格なのだろうが、事故当日、精神的に不安定だ

った菅原梓に、その事が出来るだろうか？

第九章

1

「お疲れ様でした」

午後6時過ぎに捜査本部に戻った倉田を、菅原梓の取調べを終えた柳田が迎えた。

「ご苦労だったな。今日の被疑者はどうだった？」

倉田も柳田の労を労った。

「一応今日の取調べは終了しました。一連の行為について、理解出来ない部分もありますが、理由も

述べています」

柳田は分厚い調書を倉田に手渡した。

「起承転結を話している、という事になるんだな」

倉田の中にまた疑問が沸き起こった。

「それから、倉田さん達が留守の間に、こういう人が来たのですが」

柳田はクリアファイルと名刺を倉田に渡した。

「すでに退官しているので、この名刺は当時の物です」

柳田からの説明を聞いて、倉田はファイルからコピーされた書類を取り出した。

「この手紙なんです」

柳田は、その中から一枚の手紙のコピーを取って倉田に見せた。

「なんだ、これは？ 川村雄一郎様……」
倉田は思わず声をあげた。

「15年前に川崎で起きた、ホームレス撲殺事件の関連資料です。解決済みの事件で問題はないのですが、ただ一つ、その手紙だけは遺族も引き取らなかったようです。ずっと川崎幸北署に保管してあります。笹岡さんは15年もの間、ずっと気になっていたそうです。2日に、事故のニュースで『川村雄一郎』という名前を聞いて『もしや』と思い、川崎幸北署に出向いて再度確認したところ、この手紙の宛先と同じ人物ではないか、という結論に達したそう。こっちの許可が下りれば、川村さんの奥さんに直接会って手渡したい。と考えているようです。笹岡さんの事も、事件の事も裏は取ってあります」

「これは……」
倉田はコピーされた手紙を読んで絶句した。

「昨日、遠藤検事に個人的な考えとして伝えた、川村夫婦の印象は間違っていないかもしれない。だが、奥さんは……辛いだろう」
倉田は真理の顔を思い浮かべた。

「僕にも見せてください」
倉田から手紙のコピーを受け取った米山も、読み終わってしばらくの間は何も言えなかった。

「いいだろう。笹岡さんには俺から電話をして、是非渡すように、と伝えるよ」

そう言つて、デスクの上にある電話機を引き寄せた。

倉田が笹岡との電話を切つたと同時に、婦警の深沢真知子が捜査本部に現れ「倉田警部、ちょっと

いいですか」と、遠慮気味な様子で声をかけた。

「どうした？ 被疑者に何かあつたのか？」

「実は、ずっと取調室で菅原梓の調書を取っていて、違和感を覚えていたのですが……」

「違和感？」

「そうです。菅原梓は取調べが終わつて席を立つ時、毎回、座つていた椅子を元の位置にきちんと戻

しています。礼儀正しいのだと思うのですが『椅子を戻す』という動作をする被疑者を見た事がない

のです。ましてや、心神喪失の可能性がある人間がそういう事をするのか？ と疑問に思いました。

それで、その、やはり演技をしているのではないか？ そう思つたものですから」

「なる程、女性らしい観察眼だな。よし、分かった。本人の調書と今日、聞き込んできた内容を照ら

し合わせよう。明日から始める事にする」

「それともう一つ……」

深沢は言いにくそうに躊躇っていた。

「こんな事言っているのかどうか……倉田警部補、これは私の一人の感想です。だから、そのつもりでいてください。言った事が警察官として相応しくないと思ったら叱ってください」

「何だ？ どうした？」

思いつめた様子で、少し涙目になっている深沢を見て、倉田は面食らった。

「菅原梓に精神鑑定をして、心神喪失が認められ不起訴になった場合の事です。精神科の治療を受けて完治して、菅原梓が社会に戻った時、川村さんの奥さんの身の安全が気になるのです」

深沢は不安げな表情で倉田を見た。

「どういう事だ？」

そこにいる全員が深沢を見つめた。

「最後の最後に……何かそういう怖さを、女の勘で申し訳ないのですが、を感じます」

「奥さんに危害を加えると言うのか？」

「菅原梓は、あの事故を起こす時『一緒に行きなさい』という天の声を聞いた。と言っていました」

でも、一緒に行けなかったのですよ。多分、菅原梓は『被害者

に愛されていない』と悟ったと思いま

す。そうしたら、次にする事は被害者が愛していた奥さんを抹殺する事だと……私はそう思うのです。

警察官として、まだ未確定の事に関して、思い込みや推測で結論じみた事を言うのは間違っているし、

奥さんに対して必要以上の気持ちを抱いたら、見えるものも見えなくなってしまう、それは承知して

います。でも、もうこれ以上、あの奥さんに……」

そこまで話して、深沢真知子は手で顔を覆って泣き出した。

「深沢君の気持ちは分かった。君の言うように俺達は警察官だが、人間だから感情はある。それ

でも感情に流されてはダメだ。先入観や思い込みは危険だ。だから、真実だけを見つめる。その事は

みんなも充分承知していると思う。遠藤検事は簡易精神鑑定の必要は有りと考えているし、不起訴に

なる可能性もある。明日から、調書と聞き込みで得た情報をくまなくチェックし、照らし合わせる。

テレビでもやっているだろう。『根こそぎ拾う!』って。少しでも疑問があるのだったら、いいか!

菅原梓をよく見て、一つも漏らすなよ。明日、もう一度、菅原梓に向かってみる事にする!」

「はい、分かりました!」

全員が声を揃えて答えた。

「頼むぞ!」

倉田は全員を見回した。

心神喪失の場合、特別扱いされる事が多く「刑法39条が余

りにも安易に乱発され、不起訴や無罪

になる事が多すぎる」と言われているが、倉田にはその事は当
てはまらなかった。精神鑑定は科学や

証拠ではなく、推測に基づく意見にすぎない。精神鑑定の目的
は、事件が起きた過去の一時点におけ

る精神状態を推理する事に他ならない。しかし、そこまでの過
程の中で現れる事がある筈だ。まして

や、心神喪失にも演技が疑われる菅原梓に関しては、目を凝ら
していれば真実が見えてくる…

2

翌日、8時から始まった取調べは遠藤検事も同席し、倉田が
担当した。

「どうですか？ 眠れていますか？」

倉田は優しい眼差しを向けて梓に尋ねた。

「はい」

聞き取れない位の小さな声で答えた梓は、上目遣いに倉田を
見た。

「でも、最近よく聞かれるのです。『どうしてここに居るの？』
って」

やはり小さな声だが、目はしっかりと倉田を捉えていた。

「誰に聞かれるのですか？」

「彼に……です。私が家に帰らないと俺は訪ねて行けないよ。」

「ってそうも言われます」

「彼とは誰の事ですか？」

倉田に問われて、梓の顔が急に輝いた。倉田と遠藤はじつと梓を見つめた。

「夫の川村雄一郎です」

「夫の……ですか？」

「そうです。だって、彼は私と結婚してくれると言いましたから」

「そうですか。川村雄一郎さんは今は何処にいますか？」

「分からない」

「分からなくはないでしょう？ 菅原さんは全部お話していますよね」

「時々分からなくなるのです。だって昨夜は、私のそばにいたのですから」

「もう一度菅原さんから聞いた話を繰り返しますね。あなたは、川村雄一郎さんとは約二年程前から

特別な関係でしたが、あなたが、川村さんの奥さんである川村真理さんの元を訪ねた事で、川村さん

から責められ、その事が原因で、川村さんには黙って千葉に引越しをした。その後、隣に住んでいた

片岡ふみ子さんから、川村さんが失声症と偽装妊娠を知ってし

まった、という事を知りつつ状態にな

った。7月2日金曜日朝10時頃、川村さんに会いたくて、ホテルの従業員駐車場で待ち伏せをして

いたが、出て来た川村雄一郎さんの車の後を追けた。そして「一緒に行きなさい」という天の声を聞

いた事で咄嗟に行動を起こした。中央自動車道笹子トンネル手前で、追越し車線から走行車線に無理

な車線変更をし、走行車線を走行していた川村雄一郎さんを死に至らしめた。事故が起きた事は承知

だったがそのまま逃走した。間違いありませんか？」

「……そうだと思います」

「どうして、7月2日だったのですか？ また、川村さんが、

その時間に駐車場に現れるという事を

どうして知ったのですか？」

「ずっと前に、7月2日の10時に会う約束をしていたからです」

また、ウツトリとした表情になった。

「ずっと前と言うのはいつの事ですか？」

「覚えていません」

「あなたにとって川村さんは全てだったのでしょうか？ それなのに覚えていないのですか？」

「まだ付き合っていた頃、東京に行く前に会いたいから、ホテルの従業員駐車場に来るようになると言わ

れていました。だから、ずっと覚えていたのです」

……ホテルの従業員駐車場……倉田は、梓が発する言葉の一つを聞き漏らさなかった。

「どうして従業員駐車場だったのですか？」

「……」

梓は答えなかった。

「デートの約束に余りふさわしくない場所ですよ」

「そう言われていました。それに、彼も私も車が好きだから……」

……

「そうですか。川村さんの車がチェロキーで、あなたがエステイマですか。余り、色っぽい車じゃないな」

いな」

「……」

梓の顔が不機嫌になった。

「余談ですが、私の家内は大の車好きなんです。あなたも山梨に住んでいたから分かっているでしょ」

ようが、車は一家に一台じゃなくて、成人に一台ですよ。薄給の身には厳しい生活環境です。それ

で、最近、家内が車を買換えたんですよ。某メーカーのコンパクトカーです。それがね、ボデイカ

ラーがメタリックがかったピンクでしてね。私の家内にはふさわしくない色なので、それを言ったら

家内に言われました。『車はハンドバッグ代わりなのよ』って。それでも家内には似つかわしくない
んですけどね」

倉田が何を言いたいのか？……梓の不機嫌さはそのままだが、
じっと倉田の顔を見ていた。

「ハンドバッグ代わりという女性の気持ちは分かりました。家内には似合わない女心ですが。それで、
久しぶりに川村さんに会うのに、どうしても、あなたがエスティ
マを選んだのか？　って、私は分から
なくなつたのです。レンタカーだったとしたら、恋人とのデー
トにもう少し可愛い車を選んだ方が良
かつたのかな？　と」

「……」

梓は怒つたような表情で倉田を見ていた。

「すみません。余計な事ですネ」

「身の安全を考えて……そう、彼が私を思ってくれて、心配し
てくれて、大きな車にしなさい。そう
言つたのです」

「そうですね……でも、チェロキーの傍に、コンパクトカーが
寄り添っているのは可愛い光景ですよ
ね」

「彼は大きな車が好きなんです」

「分かりました。そういう事だったんですね」

……理由に自分の意志は入っていないが……

「話が逸れてしまつてすみませんね。自分から去つて、しかも、川村さんがあなたの偽装を知つてし

まつた後でも、川村さんはその約束を守ると思っていましたか？」

「思っていました。彼はちゃんと出て来ましたし。それに、あの事は……奥さんが全て仕組んだ事です！」

「どういう事ですか？」

「私は、彼にはきちんと謝るつもりでした。それなのに、あの奥さんが片岡さんに全部話してしまつ

たから、だからこんな事になったのです。」

「川村さんの奥さんが片岡さんに話をした、という事は誰から聞きましたか？」

「片岡さんから聞きました」

「ところで、片岡さんがあなたの事を心から心配していましたよ」

「片岡さんはいい人でした。とても良くしてくれて……」

「そうですね、あなたはそう思っているのですね。でも、ウソ

つきですよ」

「ウソつきなんて……そんな事を言う人ではありません！ アツ……でも……」

「まあ、いいでしょう。川村真理さんが告げ口したのですね」
倉田は梓の言葉を遮った。

「片岡さんはどうしていますか？ 元気でしたか？」

「今も言ったでしょう？ 元気ですが、あなたの事を心配して
いました。いいですか、話を戻します

よ。さっきの事です、川村さんの奥さんが全部話をした、とい
うのはどういう事ですか？」

「昨夜、彼がそう言いました。騙されたって」

「どうして、ホテルの駐車場で川村さんとはお話ししなかった
のですか？」

「今はダメだ、と彼が目で合図したからです」

「それは辛かったですね……その場所に誰かがいたのですか？」

「分かりません」

「川村さんだって、あなたに会いたかったでしょうね」

「辛かったと思います。私も彼に会いたかったのに。だって愛
していました。彼も私の事を愛して

いた。携帯だって……全部あの奥さんに見つかって。だから連絡が取れなかった。意地悪なんです。

全部、あの女が悪い！」

「あの女とは誰ですか？」

「奥さんです！」

「奥さん？ 誰の奥さんですか？」

「彼の……私は名前を言いたくありません！」

ここで、菅原梓は貧乏ゆすりを始め、落ち着かない様子になってきた。自分が導いた方向で梓は乱れ始めた。こういう状態になるだろう、と倉田は承知していた。

「菅原さん、少し疲れましたか？」

「大丈夫です。でも、あなた達は間違っている。彼の奥さんって私の事です。他に誰がいるの？」

「私達は間違っていないですよ。川村雄一郎さんの奥さんは、川村真理さんで、あなたではありませんね
んよ。それに、さっき、あなたも『奥さん』って言ってましたね」

「だから、違う……って、そう言っているのに」

「話を戻します。川村さんに会いたくてホテルで待っていた。

と言う事の他に約束をしていた。と

いう事を付け加えます。会うために約束をしていたのに、それが叶わなくて、車の中では連絡を取り合っていなかったのですか？」

「携帯をあの女に取られたから……連絡が取れなくて……」

辻褄が合っていた。

「会えないのに、どうしてもあんな事をしてしまったのですか？」

「

「一緒に逝きなさい。と言われたし、あの女の事を考えたら力ツとなりました」

「カツとなったのですか？」

「そうです。猛烈に腹が立ちました！」

「でも、会いたかったのに、どうして逃げたのでしょうか？」

「私だけ逝けなかったから……怖かった」

「怖い、という理性が働いたのですね。でも、一緒に逝けなかった……という事は川村さんがど

ういう状態になっているか、ちゃんと考えられたという事です
ね」

「彼がどうなっているかは分からなかった。でも、私が運転している車は何ともなかったし、だ

から、怒られると思ったのです」

「本当に愛していたら『逃げる』なんて事は出来なかったのではないですか？ 川村さんの事を

愛している、なんてウソでしょう？」

「ひどい……私達はずっと愛し合っていた。どんなに愛し合っていたかって……」

「そうですね、愛し合っていた。それでも、逃げた」

梓が最後まで言い終わらないうちに、倉田が口を挟んだ。

「警察にだって……行こうと思っていたのに……」

「どういう事ですか？」

強制された上での供述にならないように、遠回しな言い方をした。

「そうです……警察に行けば……自首すれば……彼を助ける事が出来るかもしれないから」

倉田と遠藤の目が合った。

「カツとなって」との供述と「自首」は本人の認識・意識の証明になり得るから心神喪失にはあ
たらない。

「ところで、倉田さんの奥さんは可愛いですね」

取調室から、捜査本部に戻ったところで、開口一番に遠藤が言った。

一年位前だろうか？ 葦崎で起きた強盗殺人事件を倉田と担当した事があったが、その時、

葦崎署に着替え届けに来た倉田の妻の顔を思い浮かべて言った。

米山や柳田達が、興味津々という顔で二人のやりとりを聞いていた。

「私の家内が可愛い？ しつかり者だと言われた事はありませんが、可愛いなんて言われた事はな

いですよ」

部下の前で妻の話をされた倉田が照れた顔をした。

「さっきの話ですよ。『車はハンドバッグ代わり』なんて言うところは可愛いですよ」

「まさか！ あれは、息子の嫁が言った話です。そういう事を言う女房だったら、もう少し大事

にしてますよ。半年程前に二人で家に遊びに来て、嫁が買う車の事で夫婦喧嘩を始めたのですよ。

息子の嫁も、家内に負けない位のしつかり者で、余り色気のない嫁なんですけれどね、その嫁が

似つかわしくない事を言ったので覚えていたのです。だから、使わせてもらいました。先月、息

子の家に行った時、駐車場に息子の黒い4WD車に寄り添うよ

うに停められている、嫁のピンク

のコンパクトカーを見て、微笑ましいというか、可愛い感じがしました」

そう言って倉田は大きな声で笑った。

……そう言えば、川村真理さんも車を運転して来たが、あの奥さんはどんな車に乗っているの

だろう……倉田は、ふとそんな事を考えた。

第十章

1

真理は、神奈川県警川崎幸北署元警部の笹岡崇の訪問を受けた。

昨日、山梨県警から「笹岡という元警部が訪問する」という連絡を受けていた真理は、70歳

位だろうか、白髪頭の実直そうだが、いかにも元警部という雰囲気を持つ笹岡の訪問に身構えていた。

笹岡は、まず突然の訪問の無礼を丁寧に詫び、雄一郎の仏前に線香を供えた。

そして、ダイニングテーブルで向かい合った真理に、簡単な自己紹介をした後、透明なビニール袋を差し出した。

ビニール袋には「川村雄一郎 2丁目 プラザ石川」と書かれたメモと「川村雄一郎様」と書かれた古そうな封筒が入っていた。真理はメモと古びた封筒の「川村雄一郎」という文字を驚いた表情で見つめた。

「この封筒とメモは、平成7年に起きたある事件の被害者が持っていたものです。」
そう言っただけで笹岡は、真理が用意した冷たい麦茶を美味しそうに飲み干した。

「事件は犯人も逮捕され解決されておりましたが、被害者の持ち物をご家族にお返しする際、ご

家族から、見覚えのない方へのお手紙だという事で、受け取りを拒否されておりました。その後、

署で保管しておりましたが、宛名の方にお渡ししたい。とメモの住所を訪ねましたが探し出す事

が出来ず、分からないまま現在に至った次第です。個人的に私は気になっておりましたが退官し

てしまいました。それが、先日、中央自動車道での事故のニュースで同じお名前を拝見して、も

しや？ と思ひまして伺わせて頂きました。まず初めに『川村雄一郎さん』という事ですが、該

当されず間違っていましたら、お詫びさせて頂きますので、その際はご容赦頂けます様お願い

いたします」

笹岡の話し方は丁寧だった。

「平成7年、川崎、雄一郎」という、その3点の関連について思い当たる事があった真理の心臓が少し波打ち始めた。

「差し支えなかったら教えて頂きたいのですが、その事件は、9月の出来事ではありませんか？

ホームレスが殴打されて殺害されたという」

真理は恐る恐る尋ねた。

「そうです。今、仰られた事件ですが、お心当たりがあるのですか？」

笹岡は身を乗り出して真理に尋ねた。

「被害者は……当時ベールブルースそう呼ばれていた、元プロ野球選手の佐々木真司……私の父です」

「エッ！　なんですって！　被害者の佐々木真司さんがあなたのお父上？」

笹岡は真理の突然の話に驚いた。

「正確に言うと、私は父の隠し子です。父と……母は正式に婚姻関係はありませんでしたから……」

忘れる事がなかった父と母の事を思い、急に胸が熱くなり言葉が詰まった。

「申し訳ありません……ちょっと辛い事があったものですから。でも、どうして亡くなった父が、

主人宛の手紙を持っていたのでしょうか？」

「手紙を読ませて頂きました。短いお手紙でしたが、私は文面を全部覚えています。あなたのお

父上の手紙は、川村雄一郎さんへのお礼とお願いでした。辛い事を思い出させて申し訳ないので

すが、当時の事をお話頂けますか？」

涙を堪える真理に、笹岡は優しい口調で話しかけた。

「分かりました。お話いたします」
真理は話を始めた。

「私は生まれた時から父を知りませんでした。母から父は船員で、遠い南の島で船が遭難して、父の全てを大きな魚が持っていてしまった。そう聞いていま

した。でも、母が亡くなつて遺品

の整理をしていた時、母の過去を知る事になりました。母は未婚の母で、父はプロ野球の選手で

したが、他に家庭を持っていました。私は父の事を知りたくていろいろ伝を頼って調べて、プロ

野球を引退した父が、横浜の寿町で生活している事を知りました。寿町を探し回りましたが、中

々見つからなく途方に暮れていた時、父が「ベールブルース」という名前を名乗っている事を教え

てくれた方がいて、今度はその名前を頼りに探し回りました。その姿を偶然に主人に、結婚する

前でしたが、見られてしまったのです。そして、主人と一緒にいる時に、父が殺害されたという

ニュースを聞きました。私はショックでしたが、主人がその気持ちを救ってくれました。身元不

明という事で扱われていたようでしたが、私に父の事を教えてくださった方の先輩が、父の事を

知っている方で、警察に出向くという事を伺って、私は安心して黙っていました。申し訳ご

ざいません」

「いや、あなたが謝る事はありませんよ。そうです。今でもハッキリ覚えています。お父上の友

人の元プロ野球選手の方のご協力で身元が分かり、ご家族に無事引き取られました。そうだった

のですか……そういう事があったのですか……ご主人を亡くされて、更に辛い事を思い出させて

しまつて、本当に申し訳ありません」

笹岡は深々と頭を下げた。

「でも、どうして父が主人に手紙を書いたのでしょうか？」

「お父上もご主人も亡くなられてしまった今、細かい事は分かりません。でも、その時の事を覚えていらつしやるあなたでしたら、この手紙を読めばきっと判

ると思います。私は亡くなられた

ご主人の事を存じ上げませんが、ご主人は心の優しい方だったのでしょね。そして、お父上も

あなたの事を大事に思っていたのでしょ。その事が私には手に取るように分かりますよ……」

そう言つて笹岡は慌ててハンカチを取り出し、涙を拭ぐい「すみません。年を取ると涙もろくなつて」と詫びた。

「手紙を読ませて頂いてよろしいですか？」

「是非、読んでください」

笹岡はビニール袋から手紙を取り出し真理に手渡した。

真理は震える手で手紙を開いた。ボールペンで書かれ、誤字を消した後が残る、たどたどしい文字が飛び込んできた。

「川村雄一郎様

この手紙が貴兄に読まれる時が来るかは分かりませんが、もしその時が来たら、貴兄のそ

ばには娘が一緒にいると信じています。

私は伊勢佐木町のお祭りの夜、話をしてくれたお礼として、貴兄からおみやげを手わたさ

れた者と一緒にいました。そして、約二十年ぶりに娘の姿を見る事が出来た者です。

娘は私を探してくれていました。でも娘に「お父さんだよ」とは言えませんでした。私は

娘を捨て、そして、あの場所で、娘に親探しをさせるようなひどい父親だからです。

娘は辛かったでしょう。でも、あの時、貴兄は、寿町で私を探している娘を心配してくれ

ていました。こういう場所で生活していると、言葉のひとつひとつや言い方でその人の心が

わかります。私は貴兄のやさしさと、娘が、父である私を思ってくれているやさしい気持ちを感じました。

あの時、私は貴兄に「娘を頼みます。幸せにしてください」と目でうったえました。が、そ

の気持ちは伝わったと、貴兄の目を見て感じました。

「心やさしくあたたい男は真の意味で男らしい頼りになる男」だと信じているので、貴兄

はその通りの男だと思いました。だから、私は安心したので横浜をはなれて、今は川崎に来

ています。こういう生活ではなかなか、貴兄を探すことは出来ないのですが、いつかこの手

紙が貴兄の手にとどき、お礼をつたえることが出来ることをのぞんでいます。

やさしくしてくれて本当にありがとうございました。「私は幸せです」そのことを娘にも

つたえてほしいのです。そして、娘も幸せになるように。どこにいても祈っています。

ベールブルース」

読み終えて真理は人目もはばからず声をあげて泣いた。

2

……笹岡は辛かった……

「佐々木真司の願いは叶えられた。しかし、信じて娘を託した川村雄一郎も、悲しい最期を迎えてしまっていた」

笹岡ももらい泣きをしていた。

「また、悲しい思いをさせてしまつて本当に申し訳ありません。でも、あなたのお父上はきっと喜んでいてと思います。そして、天国であなたのご主人と再会していると思いますよ」

「あの時、ニュースで父の事を知った時……私は、父は娘が探している事が辛くて川崎に移つて、そしてあんな酷い目にあつた。と自分を責めました。でも、主人は『それは違っているよ。成長した娘を見て安心して川崎に移り住んだ』と慰めてくれました。でも……それは……本当の事だつたのですね。父と主人は心で話をしていたのですね」

「仰る通りだと思います。お手紙の中で、お父上はご主人の事を『心が優しく温かい男が真に男らしい頼れる男』と仰っていましたが、お父上もそういう方だったのでしょう。だから、お二人

は心で会話が出来たのだと思いますよ」

「父が殺された日に私は主人にプロポーズされました。当時、私はホテルに入社して半年程で、主人は私の上司だったのです。私は入社早々から主人に憧れていたのですが、ずっと片思いだと思っていて、誰にもその事を話した事はありませんでした。付き合う事もないままの突然のプロポーズに、声が出ない位に驚いたのですが、父が……私達を結んでくれたんですね」

「素敵なお話ですね」

「笹岡さんのお気持ちには……本当に感謝いたします。ありがとうございます」

「この手紙をお届けする事が出来て、私は本当に嬉しく思っています。事故の事は山梨県警で伺っています。これから大変でお辛い事もあるかと思いますが、もし、私がお力になれる事があつたら、いつでもご連絡ください。今は、隠居の身であります」

そう言つて笹岡は真理に、連絡先を記したメモを渡し「私はこれで失礼します」と腰を上げた。

「お伺いしたい事があるのですが、宜しいですか？」
腰を上げた笹岡を、真理は引き留めた。

「何でしょう」
笹岡は椅子に腰を下ろしながら尋ねた。

「今現在、勾留されている被疑者がどういう自供をしているか？
を知る方法を教えて頂きたい
のと、その被疑者に面会する事は出来ますか？」

「現在はまだ取調べ中ですから、自供内容などは警察では話をする事は出来ません。面会について

ても、被疑者との関係で、規制をされる場合があります。希望されるのでしたら、山梨北署に直

接申し出をされるのが一番良いと思いますよ。ただ、どういうお気持ちで被疑者に面会したい、

と考えているのか分かりかねますが、かなりの覚悟が必要になりますよ」

笹岡は菅原梓については、倉田からある程度の情報は得ていた。

「そうでしょうね。私は、彼女の本当の気持ちを聞いてみたいのです」

「気持ちを聞きたいのであれば、今はまだ早急すぎると思いますが、刑が決まって落ち着いてから

の方が、被疑者もきちんとお話出来るのではないのでしょうか」

「分かりました。性急に事を運ばない方がいいのでしょうか」
少し考えた後、真理は答えた。

「立ち入った事を伺いますが、ご主人はどちらのご出身ですか？」

「横浜の根岸です」

「ご両親は根岸にお住まいですか？」

「両親はすでに亡くなっています」

「申し訳ありません。余計な事を聞いてしまつて」

笹岡は自分の不用意な質問を反省した。

「大丈夫ですよ。主人は高校生の時に母親を亡くして、お義父様は大学を卒業して就職した年に

亡くなりました。生は受けなかったのですが、私達は子供も二人亡くしています。多分……今

頃……みんなで仲良くしていると思います。私だけ仲間はずれ」
真理は、雄一郎の遺影と脇に飾つてあるテディベアを見て、
笑いながら笹岡に答えた。

「仲間はずれですか？ やきもち焼きなのですね」

笹岡は胸が詰まつたが、真理の笑顔に笑顔で返した。

「お義母様はロックが好きで、主人もロックが好きだから、きつと毎晩ロックを聴きながら、お

酒を飲んで楽しんでいるのでしょうか。ちょっとズルイですよ
ね」

「ホテルのお仕事をされていると伺いましたが、当分お休みです
か？」

笹岡は話題を変えた。

「週明けから出勤する予定です。二人ともホテルの仕事が好きな仕事バカですから。それに……」

主人は仕事に厳しかったので、いつまで休んでいるんだ。って

叱られそう……」

声が詰まって最後まで言えなかった。

「奥さんが仕事に復帰して元気で過ごされるのを、ご主人も亡くなったご家族も見守っているで

しょうね」

笹岡の言葉は温かった。

「はい。だから、いつまでもメソメソなんてしていただけないですよね」

真理は涙を指で拭った。

「長居してしましまして申し訳ありません。私はこれで失礼します」

「本当に今日はありがとうございました。ところで、笹岡さんは和食は好きですよ……ね？」

また、真理が笹岡を引き留めた。

「好きどころか、毎日が和食です」

「良かった！ 実は、私が勤めている横浜ロイヤルガーデンホテルに『樹^{いつき}』という、

おばんざいの食事処が新しくオープンしました。おばんざいって、京都で日常的な惣菜を言うの

ですが、ホテルのレストランですけど、気取らなくて美味しいお食事が楽しめます。よろしか

ったら、奥様と是非いらしてください。なんて……宣伝しちゃいました」

「いいですね。お酒もありますか？」

「もちろん、日本中の銘酒が揃っていますよ。好きなんですね。私も大好きですけど」

「是非、伺わせてください。その時は一緒にしましょう。ただ、家のカミサンも私に負けない酒豪ですが、大丈夫ですかね？」

「益々、大歓迎です。そうだ！ 待ってください」
そう言つて、真理はバッグの中の名刺入れから名刺を取り出して笹岡に渡した。

「ほうーッ！ ゲストサービス部支配人ですか！」

「笹岡さんとご一緒出来るなら、支配人権限発令して、特別サービスさせちゃいます。内緒ですけどね」

「これは楽しみだ」

笹岡は嬉しそうに目を細めた。

「ご主人の四十九日が済んで、秋になって少し落ち着かれた頃がいいでしょうね。それまでは我慢するかな。ご主人が家に居るのに奥さんを連れ出したら、ご主人にやきもち焼かれそうだな」

「そうしましょうね。是非、ご連絡をお待ちしています」
真理も嬉しそうに答えた。

……しかし、その約束が果たされる事はなかった……

第十一章

山梨北署の捜査本部には捜査担当者全員が揃っていた。

千葉県幕張にあるレンタカー店、勤め先の「きりり」という雑貨店と、短期精神障害と診断された「なぎさクリニク」への聞き込みも終了していた。また、

被害者の親友である村上健司の

話は、真理から聞いた内容と一致していた。

「一つ、気になる事を聞いてきました」

そう言ったのは、元八ヶ岳ガーデンリゾートホテル総務部長を勤めていた渥美繁に、話を聞き

に行った山梨北署の宮野邦之だった。

「ガイシャが被疑者の採用話を持ちかけた、被疑者の夫であった菅原幸一の労災手続きの最後の

日に、突然、ガイシャから被疑者の採用話をされたのですが、その時のガイシャの様子が変だな

と思ったそうです。いつもは被疑者の自宅から戻ると、手続きの進捗具合の報告をするのですが、

その日に限って、真っ先に採用の話を持ちかけて、しかも熱っぽく語ったそうです。一生懸命な

様子に、渥美さんは、被疑者からお願いをされて困っているのかなと思います『昼食を食べながらゆ

っくり話をしよう』と言ったら『食事は済ませて来た』とガイシャは断りました。団地の敷地で、

水溜りに足をとられて転んでしまいコートを汚したので、被疑者が洗ってくれたが乾くのに時間

がかかり、それを待つのに、昼食をご馳走になった。と言っていたようです。その時のガイシャの様子普段と違い、いかにも言い訳をしているように聞こえたと言っていました。だから、も

しかしたら、その時点で、ガイシャは被疑者に好意を持っていたのかもしれない。もしくは、す

でに深い関係になっていたかもしれない。そう言っていました」

「うーん……その時点で相思相愛だったという事が……おい！被疑者は付き合ったきつかけをどう話しているんだ」

倉田が柳田に訊いた。

「夏のイベントの後、具合が悪くなって休んだ時にガイシャが自宅を訪れたのがきつかけだった。

自分から誘ったと供述しています」

柳田は調書を見ながら答えた。

「ただ、渥美さんは今だから思う事で、推測にしか過ぎないと弁明していましたが」

「ガイシャが亡くなった今となつては、本当の気持ちは分からないが、恐らく、被疑者は、ガイ

シャが自分に好意を持っている事を感じていたのだろうな」

「知っていて、計画した。という事ですか？」

「だろうな」

「何かその事が、被疑者に有利に働く。そういう事があります

か？」

「うーん……有利に働く……か……そうではなくて、反対に被疑者は正常な魅力的な女性だった、
という事だ。その事をガイシヤは分かっていたんだよ。魅力的だったから軽率な事をした」

「自らの行いがこういう事態を招いた。という事ですか？」
今まで黙っていた米山が口を開いた。

「総務部長が感じた事が本当だったらな。でも、もう、それは分からない……」

「でも、それが本当だとしたら、奥さんの事を思うと悲しくなります」

深沢が言った。

「それは分らんよ。総務部部長の話は、感じた推測で置いておこう。それ以外、レンタカー店
や、雑貨屋のオーナーの聞き込みを検証するぞ」

重い空気が漂った捜査本部だったが、宮野と一緒に聞き込みに行った山梨北署の三枝信一郎が、
報告を始めた。

レンタカー店での梓の行動は確かに異様であった。
最初にコンパクトカーを選び、契約書を記入し終わった時点で、ハイブリッドカーに変更をした。
優柔不断そうで、車種を決めかねている様子の梓に、店員が「
目的とご利用人数は？」と訊くと

「失礼よ！ プラベートな事だから、そんな事あなたに言う必要ないでしょう！」と怒った。そ

の剣幕に店員は肝を潰した。

ハイブリッドカーと決めて契約が済み、梓はレンタカー店を後にしたが、30分もしない間に

再来店して、エスティマに車種変更し、おまけに「白は嫌だ」とボディカラーの指定もして来た。

用意出来る車が「シルキー・ゴールド」だと伝えると満足した様子で帰って行った。

契約時はノーマイクだったのだが、引き取り当日は、しっかりとメイクを施し派手なチュニツ

ク姿で現れた。横柄な態度に契約時に対応した店員は「閉口した」と言っていた。返却時には特

に変わった様子はなかったと言う。

「情緒的に不安定な様子でしたか？」と問う捜査員に、店員は「そうではなくて、性格が悪いと

思いました」と言い切った。

「あんな変な人だったら、採用なんかしていませんよ」

迷惑そうに言う「きりり」という雑貨店での都築久美子という、お洒落な雰囲気オーナーの話

も興味を引いた。

「面接に来たのは、6月15日の午前中です。履歴書に、紳士服店での接客経験有りという事と、

ホテル勤務の経験が明記されていたし、身なりもきちんとして、綺麗だったし、感じの良い人だ

ったので採用を決めました。採用の連絡をしたのは、その日の夕方です。間違いありません。携

帯が留守電になっていたのでメッセージを入れました。本人から連絡があったのは、3日後ぐら

いだったと思います。レスポンスが遅かったのが気になったのですが、何人かの応募者の中で一

番印象が良かったので、翌々日からの勤務という事で話をしました。ところが、いざ出勤すると

態度が全く違っていました。初出勤の日は私が不在だったので、店長に教育係を頼みましたが、

話も聞かずソワソワした様子で、やたらに店の商品をいじくり回していたそうで、店長が呆れて

いました。翌日は私が付いていましたが、いきなり店長が意地悪だとか愚痴を言われました。次

の日はもつと酷い状態だったので、様子見で接客はさせなかったのですが、客が悪口を言っていた

るとか、やはり店長に嫌みを言われて虐められている等と、被害妄想的な事を言っていました。

実際には、そういう事は全くありませんでした。店長とも相談して、もう無理だったので辞めて

もらう事を伝えようとしたが、携帯電話が繋がらず、そのまま連絡が取れない状態になりました

した。辞めてもらう事は直接伝えた方が良かったため、数日間携帯に電話しつづけていましたが、

一度も連絡がなかったため、堪忍袋の緒が切れて、店には向いていないようなので出社には及ば

ない、という事を留守電のメッセージに入れました。面接時と勤務時と余りにも違う態度に驚

いたのですが、その期間に何かあったとは思えません。私も長い間、お店をやっている

な人と会っていますから、それなりに人の事は見れます。勤務態度が本当の姿だったとしたら、

面接時に感じた筈です」

嫌な事を思い出し不快な気分になったのか、都築久美子はそこまで話した後、眉根に皺を寄せた。

「その後連絡がありませんでした。私は何となく気になったので、三日間の未払い分の給料を、直接渡しながら話を聞きたいと思い、マンションを訪ねたのですが、あの三日間は何だったのか？

と感じた事がありました。訪ねたのは6月30日です。マンションの駐車場に車を止めたら、菅

原さんが自分の部屋の前を掃除していました。2階だったのでよく見えました。玄関のドアを雑

巾で拭いていた姿は、勤務時の菅原さんではなく、面接時のきちんとした菅原さんでした。私は

少しの間、車の中からその様子を見ていました。拭き掃除を終えた後、今度は箒で玄関回りを掃

き始めました。これは会っても大丈夫だ。と思ったので車から出ましたが、車のドアを閉める音

に気がつかれたのか、菅原さんは私の姿を見ると、慌てて部屋の中に入りました。菅原さんの部

屋の前は綺麗になっていましたよ。チャイムを押しましたが、居留守を使われて出て来ませんでした

した。仕方ないので、メモを添えてドアの郵便受けに給料が入った封筒を投げ入れて帰りました。

マンションの玄関を掃除している菅原さんの姿は、本当の菅原さんだったと思います。何かあつ

たのだと思いますが、そうではなかったら、私の店との相性が悪くて、菅原さんはあんな態度を

取ったのかな？ っ。何だが辛い気持になりました。それで、

今回の事件を聞いて……菅原さ

んは覚悟をして、部屋の前を掃除していたのではないか？ そう思いました。たった3日間でし

たが、菅原さんと接していて、何か力になってあげる事は出来なかったのか？ とこれは、私の

偽善ではありません。そう思いました」

話を終えた都築久美子は、大きなため息をついた。

精神内科のなぎさクリニックでの菅原梓の印象は薄かった。

院長の栗原肇は、カルテを見なが

ら、カルテ通りの話をする事しか出来なかった。しかし、このカルテは菅原梓にとっては、最大の武器になる。

「少しずつ出て来ますね。しかし、このコーヒーは美味いね」

倉田は少し得意げな気持ちで、深沢真知子が煎れた美味しいコーヒーを味わいながら言った。

「トミーの無農薬有機栽培のコーヒーですよ」

コーヒー好きな倉田のために、深沢真知子が自費で購入した地元で有名なコーヒー豆販売店の名前をあげた。

「後で請求しろよ」

何も言わない深沢の好意が倉田は嬉しかった。

「じゃあ、整理しよう。心神喪失を疑う点だ」

柳田がホワイトボードの前に立ち、倉田の言葉を待った。

「俺はずっと引つかかっている事があるんだよ。車の事だ。レンタカー店で被疑者が三回も車種

変更をしたのは、情緒不安定を装うための工作だと思っていたが、それだけではない。そう考え

ている。最初は、確かビッツを選び、次がプリウス、そして最後がエステイマ。段々に大型車に

なってきた。エステイマは頑丈な車だ。ガイシャの車はチエロキーだよな。そのチエロキー

に対等に対抗出来る。ガイシャが、被疑者の身の安全を考えて大きな車にしなさい。と供述して

いたよな？ ガイシャの愛情をほめかしていたが、あれは被疑者が『うっかり喋ってしまった

本心』だと考えている。死ぬ気はなかったのかもしれない」

「確かに、その可能性はあります」

柳田が言葉を継いだ。

「（１）エステイマを選んだ理由↓計算している？（２）自首をする気持ちがあった（３）犯行

動機の中での感情↓カッとなった（４）千葉県幕張「きりり」

店長の証言↓覚悟したかの様な部

屋の前の清掃（５）片岡ふみ子に対する認識↓「ウソつき」と言った時の底う言動（６）リゾー

トイン小淵沢のチェックアウト後の部屋の様子（７）取調べ終了後の椅子の片付け」

正常と思われる菅原梓の様子を一つ一つ、柳田は書き足していった。

「調書を受ける度に、自分の中でチェックしている様子ですね。それで、マズイと思う部分に関

しては、意味不明の事を付け加える。このまま続けて行くと、菅原梓の思うような方向に流れるような気がします」

柳田が発言をした。

「確かに柳田君の言う通りだ。そろそろ駒を出すか？」

「駒……ですか？」

「この15年前の手紙さ」

笹岡が提出した、手紙のコピーを見せながら倉田はみんなを見回した。

「菅原梓の気持ちに賭ける。という事ですか？」

米山が口を開いた。

「私も手紙を見せて、そして、川村さんの気持ち、奥さんの気持ちをぶつけて、心の闇を取り払

ってあげれば、彼女も気付くと思います。痴情絡みの殺人事件ですが、とても切なく思っています

す。菅原梓を怖い、と感じていますが、誠実な川村さんが愛した彼女の本当の姿は違うかもしれません」

深沢が言った。

「僕も同感です」

手を上げて米山が同意した。

「よし、分かった。勝負に出よう！ 勾留期限も迫ってきている、時間もないからな」

第十二章

「どうしてる？」

杉山直樹から電話をもらったのは土曜日の夕方だった。

「いい加減に仕事に行きなさい。って叱られそうなの」

「当たり前だよ！チーフはそう言っているさ。明日、俺は公休なんだけど、これからチーフに会いに行つていいかな？」

杉山が訊いた。

「大歓迎よ。何時頃来れる？」

「もう出れるから、7時過ぎには行けるよ」

「了解！何が食べたい？」

「真理が食べたい！」

「気分で発してしまつたが、このジョークは刺激が強すぎるか？と杉山はちよつと後悔した。

「生がいい？それともボイルする？」

「賞味期限が切れそうだから、ボイルして欲しいな」
杉山は笑つて言った。

「OK！脂がのつてないから、ソースで誤魔化さないね。」

それと、胃腸薬用意して来てね」

真理も言葉のキャッチボールを楽しんだ。

「まったく！」

電話を切って真理は笑いながらひとり言を言った。

育った環境がそうさせたのか、小さい時から一人遊びが好きだった真理は友達が少なかった。

遊ぶ相手は、母が経営していたパブの若い男性従業員だったり、母が仕事に出かけた後、面倒を

見てくれる、真理が住む団地の年配の夫婦だった。

中学からミッシヨン系の女学院に通っていたが、いつも冷めた雰囲気で、自分の事を余り話さ

ない真理には「親友」と呼べるような同級生も出来なかった。

その事を「淋しい」と思った事は

なかったが、同じ年頃の女の子に好かれない自分には、何か足りないものがある。とは感じてい

た。いつかそれを見つける事が出来るかもしれない。と期待していたが、結局その答えは見出せ

ないまま、40歳を迎える年齢まで来てしまっていた。

そんな中で、同期の杉山には幼馴染みの様な感情を抱き、数少ない「心から許しあえる友」だった。

「杉山君が遊びに来るのよ」

雄一郎の遺影に話しかけながら、真理は杉山を迎える支度を始めた。

杉山は「真理が壊れてしまったのではないか？」と心配だった。しかし、その真理が、自分の言葉遊びに反応してくれた事は嬉しかった。

到着した杉山を待っていたのは、ダイニングテーブルの上の美味しそうなイタリア料理だった。

「やるじゃない！」驚く杉山に「ふん！」と真理は得意そうなポーズを取り「これもあるのよ！」
とバローロワインを自慢げに見せた。

「オーツ！バローロか！」
杉山は目を細めたが「ハイ、お土産」とモエ・エ・シャンドンを差し出した。

「凄い！モエ！ちょっと負けたかな？ねっ！」
真理はモエのボトルを受取って、雄一郎に見せた。

「会社の沢野井さんから帰国のプレゼントだったんだよ。チーフと三人で飲もうと思ったのだけ
ど……」淋しげな杉山に「大丈夫よ。私が二人分飲んであげるから」真理が笑って答えた。

「酒の事になると元気になるな。」
杉山は声をあげて笑ったが、明るくなった真理にホッとしていた。

「ずっとさ、真理に聞きたかった事があるんだよ」

真鯛のカルパッチョの皿が綺麗に片付けられた頃、杉山が突然そんな事を言い出した。

「どんな事？」

真理は身を乗り出した。

「俺がさ、逃げていたあの一件」

「あの時の高校生の事？」

「もう時効だからいいよな。あの娘が俺にお礼を言いたかった。って確かにそう言っただろう？」

お礼を言われる筋合いなんてなかったのに、何故だろう？　ずっとそう思っていたんだよ」

「逃げちゃって、ずるかったね」

「卑怯だったよな」

「そうね、卑怯だった」

あの頃……真理と雄一郎の結婚式が近づいて来て、杉山は冷静でいられない状態になった。

「本当に愛するという事は、愛する人が幸せになる事を喜べる気持ち」

そんな綺麗事を考えている自分がバカらしくなった杉山は、仕事帰りに一人で横浜に飲みに出

かけた。

横浜駅西口を出て「何処に行くか？」考えていた時、駅の壁に寄りかかっている不機嫌そうな

若い女の子の姿が目についた。茶髪でいかにもヤンキー風だったが、オフショルダーのカットソ

ーから覗いている細い肩が可愛かった。

何かに魅せられるように「誰かを待ってるの？」と声をかけた。

「お兄さんを待ってたのよ」

女の子は、怪しげな目つきで答え、杉山の腕に絡みついていた。

「何処に行く？」

「ピザが食べたいの」

「ナミエ」と名乗った女の子と、ピザを食べた後、ラブホテルに入った。

「セックスが上手ね」と言われ、有頂天になった。テレビを見て、ゲームをして、お酒を飲み、

お喋りをし、ルームサービスの食事を楽しみ、そして「ナミエ」と抱き合う……ラブホテルで一

日を過ごした。

別れる時、情が沸いた「ナミエ」と別れるのが少し淋しかったが「高校生」という事を知った

杉山は「とんでもない事をしでかした」と顔色を変えた。

そんな様子の杉山を見て「恋愛に年は関係ないでしょう？」

杉山君」と言つて、何処から見つ

けたのか？ 杉山の名刺をチラつかせて「ナミエ」は去つて行つた。

そして、それから数日後、ロイヤルガーデンに自分を訪ねて来た「ナミエ」から、杉山は逃げた。

真理は遠い昔の事を思い出していた。あの頃、自分は雄一郎との結婚を間近に控えて幸せの絶頂にいた。

「私が彼女から聞いた話は、私が話をする事ではないわ。彼女から直接話を聞いた方がいいと思うの。もしかしたら近い将来、その機会があるかもしれない。でも、一つだけ言わせてもらうけれど、彼女はあの時、杉山君の事が好きになりかけていた、って」

「そんな……だけど、彼女は今、どうしているんだろう？」

「うーん……」

真理は笑っていた。

「どうなっていると思う？」

「知ってるの？ だって、もう30歳を過ぎているだろう？
結婚して、頑張って主婦している
のかなあ？」

「うーん……そうね……」
杉山をじらした。

「なんだよ！ 知っている！ って素振りじゃない」

「去年の12月、ある人が入社して来たの。ホテルでは社員募集がなかったのにね。東洋ビジネスで『ゲストサービス部支配人川村真理』の記事を見て、どうしてもこの人の下で働きたい。その人はそう言って応募して来たの。結果、採用になったのね。異例の採用」

そこまで言って、真理は嬉しそうな笑顔を見せた。

「それでね、その人は希望通りゲストサービス部に配属になったの。人事から届いたその人の履歴書はブラボーだった。国立大学英語学部卒業後、外資系航空会社のキャビンアテンダント。TOEIC700点以上。航空会社を依願退職して横浜ロイヤルガーデンホテル。どう？」

「なる程、ブラボーだ！」

「私に憧れたから、と自分から売り込みをかけ、しかもあの履歴書で私はちよつと構えた。でも、初めて会った時、きりつとした綺麗な人だと思ったけれど、懐

かしい人に出会ったような気分になつたの。そうしたら、彼女は私に抱きついてきたのよ。この人はなに？ 困る！ って私は戸惑つた」

真理は可笑しそうに笑つた。

「人懐こいその新人は……りっぱなホテルマン候補生よ！」

「どういう事？」

「横浜ロイヤルガーデンホテル、ゲストサービス部の優秀なスタッフ！」

「まさか……」

「会社から、三ヶ月は試用期間の身元預かりだつて言われて、頑張つて、無事に試用期間終了で

本採用決定。お正月が過ぎた時にね、遅くなっちゃったけれど、ゲストサービス部で歓迎会をし

たの。その席で、彼女の正体を知つたのよ。杉山君が悪さをした？ あの高校生だつたつて。ご

両親といろいろあつて、父方の叔母夫婦と養子縁組をしたから、苗字が違つていたので気がつか

なかつたの。外資系航空会社のキャビンアテンダの彼女がどうして転職したかつて、判る？」

「……」

杉山は驚きで声が出なかった。

「杉山君と私の事がずっと忘れられなかったのですって。私な

んかはただ話を聞いただけなのよ。

でもね、私の眼差しが優しく、嬉しかったらしいの。私達が彼女の幸せな人生を導いてくれた、

とずっと思っていたから、偶然に私の記事を読んで決心したつて。ねえ、これって凄いと思わな

い？ 嬉しい！ って思うでしょう？ その彼女は…… 大事な私の部下の早瀬奈々子よ」

「早瀬……」

何処かで聞いた名前だ…… そうだ、ニュースでチーフの事故の事を聞いて、横浜ロイヤルガー

デンホテルに電話した時、対応したホテルスタッフが、確か「早瀬」と名乗っていた。あの時、

一瞬身構えたと感じたのは「早瀬」というスタッフが、自分の名前を聞いたからなのか？

「そうよ。杉山君は電話で彼女と話をしているでしょう？

雄一郎さんの葬儀にも来てくれて

いたのよ。彼女は杉山君を見て『りっぱになった』って喜んでたわよ。「人間の出会い」って

本当に素敵。辛い事になるって事もあるけれどね……」

真理は雄一郎の遺影を見つめた。

「でもね、辛い事になっても無駄じゃないのよね」

「モエを開けようよ」

杉山はモエを開けて、グラスに注ぎ、まず雄一郎の遺影の前にグラスを置いた。

「ほら！ 見て！ チーフだって喜んでいるでしょう？ 乾杯！」

グラスをあげる真理の目から涙がこぼれた。

「悲しくて泣いているのじゃないのよ。ちょっと感動ものだからよ。ねっ！ 素敵よね。人間って。出会って」

「うん、素敵だ」

杉山の中にいろいろな思いが駆け巡った。

「でも、もう一つ素敵なものがあるの。見てくれる？」

そう言つて真理は立ち上がったが、その時、またいつものチクチクするような痛みを感じて、

思わず顔をしかめた。

「どうしたんだよ？」

杉山が心配そうに声をかけた。

「最近、胸がチクチク痛む事があるの」

……それだけではなかった。階段の上り下りが辛く、長い階段を上がりきった時には、少し吐

き気も感じる事があった……しかし、その事は杉山には言わなかった。

「若くないんだからさ。お酒と煙草は控えろよ」

「お互いさまでね」

真理は舌を出して、雄一郎の遺影の脇に置いてある「手紙」

を取り、杉山に渡した。

「これを読んで」

「何？」

杉山は真理から手紙を受け取って読み始めたが、途中まで読んで真理の顔を見つめた。

「いいから、最後まで読んで」

「これって……娘って……真理？ ……エーッ！」

杉山は言葉が出て来なかった。

「15年前に、私の父が雄一郎さんに宛てた手紙よ。でも、父は渡す事が出来なくて、それが実現したの」

「どういう事？」

「父は殺されたの。父が殺された日は私がプロポーズされた日でもあるのよ。そう、杉山君がセッティングしたあの飲み会の日」

真理は自分の生い立ち、結ばれなかった両親の事、父を探した事、その場面を雄一郎に見られていた事、雄一郎の部屋で父の死を知った事、そして、笹岡が訪ねて来た事を、杉山に話した。

「チーフと真理って……」

真理の話聞き終えた杉山は、おもむろに椅子から立ち上がり線香を灯して、長い間、雄一郎の遺影に手を合わせた。

「チーフは俺の思っていた通りの人だつて。言ったらさ、そうじゃないよ。自分を取り巻く人が素敵だから。そう言っていたよ」

杉山の目には涙が溜まっていた。

「人間って美しくて素敵なんだと思う。出会いも。それを見る目を持っていれば、ね」

真理も線香に火を灯しながら話を始めた。

「私はいろんな素敵な人に力をもらって生きて来たのだけれど、見れなかった。手紙を届けに来てくれた笹岡さんが、父も雄一郎さんも真に優しい人だったのですね。そう言ってくれたけど、

私だけは優しくなかったのだと思うの。それで、雄一郎さんは身を犠牲にして、私にその事を気付かせてくれたのだと思うの」

「そんな言い方するのはやめろよ！ 真理が一番分かっているだろう？ そういう事を言ったら

チーフが一番苦しむ事になるんだって！」

杉山は思わず声を荒げた。

「そんな事ないよ」そう言って慰めるのが一番良い方法かもしれない。しかし、言葉だけの慰めは言えなかった。

「村上さんからの話を聞いた時の真理も今と同じだったよな。自分が悪いって自分を責めて。確

かに真理にも非がある。チーフ、真理、相手の女、責任は三分なんだよ。そうやって自分の事

を責めて、いい子になっていたら……そうしたらみんな真理に同情するよ。だけど……もういい

加減にしろよ。真理は、これからも生きて行かなくてはならないんだよ。こんな風にしていたら

いつまで経って本当の意味で強くない」

真理の目から大粒の涙がこぼれた。

「そうしたいのよ。でも、出来ない自分がもどかかった」

「泣けよ。何も考えずに泣きたい時は泣けばいいんだよ。自分の感情を抑えて生きていく、なん

て出来ないんだよ。でも、真理はずっとそうだった。そうする事が自分の道みたいに思っていて

さ。でも、どこかに俺もそうだったけど、そういう真理に甘えている部分があつて。もしかした

らチーフもそうだったのかもしれないって、思ったりもしたんだよね。でもさ、もういいんだよ、

力抜けよ。いい子になんてなる必要はないんだよ」

「力抜いたら、幸せになれるかなあ？」

「なれるよ。時間がかかるかもしれないけれど。もし、なれなかったら……その時は誰かに頼る

んだよ」

……杉山の言う様に、力を抜いたら楽だろう。でも、信賴している雄一郎の前でも力は抜けない

かったのだから、自分には無理かもしれない。と思う……杉山や村上の前では「楽」になれるが、

雄一郎の前では「楽」にはなれない……「楽になる事」と「愛する事」は違う。それが一つにな

る事が、真理には分からない事だった……だから……こうなったのか？……

第十三章

「菅原さん、今日はあなたに見せたいものがあります。これを読んでもください」

倉田は、佐々木真司が川村雄一郎に宛てた手紙を机の上に置いた。

昨夜、倉田は笹岡元警部から手紙にまつわる詳しい話を聞いていた。そして、その笹岡からも

「手紙を被疑者に見せた方がよい」とのアドバイスを受けていた。

今日で勾留も9日目に入る。

「情」で一気に梓の気持ちに迫るという手法で取調べにあたる予定でいた。

何かを警戒しているのか、梓はなかなか手を出さなかった。

倉田は手紙を広げて「読んでください」と手でずらした。

「川村雄一郎様」という文字が目に入っている筈だが、それでも、まだ梓は表情一つ変えず、手

紙を読もうとはしなかった。

倉田は何も言わず、手紙を少し梓の方にずらした。それで観念したのか、梓は少し身を乗り出したが、手には取らず手紙を読み始めた。

倉田と、聴取に同席している柳田と、調書を作成している深沢の三人はじつと梓の様子を観察していた。

取調室が重い空気に包まれた。

しばらくして、読み終えた梓が「堪らない」というような表情をして顔を背けた。

「素敵な手紙ですよね」

倉田の言葉に、梓はうつろな表情をして倉田を見上げた。

「この手紙は15年前に、ベールブルースという人から川村雄一郎さんに宛てた手紙です。」

手紙に出てくる娘とは、川村真理さんの事です」

梓の表情が強張った。

「川村真理さんは父親を知らずに育ちましたが、ある時父親の素性を知り、父親探しを始めまし

た。父親探しは大変だったそうですよ。そして探している最中に、川村雄一郎さんに、その姿を

見られてしまったのです。真理さんは父親と会っていたのですが、父親であるベールブルースは名

乗り出る事が出来なかった。それで、真理さんの事を心配してくれている川村さんに、目で自分

の気持ちを訴えたのですね。川村さんもベールブルースの気持ちを読み取る事が出来た。その事が

きっかけにもなり、お二人は結婚されたのです」

倉田は一息いれ、梓の様子を探った。強張った表情は変わらなかった。

「実は、このベールブルースという真理さんの父親は、15年前に暴漢に襲われて亡くなりました。

この手紙はご遺族が受取らなかったため、警察に保管されていた物ですが、当時の担当者が今回の交通事故のニュースを聞き、もしやと思いこちらに出向いた事で、川村さんの元に15年ぶりにお届けする事が出来ました」

「私には関係ない事です！」

それまでじつと話を聞いていた梓が急に声を荒げた。

「そうですか？ 関係なくはないでしょう。あなたが引き起こした事故がきっかけになったのですよ」

「だから何なのですか！」

梓はそう言って、怒ったような表情でそっぽを向いた。

「菅原さん、あなたは幸せな方ですね」

梓の表情が一瞬輝いたが、すぐに元の怒ったような表情に戻った。

「この手紙を読むと、川村雄一郎さんがどんなに優しく男らしい方だったかが、手に取るように分かります。あなたは、そんなりっぱな方に愛されていたのですね」

「この手紙と私は何の関係也没有ません」

「そして、あなたもそういうりっぱな方を愛した」

倉田は梓の言葉を無視した。

「川村さんは部下思いの優しい方だった。八ヶ岳のホテルの方のお話でも、その事は充分に分かります」

倉田はじつと梓を見つめていた。少し変化している……先週までは川村雄一郎の話をすると、
ウツトリとした表情になっていたが、目の前の梓にはその表情は見られない。

「川村さんの奥さんは今日からお仕事に出られるそうです。川村さんはお仕事に厳しい方だったので、いつまでもメソメソしていると叱られる。そう話していました」

やはり、昨夜、倉田は真理からも電話をもらっていた。

「少しずつですが、お元気になられているようですよ」

「関係ありません！」

真理の名前を出されて、梓は益々不機嫌そうな顔をした。

「そうそう、先日、片岡さんにお会いたした時、あなたの事を心配していると伝えましたが、伝言

を頼まれていました。片岡さんは菅原さんが好きだから、きちんと罪を償って出て来られて行く

場所がなかったら、自分の傍に戻って来て欲しい。そう仰っていました。片岡さんも県外出身で、

同じよそ者同士、また仲良くしましょう。そうも仰っていました

たよ
」

片岡ふみ子の名前を聞いた梓の表情が少し和らいだ。

「幕張の雑貨屋のオーナーの都築さんを覚えていますか？」

倉田は今まで伝えなかった事を小出しに話し始めた。

「たった3日間の勤務だったそうですが、都築さんはあなたの勤務態度が良くなかった、とご立腹していました」

その事を言われて、梓が少しホッとしたような顔つきに変わった。

「でも、面接時のあなたと随分違っていたのは、その間に何かがあったのだろう、と仰っていました」

「だって、彼に憎まれているという事が分かったから……」
梓がうつむきながらポツリと言った。

しかし、倉田はその言葉をまた無視した。

「採用が決まった時に連絡しているのに、あなたからの返事が遅くて気になりましたが、何人かの応募者の中で、あなたが一番気に入ったのであなたに決めたそうです。あなたが辞めた後、6

月30日に都築さんが未払いの給料を届けに行った時に、玄関前を綺麗に掃除しているあなたを

見たそうですが、都築さんはその時のあなたが本当の姿だ。と思ったと仰っていました。何か

あったのだろうか、そうではなくて、自分の店とあなたとの相性が悪いのが原因だったら、申し

訳なかった。とそうも仰っていましたよ」

「相性なんて悪くなかった……精神的に辛い事があったからです」

「リゾートイン小淵沢で伺った話ですが、ご利用された部屋はきちんと片付けられていた。クレ

ームを付ける位に嫌な思いをさせたのに、あなたの『たしなみ』を褒めていました。もう一つ、

ここにいる深沢も関心しているのですが、あなたは取調べが終わると、いつもきちんと椅子を納

めて部屋を出るそうですね。なかなかそこまで気を配るという事は出来ません。そういう細かい

心配りが出来るあなたを、川村さんは愛したでしょうね」

一瞬、梓がハツとしたような気配を見せ、その身体が揺れた。

「この辺で少し休憩しましょう。深沢君、自慢のコーヒーを煎れてくれないかな？」

倉田の要望に「かしこまりました」そう言って深沢は部屋を出て行った。

「トイレは大丈夫ですか？」と訊く倉田に、梓は「大丈夫です」と小さな声で答えた。

倉田は、柳田に目配せをして二人は廊下に出た。

「崩れるぞ。最後の決め球は、ガイシャの親友から聞いた話だ」
自信満々の様子で言って、倉田は取調室に戻った。

じつと何かに耐えるようにうつむいている梓の様子は、確かに変化していた。

「お待たせしました」

コーヒーの良い香りと一緒に、深沢が取調室に入ってきた。

「私は部類のコーヒー好きで、そんな私にこの深沢は、自前で美味しいコーヒーを煎れてくれるの

ですよ。無味乾燥に思える警察署ですが、ちょっとした心配りで、それが温かい場所に変わる。

お砂糖とミルクは入れますか？」

梓の前にコーヒーカップを差し出しながら倉田が尋ねた。

梓は首を横に降った。

「美味しい！」

「遠慮しないで飲んでください。美味しいコーヒーは心を豊かにしますよ。これは私がいつも言

う事ですが」

倉田は笑顔を梓に向けた。

取り調べ室の小さな窓から太陽の光がコーヒーカップに注がれていた。

「美味しい……」

遠慮がちにコーヒーを飲んだ梓はそう言って、小さくため息をついた。

北杜市の団地の居間で、毎朝、出勤する幸一のためにコーヒーを煎れた情景を思い出した。

リビングに漂うコーヒーの香りに誘われて、幸一は起き出してきた。

倉田は梓のため息を見逃さなかった。

「川村さんはコーヒーがお好きでしたか？」

「彼は、お酒が好きでした。来ると真っ先に『ビール』そう言いました」

「ハケ岳ガーデンリゾートの相馬さんでしたか、あなたの上司だった。相馬さんもそんな事を言

っていましたね。川村さんはお酒が好きでよく飲みに行ったと」

「お酒が強かったのです」

梓の目が遠くを見る目つきになった。

「川村さんはお酒も強くて、仕事も出来た。しかも優しくて男らしい。そんな川村さんに愛され

て、あなたは本当に幸せでしたね」

倉田はさっきと同じ言葉を繰り返した。

梓は少し笑みを浮かべてうつむいている。

「幸せでした」

突然、梓が顔をあげた。

「綺麗だ」

倉田は梓の顔を見てそう思った。

川村真理のハツとする程の透き通るような美しさとは違う、
地味な美しさとも言うのか、じ

っと見つめられると引き込まれてしまいそうだった。しかし、
二人とも何かに耐えているような

強さがある。それは同じだ。その「強さ」がまた「美しさ」に
なって表れている。

「川村雄一郎という人は、内面に秘めた強さを持っている女性
が好みだったのだろう」

倉田はそんな事を思った。

じっと自分を見つめる梓には、以前感じた「嫌悪感」を抱か
なかった。

「いよいよだ」

倉田は気を引き締めた。

「でも、その幸せをあなたは自らの手で排除したのですよ。ど
うしてなのでしょうね」

「天の声が……」

やはり、梓の声は小さかった。

「先程、川村さんの奥さんは、今日から仕事に復帰すると言いましたが、あの奥さんも素敵な方

です。菅原さんの行為は許せないが、菅原さんの事は憎んではない。そう仰っています。二人

で同じ人を愛したのだから、いつか菅原さんの本当の気持ちを聞きたいと仰ってもいました」

また梓は下を向いたが、コーヒーは一口飲んだだけで、手をつけていなかった。

「これから話す事は、お友達に伝えた川村さんの真実です」
倉田は自分のコーヒーを一気に飲み干した。

同席している柳田と深沢も息を殺して、倉田の話に耳を傾けていた。

「川村さんの事情を知っているあなたは違ったでしょうが、奥さんの真理さんは、川村さんの不

倫には全く気がついていなかった。どうしてもだか分かりますか？ ある部分、男気があったので

しょうね。川村さんはあなたと奥さんの二人を本当に愛していました。でも、二人に対する愛の

種類は違っていた。だから、本当に幸せだった。二人とも失いたくないから、二人にはお互いの

事を話さず、それぞれと過ごす時間を大切にしていた……そうだったのですよ。そして、ずっと

このままで居たかった。それでも、倫理に反している事をしていると、自分を責めて、何度かあ

なたと別れようか、そう思った事もあるそうです。でも、出来なかった。あなたへの気持ちも本

物だったのでしょうね。そんな時、あなたから子供が出来たと聞かされた。ショックだったそう

ですが、あなたとの間に出来た子供を、自分の手で葬り去る事は出来ない。いろいろな方法があ

ったでしょうが、悩んだ末に、川村さんはあなたと歩む道を選んだ。どんなに非難されようが、

生まれて来る子供を自分の手でりっぱに育て上げたい、と決意しました。以前、お子さんを二人

亡くしているから、新しく生まれてくる子供は、その亡くした子供の兄弟でもありますから。川

村さんは一人っ子で、ご両親を早くに亡くされているので、家族に対する強い思いがあつたのだ

と思います。そして、当然の事ながら、生まれて来る子供の事をとても楽しみにしていたのです。

それが、突然にあなたには姿を消され、そして、妊娠がウソだと知った。川村さんは死ぬ程苦し

かったそうです。でも、現実を見つめて、自身を反省し、そして、新たに歩む道を見つけ出して

いた。奥さんに全てを話して、許しを請うてやり直したいと。そう伝えるつもりでしたが、それ

は永遠に叶いませんでした。ですが、奥さんに話をする前に、親友の方に全てを話していました」

梓はうつむいたまま、身動きもせず倉田の話を聞いていた。

「いきなり絶望の淵に突き落とされた川村さんの気持ちがどれ程辛かったか？ あなたは考えた

事がありますか？ 事実を知った日、慎重で冷静だった川村さ

んはかなり取り乱して、そして、

どうしようもなくなつて、奥さんに救いを求めました。一方的に離婚を突きつけた奥さんに救い

を求める、決して男のする事ではありません……と私は思いますが、それだけ気が動転して、自

分を見失つていたのでしよう。救いを求められた奥さんは、心配になつて深夜に車を飛ばして、

横浜から山梨まで川村さんの様子を見に行きました。しかし、

川村さんは奥さんには何も話をし

ませんでした。気持ちが整理出来たら話をすると言われて、奥さんは横浜に帰りました。いいで

すか？ 川村さんは奥さんには、子供の事もあなたの事も一切話をしていませんでした。全てが

大事だったからです。私は何となく、そんな川村さんの気持ちが分かる気がします。奥さんが

子供の事を知ったのは、あなたが横浜のホテルに現れたからです。いつか分かる事だとしても、

あなたの妊娠を話さなかったのは、せめてもの誠意だった、と奥さんはお話していました。だが

ら、奥さんは、川村さんを許そう、という気持ちになつていました。私はその事を聞いて切なくなりました」

倉田は少し自分が感情的になつていてのを感じ、椅子から立ち上がつて、自分でコーヒーポツ

トからコーヒーを注いだ。

「あなたは、横浜のホテルに行った事を川村さんに責められたから姿を消した。そうお話されて

いましたが、あなたの川村さんへの気持ちはそんなに軽いもの

だったのですか？ 菅原さん、川

村さんはきっと悲しく思っていると思いますよ」

ゆっくりコーヒーを飲みながら、梓の様子を観察した。

「最後にお話する川村さんの真実です…… お話を聞いたお友達が、川村さんの前であなたの事を

責めた時、川村さんは悲しい顔をされて、お友達を制したそうです。『彼女の事を悪く言わない

でくれ』と。川村さんは、お友達にあなたの事を憎いとか恨んでいる、とかそんな事や、悪口は

一切言いませんでした。ただ『あなたの気持ちが悲しい』と、それだけ言ったそうです」

その瞬間、梓の身体がガクツと揺れて椅子から崩れ落ちた。梓は気を失っていた。

第十四章

1

真理は、横浜ロイヤルガーデンホテル・ゲストサービス部支配人として、また多忙な一日を送る生活に戻っていた。

出勤初日は、真理の気持ちを思い計って、少し腫れ物に触るように接していたスタッフも、真理の勤務態度を見て、今までと変わらない態度で接していた。

7月15日金曜日、勤務中の真理の元に、山梨県警捜査一課の倉田警部補が訪れた。

電話で済ませる事も出来たが、倉田は直接会って伝えたい、という思いもあり一人で横浜まで出向いてきた。

「お仕事中に突然お邪魔して申し訳ありません」

倉田は穏やかな笑顔を浮かべて頭を下げ、ホテル最上階にあるプレミアム・クラブのラウンジの座り心地の良いソファに腰をかけた。

「しかし、素晴らしいお部屋ですね。こんな椅子に座るのも初めてだ」

部屋の内部を見回して、倉田は感嘆の声をあげた。

「ありがとうございます。お客様にも居心地が良い、と喜んで頂いています。ご挨拶が遅くなり
ましたが、その節はいろいろお世話になりありがとうございます
した」

真理の顔がすっかり「ゲストサービス部支配人の顔」になっているのを見て、倉田は少しホッとした。

「お元気になられたご様子で、安心しました」

「仕事があつて有り難い。という事を実感しています。私がこうして元気で仕事をする事が、主人の供養にもなるかと思っています。出勤してまだ5日ですが、いろいろ考える事が出て来て、
家に帰って主人に話をするのが楽しみになっています」

「それは良かった。ご主人もきっと喜ばれているでしょう。今日は、もう一つご主人が喜ばれる
事のご報告があります」

「菅原梓が殺人罪で起訴されました」
穏やかな倉田にふさわしくない言葉を聞いて、真理は身構えた。

倉田から雄一郎の気持ちを聞いた後、気を失った梓は、その日、出された食事も手に付ける事が出来なかった。「申し訳ありませんでした」そう言って、全

てを話したのは、翌日の午後になつてからだつた。

「月曜日の夕方から、菅原梓は本当の事を話し始めました。実は……」

倉田は躊躇したため、一旦言葉を切った。しかし、伝える必要がある、と考えた。

「逮捕当時から、菅原梓には心神喪失の可能性がありました。事故を起こす前に、精神科への通

院履歴もありましたし、それを裏付ける証言も得ていました。実際、担当検事は簡易精神鑑定の

必要有り、との結論を出すつもりでいました。ただ、正直申し上げますと、私達担当捜査官は心

神喪失も偽装と疑っていました。ですが、取調べで、本人も心神喪失を思わせる態度を取ってい

ましたし、何より通院履歴は有力な証拠です。簡易精神鑑定を受けた後、不起訴になる可能性は

大でした。そうなると刑法39条の心神喪失者の行為は罰しない。が適用される事になり、精神

病院に送られた後、釈放される事になったでしょう」

突然、真理が手で顔を覆ったため、倉田はここでまた、話を止めた。

「そんな事……」

真理が苦しそうな声を発した。

「そうだったのです。先程も申し上げましたが、私達は疑いを

持っていましたので、それだけは避けたい、そう思って取調べを行なっておりました」

「でも、それがどうして？」

「ご主人が力を貸してくださいました。ご主人だけではありません。奥さんのお気持ちや、村上

さん、県営団地の隣人、そういう方達の気持ちや、菅原梓の心を動かしました。具体的な内容は

申し上げられませんが、ただ一つだけ申し上げますと、あなたのお父様がご主人に宛てた手紙を

使わせて頂きました。そうして、菅原梓は全てを話しました。交通事故を装ってご主人を亡きも

のにする事。それには自分も巻き込まれる事を覚悟していましたが、万が一巻き込まれなかった

時、心神喪失を装うつもりだったと。そのために精神科に通院した事も」

「心神喪失なんて、簡単に装えるものなのですか？ それに、巻き込まれなかったら、という事

は、主人と心中するつもりだった……という事ですか？」

「最近、誰でもいいから殺したかった。そんな動機で殺人が行なわれています。ストレスが溜

まる事が多い今の時代、心神喪失で罪を逃れるような事が増えてきています。ですが、そんな

動機で起こす犯罪に対して、刑法39条を乱発する事とはとても重い事ですし、そんなに簡単な

事ではありません。人の命を奪うという行為は卑劣でとても重いものです。また、奥さんが仰る

ような『心中』という言葉が当てはまるとは思いません。車が絡んでの事ですから、それなりの覚悟をしていたという事です」

「でも、私には心中するつもりだった。としか思えません。だとしたら……」

真理は声を詰まらせたが、職業意識が働いたのか、ラウンジの中を見回した。ラウンジには自分達の他には誰もいない、という事を確認した真理が口を開いた。

「だとしたら、私は許せません。そして、彼女が生き残って本当に良かったと思います。主人と一緒に逝つては欲しくなかった」

「菅原梓は心中という事は考えていませんでした。ただ、賭けたと言っていました。巻き込まれたら愛されている。巻き込まれなかったら愛されていない事が証明された。と言っていました。ご主人が本当に愛していたのは奥さんだった。そして、永遠にご主人の心の中から奥さんの思いが消える事はない。その事に気がついたので、突然姿を消した。そう証

言しています。ご主人や奥さんの真の気持ちを感じて、菅原梓は自分を取り戻した、と私は思っています。起訴が決定しましたから、2ヶ月以内には裁判が開かれる事になるでしょう。裁判員

裁判にかけられる事になりますが、菅原梓は素直に自分の罪を全て認めて、このまま刑に服すと言っていますので、一回での裁判後、早い時期に判決が下りる

と思います。公判の期日が決まりましたらご連絡をいたしますので、お気持ちがあれば傍聴も可能です」

「いろいろとご丁寧にありがとうございます。倉田さんをはじめ、山梨北署の皆さんには心からお礼申し上げます」

真理が自宅に戻ったのは夜の9時を過ぎていた。

「ただいま、ごめんね、遅くなっちゃって。こんなに暑い部屋で喉が渴いたでしょう?」

最上階なので、ベランダの窓は開けて出かけるが、涼しい海風が入って来るとは言え、さすがにこの時期、エアコンもかかっていない部屋は蒸し暑かった。真理は窓を閉め、エアコンのスイッチを入れ、冷蔵庫から缶ビールを2つ取り出してプルタブを開け、一つを雄一郎に供えた。

「お疲れ様」

そう言つて、グツと缶ビールを飲み干した。

「今日はね、嬉しい報告よ」
缶ビールを手を持ったまま、早速、雄一郎に倉田から聞いた報告を伝えた。

倉田の「ご主人が力を貸してくださいました」という言葉を

思い出し、雄一郎への思いを込め

て夢中で伝え終わり、雄一郎の遺影をしみじみと眺めた時、突然、真理は心の中に「虚しさ」と

「淋しさ」を感じた。

あの事故から約2週間余り、仕事にも復帰したがまだ悲しみは消えない。葬儀の後、警察に出

向き、そして加害者である菅原梓の事を考えたりしながら夢中で過ごしてきた。菅原梓が自分の

罪を認め、刑に服す事を望んでいたが、今、それは叶った。

しかし、雄一郎は帰って来ない。その悲しみが新たに押し寄せてきた。

真理は雄一郎の骨壺を抱きしめた。

耳をすませたが「頑張ったな」と言う声は聞こえなかった。

雄一郎は、何も言うてはくれなかった。

「ねえ、迎えに来て。もう、疲れちゃった……」

真理はどっしりと思い骨壺を畳に下ろし、しっかりと抱きかかえて横たわった。

2

「公判の日程が8月25日に決まりました」と連絡があったのは、8月に入ってからだった。

偶然にも公判日は、雄一郎の納骨日の翌日であった。

真理は「傍聴させて頂きます」と倉田に伝え、場所と時間を確認していた。

村上の懸念通り、事件はマスコミにも取り上げられた。

関係者は口を噤んでいたが、何処で調べ上げたのか、悲劇のドラマ仕立ての報道や「エリートホ

テルマン夫婦の愛憎」などと書き立てる週刊誌もあった。真理は何も言わないが、村上は心を痛めていた。

納骨が行なわれた8月24日は酷暑だった。

親しい身内だけで済ますという事で、叔父の矢沢夫婦と、村上健司夫婦、そして杉山の6人で納

骨式はささやかに執り行われた。

海と富士山が望める、横須賀市にある霊園の法事室で僧侶の読経が行なわれ、焼香が済み、法

話を聞いた後、納骨後の食事の手配確認を叔父夫婦に頼み、真理は杉山と一足先に、川村家の墓

所に向った。村上は仕事が忙しいのか、先程から何度も携帯に電話がかかってきていた。

海から吹く風は心地良かったが、霊園は坂になっていて、上の位置にある墓所に向う真理の息切れが激しくなっていた。

川村家の墓石の前に立った時に、吐き気を催すような咳をし

た真理は、持参したペットボトル
のお茶を飲んで吐き気を抑えた。

二人は、水で墓石を綺麗に掃除して手を合わせた。

動悸が激しくなった真理は不安な気持ちになった。軽く当た
た手にも激しい動悸が伝わってく

る。雄一郎の前で辛い顔は出来ない、と思い笑顔を作ろうとし
たが、笑顔にはならなかった。

「淋しくなって誰かに抛りかかりたくなったら、俺を呼んでよ」
長い間、手を合わせていた杉山は笑顔で真理を見た。

「ありがとう」
そう言つて杉山と向かい合った時、真理は今まで感じた事が
ないような、心臓をかきむしられ
るような激しい痛みを感じた。

夏用の薄地の喪服の上からも、心臓が激しく動いているのが
分かった。

「助けて……」と杉山にすがりたいが、声が出なかった。杉山
が心配そうな表情をしているのは
分かるが、自分が自分でないような気がして……地面に足が着
いていないような気がして……苦
しかった。

真理の額から脂汗がドツと噴出した。

「ずっと、淋しい思いをさせて悪かったな」
雄一郎の声が聞こえた。

「そうよ。一人ぼっちで淋しかったの……」

「それに……」

「もう、いいのよ。あなたの気持ちは分かってる。でも、あなただって淋しかったんでしょ？」
「ごめんね」

「よく頑張ったな。でも、もう充分だよ」

「充分って……？」

「真理の気持ちは分かった。それに俺は淋しくない」

「私を一人にしない？」

「しないよ。約束する」

「迎えに来てくれたの？」

「うん、こっちにおいで……」

雄一郎が笑顔で、手を差し伸べていた。

フワッと浮かび上がったような気分になって、気持ちが良かった。激しい痛みも消え、苦しかった胸が、急に楽になった。

真理も笑顔になり「ありがとう」と言って、雄一郎の胸に飛び込んで行った……

「あいつら、全く何なんだよ！ 川村の前で何やっているんだよ！」

村上が怒ったように吠えて足を止めた。

雄一郎の墓の前で、真理が杉山の胸に顔をうずめて甘えている……ように二人には見えた。

「川村さんが杉山さんに『真理を頼む』って言ったのよ、きっと。だから、真理ちゃんは安心して杉山さんに甘えているのじゃないの？ でも、パパは、また失恋しちゃったみたいね」

弓恵は村上の顔を覗き込んで、可笑しそうに笑った。

「お前、何言っているんだ？ 女房が亭主に言う言葉かよ！」
惘然とした表情で、村上は弓恵を睨みつけた。

「でも、私はそんなパパが大好きよ」
弓恵は村上の腕にしがみついた。

弓恵にしがみつかれた勢いで、村上が手に持っていた桶から水がこぼれた。

「お前はバカか？」
そう言いながら村上は、弓恵の腕をほどいて肩を抱き「俺も

お前が一番好きだよ」そう囁こう

とした時……「真理！」と叫ぶ杉山の声が聞こえ、杉山が真理を抱えながら倒れ込んだ。

異様な二人の様子に、村上と弓恵が顔を見合わせた。

……真理は知らなかった……左房粘液腫という病に冒されている事を……

突然、心臓内の血栓が剥がれ落ち、脳血管を閉塞して生ずる脳動脈塞栓を起こした。

……真理は「ありがとう」の言葉を残して、笑顔で雄一郎の元に旅立って行った……

第十五章

1

8月25日、山梨県甲府地裁で開かれる法廷に向っていた村上は涙を堪えていた。

「真理は死んだのではない……川村が最後の最後に守った」
そう思っていた。

「真理を裁判に引つ張り出すのが辛かったのだろ。俺は、お前達の真実を伝える……」

だから、二人でしっかりと見てろよ！」

一方、法廷に向かう梓は、穏やかな気持ちになっていた。

いかなる審判が下されようが覚悟は出来ていた。法廷内で川村真理に会ったら「お詫びをしよう」とも考えていた。決して自分は許される事はないだろうが、

心からお詫びの言葉を伝えたいか
った。

罪を認め、正直に話をするようになってから、何故か夢の中に亡くなった夫の菅原幸一が現れるようになった。

「きちんと償いなさい」

幸一はいつも同じ事を言っていた。言葉は厳しかったが表情は優しく、梓は穏やかな気持ちになれた。

取調べの時に倉田から「川村雄一郎さんは絶望の淵に落とされた時、妻の川村真理さんに救いを求めた」という事を聞いたが、何故かその気持ちが分かるような気もした。殺人という罪を犯した自分を、幸一は決して許す事はないだろうし、受け入れてくれる事もないだろうが、心の中で幸一にすがっていると、素直な気持ちにもなれた。

「彼を愛し、一緒に過ごした日々は確かに幸せだったが、それはひと時の夢の世界で、自分の現実の世界に存在するのは幸一だけだったのだ。幸一に傍にいて欲しくて、代わりを彼に求めた。」

幸一なしでは、私は正しく生きていけなかった」
その事に気付いたが遅かった。

法廷に入廷した時、梓は傍聴席を見る事が出来なかった。うつむいたまま被告席に着き、一度目を瞑って覚悟を決め傍聴席を見たが、川村真理の姿は確認出来なかった。

もう一度、目で探した時、異様な光景が飛び込んできた。

傍聴席の真ん中の席に座り、じっと自分を見つめている初老の男性は、川村雄一郎の遺影を抱

いていたが、その隣に座っている、やはり初老の上品そうな女性も胸に小さな写真を抱いていた。

……その写真には、黒いリボンがかかっていた……

「真理さん！」

叫んだつもりだったが、声にはならなかった。

……どうしたの？……

「教えてください」という表情で弁護人を見たが、弁護人は首を横に振っているだけで、何も教えてくれなかった。

真理の写真を抱えている友美の視線が痛かった。

「最初にご報告申し上げます。被害者である川村雄一郎さんの奥様の川村真理さんは、昨日、脳動脈塞栓症にて急逝されました。以上です」

息を飲む気配が法廷内を包んだ。

裁判長の言葉を聞いた梓が驚いた顔をして思わず立ち上がり、声をあげて泣き出し「そんな……

どうして……」「うわごとのような言葉を漏らした。

傍聴席からもすすり泣きが聞こえた。

「被告人は静粛に！」

裁判長が梓に注意を促した。

「真理さん……ごめんなさい……ごめんなさい……」
梓の泣き声が激しくなった。

「もう一度申し上げます。被告人は静粛に！」
裁判長が木槌を打った。

それでも、梓は泣くのを止めなかった。

「いいですか、もう一度申し上げます。被告人は静粛に！これ以上、被告人が警鐘を無視した場合、本法廷は休廷せざるを得ない状況になります。被告人が、

川村真理さんに心から申し訳ないと

思う気持ちがあるなら、静粛にしてきちんと裁判を受けてください！」

裁判長の言葉は重かった。

梓は観念したかのように腰を下ろした。

「それでは、これより菅原梓の裁判を開廷いたします」

梓が大人しくなったのを確認した裁判長は開廷を告げた。

「被告人菅原梓は前に出なさい」

梓はゆっくりと進み出た。

傍聴席では、矢沢勲と友美の他に、杉山直樹、笹岡崇がじっ

と梓を見つめていた。

「真理ちゃん、そろそろ裁判が始まる時間よ」

村上の妻の弓恵は横浜のマンションで、物言わぬ真理に話しかけていた。

「川村雄一郎殺害について、本裁判の被告である事は間違いありませんか？」

「間違いありません」

梓は前を向いてハッキリと答えた。

「始まるぞ、しっかり見ろよ」

勲は声を出さずに雄一郎に語りかけ、友美は真理の写真を胸元に引き寄せた。

「氏名、生年月日、本籍地、住所、職業を答えなさい。」

「はい、菅原梓、生年月日は昭和43年10月24日、本籍地

……」

ここでも梓の声はハッキリとしていた。

「それでは、細野検事、起訴状の朗読をお願いいたします」

裁判は開始された。

公判検事である細野靖は裁判員に分かりやすい言葉を使って、
ゆっくりと起訴状の朗読を行
なった。

「罪条刑法第199条、罪名殺人罪」の言葉が法廷に響いた、
起訴状朗読後、梓への黙秘権の告知と罪状認否が行なわれた
が、そこでも梓は「間違いあり
ません」と答え、細野検事の冒頭陳述が始まった。

「被告菅原梓は、福島県で4人姉妹の長女として生まれ育ちま
したが、昭和63年県立高校2
年生の時に、中学生時代の恩師である菅原幸一氏と不倫関係を
結び、一時期、関係を絶つてい
た時期もありましたが、平成8年二人の関係が復活し、平成1
0年には駆け落ち同然で、福島
県から千葉県に移り住みました。その間、平成3年には椎名達
郎氏と結婚しており、7年間
の婚姻生活を送っております。尚、被告人は県立高校卒業後、
地元の信用金庫に勤務し、結
婚後、夫の転勤を契機に、福島市内の紳士服専門店にて勤務経
験がありますが、犯罪歴などは
ございません。現在福島県内には、被告の両親と姉妹が在住し
ていますが、菅原幸一氏と駆け
落ち後、被告とは没交渉になっております。椎名氏との離婚成
立後は、菅原幸一氏と再婚いた
しましたが、平成16年菅原幸一氏が肺結核を患い、半年間の
療養生活を送ったことから、山梨

県北杜市に移り住み、菅原幸一氏は、ハケ岳ガーデンリゾートホテルの送迎バス運転手として

勤務しておりました。しかし、平成20年4月、夫である菅原幸一氏は勤務中に、交通事故で

死亡しております。その夫の葬儀の席上で、被告人は、被害者川村雄一郎氏に心を奪われ好意を抱くようになりました。当時被告人は失声症を装っており、

夫の事故後の諸手続きのために

何度か被告と接していた被害者は同情心から、被害者自身が勤めるホテルの仕事を斡旋しまし

た。その後、同年8月末頃から二人は不倫関係となりました。

平成21年11月末、被害者の

妻である川村真理さんが掲載されている雑誌を読んだ事で、激しく被害者に対して独占欲が沸

き、偽装妊娠という手段を使いました。偽装妊娠とは知らない被害者は、生まれて来る子供の

ために本年3月、妻に離婚要求をいたしております。離婚は成立してはおりませんが、妻は別

居に同意しておりました。被告人は、被害者と妻が別れた後、時期を見て流産したと、被害者

には告げるつもりでございました。本年4月、被告人が妻の勤務するホテルに現れ、妻と直接会

った事で被害者に責められました。また、その場で、被害者の妻への愛情の深さを知った事で、

計画の変更を余儀なくされた被告人は、5月30日に、被害者には内緒で千葉県幕張に移り住

みました。その後も、被害者には引越しをした事は告げず、被害者には自宅を訪れるよう連絡

をし、約束もしておりました。6月15日、何も知らず被告人宅を訪れた被害者は、たまたま

帰宅した被告人の隣家の主婦との話しの中で、被告人の突然の引越しと、失声症と偽装妊娠を知らされる事になりました。被告人はその翌日、探り目的で自ら、隣家の主婦に電話をした事で、被害者が全てを知った事を知り、大きなショックを受けました。被害者が自分を憎んでいた。被害者が自分が膨らみ、このまま自分を憎み続けるであろう被害者が、どこかで生きていくという事が我慢出来ず、被害者のスケジュールを把握していた事で、交通事故を装った殺人計画を考えました。交通事故の場合、自分も巻き込まれる可能性がある。万が一巻き込まれたら自分は愛されていない。という事に賭け、巻き込まれなかった場合、心神喪失を装う。という計画も立てておりました。実際に就職が決まった「きりり」という雑貨店では3日間しか勤務せず、異常な勤務態度で、雑貨店が解雇という形を取らざるを得ない状況を作り上げ、その後、不眠症と被害妄想を訴え、精神科にて1度だけ診療を受け、短期精神障害と診断をされています。犯行にはレンタカーを使用してありますが、レンタカーの店でもやはり異常な行動を取りました。また、犯行前日から小淵沢のホテルに宿泊していましたが、そのホテルでも、クレームを付ける等の異常行動を取っておりました。犯行当日は、ハケ岳ガーデンリゾートホテルの従業員用駐車場で、被害者を待ち伏せ、後をつけました。小淵沢ICから中央自動車道に乗り、笹子トンネル手前で、追い越し車線か

ら急ハンドルを切り、被害者の車の直前に割り込み、被害者を死に至らしめました。そのまま

逃走したのは、巻き込まれなかった事で、予め考えておいた次の計画、心神喪失を装うという

事を実行する事が目的でありました。目撃者の証言と高速道路の入退場記録により、レンタカ

ーを割り出し、レンタカー会社の記録から被告が特定されました。翌、7月3日土曜日、午後

3時半に千葉県千葉市美浜区の自宅で、救護義務違反により、被告人を逮捕いたしました」

裁判員も傍聴者も、菅原梓の凄まじい過去や事故に至る経緯については、息を飲んで聞き入っていた。

冒頭陳述の後には各証拠の取調べが行なわれた。検察側からの証言者は、橋本章二、吉野裕之、

片岡ふみ子、村上健司の4名が申請され、弁護人からは吉野裕之、片岡ふみ子の2名が申請さ

れた。福島に住む、梓の両親と姉妹からは「梓とは縁を切っていますので、一切関わりたくは

ありません」と情状酌量の証人としての出廷を拒否されていた。

2

「お断り申し上げますが、検察側証人として申請しておりまし

た橋本章二さんでありますが、

三日前に、勤務先で右大腿部骨折の怪我を負われてしまいました。一昨日、無事に手術も済み

ましたが、本日の出廷は不可能という事で、担当医の診断書を提出させて頂くと共に、昨日、

病院に出向きまして得た証言の録音テープをもちまして、証言に代えさせて頂きたいと考えて

おります。尚、録音テープを文書に起こし、本人の署名及び実印を押印した書類も併せて提出

させて頂きます」

「弁護士いかがですか？」

「異議はありません」

橋本章二証言の録音テープが公開された。事故当日の生々しい様子を証言した橋本は「長い

距離、チェロキーの後ろに連いていました。エステイマの運転ぶりが気になったので、自分は

常に速度計を確認しながら運転をしていましたが、チェロキーは規定速度内での走行であり、

運転していた被害者である川村さんには、全く非がないと思います。エステイマは悪魔の車だ

と思いました」と証言を終えていた。

次に証言台に立ったのは、ハケ岳ガーデンリゾートホテル宿泊部支配人の吉野裕之であった。

「亡くなられた川村雄一郎さんとのご関係をお話ください」

吉野裕之は慎重な面持ちで証人宣誓を行なった後、検事の尋問にはつきりとした口調で証言を始めた。

「総支配人……すみません、そう呼ばせてください」

「分かりました」

細野検事は答えた。

「私が6年前に、北海道にある富良野ガーデンリゾートから八ヶ岳ガーデンリゾートに転勤した時に、総支配人は、宿泊部支配人で私の直属の上司でした。それからずっと私は部下として、

総支配人の下で仕事をして来ました」

「お仕事を離れての個人的なお付き合いはありましたか？」

「当時、私は結婚したばかりで、妻も一緒に山梨に連れて来ましたが、単身赴任の総支配人とは、私の妻と一緒に飲みに行ったり、横浜にいらっしゃった奥様が見えた時はご同伴で飲んだり、食事をしたりと頻繁ではありましたが、家族ぐるみの付き合いをさせて頂いていました」

「比較的個人のお付き合いがあったご様子ですが、川村さんと被告との関係に気がついた事は
ありませんでしたか？」

「全く気がつきませんでした」

「どうして気がつかなかったのですか？」

「総支配人は長い間単身赴任でしたが、社内で浮いた話を聞いた事ありませんでした。総支

配人の愛妻家ぶりは有名だった事もあり、全く考えた事がなかったからだと思います」

「被害者の愛妻家ぶり、というのは具体的にどういう部分で感じられましたか？」

「横浜にいらつしやる奥様をととても大切にしていました。特にオノロケを言ったりとか、

ご自分から奥様の話をしたりとかそういう事はありませんでした。今、考えると菅原さんと付

き合っている時期にも、奥様とも一緒に過ごして頂いた事がありますが、奥様を思う気持ちが自

然に伝わってきて、ほのぼのとしたそんな気分になりました」

「お仕事での様子も含めて、被害者の川村雄一郎さんはどんな方でしたか？」

「総支配人は仕事に厳しい人だ、とガーデンリゾート内で評判で、私は富良野から転勤の際、

覚悟してきました。その評判の通りでしたが仕事が好きで、部下思いで、誠実で優しくりっぱ

な方でした。進んで悪者になる様な部分もありました。仕事一筋の仕事人間の部分もありまし

たが、面白く仕事をしよう、みたいな遊び心もありました。勿

論、そうであつても聖人君子で

はありませんから、完璧だとは思っていません。仕事の事で、総支配人の考えが間違っていた

事もあつたり、ぶつかる事も多々ありました。それに、酔つて乱れた姿を何度も見た事もあり

ます。それでも、私は総支配人の仕事に向う姿勢や奥様を思う気持ち、生き方そのものを尊敬

していました。そういう総支配人を手本に生きて行きたい、そう思っていました」

「他の方には分からない部分で、悩まれていたようでしたが、その事を感じた事はありませんか？」

「そうですね……余り、ご自分のプライベートに関する事での喜怒哀楽は出されない方でした。

以前、奥様がご病気で子供をダメにされた時の事ですが、自分の事で、周りに心配や迷惑をか

けてはいけない、と毅然とされていました。私はかなり辛そうだと思いましたし、みんなも心

配していました。それは事情を知っているからで、知らなかったら、恐らく総支配人の様子

だけでは、誰も気がつかなかったと思います。今回の事もそうです。こういう事があつて、総

支配人もかなり辛く、苦しかったと思いますが、事故が起きて話を聞いたから分かった事です。

そういう周りへの気配りとかには、非常に神経を使われていました。でも、後悔しています。

自分達が毅然とした総支配人を求めていたから、余計に辛かったのではないかと。申し訳ない

と思っています。先程も申し上げましたが、ご自分のプライベートな姿を表わさなかったのも、生活臭を感じませんでした。でも、今、思いますが……その……不倫の事も含めて、とっても人間臭い人だったのかってそう思います」

「事故当日の川村さんの様子はどうでしたか？」

「月に一度の本部での定例会議の日で、朝、通常に出社して、私達に指示を出かけました。

ただ、一つだけいつもと違うと思う事がありました。週末にかかる場合は変更されますが、本部の定例会議は毎月2日と決まっています。平日の場合、総支配人は会議の翌日は公休を取ら

れていました。会議の後、横浜に帰るからだと思います。今月は会議が金曜日でしたが、そう

いう場合は、日帰りです。帰って来る事が多かったのですが、今回は都合で土曜日に休ませてもら

う。と申し訳なさそうに言っていました。フロントの女性スタッフには、奥様が珍しく土曜日

が公休なので、自分も公休を合わせた。と嬉しそうに話していたそうです。普段、ご自分から

そういう事を話す事がなかったので、聞いたスタッフはよっぽど嬉しかったのだらう。と言っ

ていました」

「次に被告の事について教えてください。ホテルでの被告はどんな様子でしたか？」

「ご主人が亡くなられて、労災等の手続き行なった総支配人が、

菅原さんに仕事を紹介したと

聞いています。入社してから声が出なかったの……私も全く疑っていませんでしたが……余

リスタッフと積極的に交わる、とかそういう部分はありませんでした。真面目で、きちんとさ

れていた方だという印象は残っています。リネン室もいつも綺麗に片付いていたし、備品の補

充なども不足なく行なってくれていたの、清掃スタッフなどからは評判は良かったと思いま

す。バックヤードの清掃や制服のクリーニング手配等、スタッフのサポートもしてくれていた

ので、助かっていました。ご主人の事があったからだと思っていましたが、自分を積極的にア

ピールする事もなく、出来るだけ目立たないように、分別をわきまえた人だと思っていました」

「被害者と被告との関係について、何か気がついた事はありませんか？」

「総支配人は、誰に対しても分け隔てなく接していました。それに、ツーショット場面も見た

事がなかったの、二人の事は驚き以外の何物でもありません」

「最後になりますが、吉野さんの今のお気持ちを聞かせてください」

「私もそうですが、会社のスタッフ全員は大きな悲しみでいっぱいです。総支配人がいなくな

って、また改めて、総支配人の存在の大きさを感じています。そんな総支配人に、もっとそば

にいていろいろ教えてもらいたかった、だからとても残念で悲しい思いでいっぱいです。私は、

奥様の事は今日裁判が始まる前に聞きました。総支配人同様、とても素晴らしい方でした……」

吉野は声を詰らせた。

「こんな……こんな事がなかったら、お二人で……今頃は奥様も……」

吉野は次の言葉が言えなかった。

「菅原さんには……犯した罪の大きさをしっかりと受け止めてもらい、きちんと罪を償ってください！」

そう言つて、吉野は梓を睨み涙を拭った。

「ありがとうございました。以上です」

「続いて弁護人、反対尋問をお願いします」

梓の国選弁護人である、檜橋雪子が立ち上がった。梓からは「全てを認めて、素直に刑に服すつもりですので、自分に有利になるような、情状酌量を求めるような証人喚問などは行なわないで欲しい」と言われていた。

「証人は、被告人と被害者が付き合っている間も、奥様を大事にしている気持ちが伝わって来

た。と証言されましたが、二股をかけていた時でも、他人にそういう気持ちを抱かせるという

事は、遊び上手な遊び人、という事ではありませんか？」

「異議あり！ 弁護人の発言は、一方的な解釈であり誘導尋問と考えます」

「異議を認めます」

「質問を変えます。被告人以外に、単身赴任暦が長い被害者が、他で遊んでいるという事はありませんでしたか？」

「ないと思います」

「被害者はプライベートな事を余りお話しなかったようですが、それでもないと思いますか？」

「ないと思います」

「証人が、そうお答えになる根拠を述べてください」

「もし、誰にも内緒で浮気などして遊んでいた場合ですが、気付かれないようにカモフラージュ

ユで、反対に奥様のお話をされると思います。四年程前、私が引越しをした、と話をした時、

総支配人から、自分のマンションはホテルにも近いし環境も良い。空き部屋があった筈だから、

引っ越してくればいいじゃないか。と誘われました。今、私は総支配人と同じマンションの同

じフロアーに住んでいます。遊んでいるような人だったら、会社の部下に同じマンションに住

め、と誘わなかったと思います。総支配人は誠実な方です」

「証人は、被告を真面目できちんとしており、分別をわきまえた人と評していますが、会社での評判はどうでしたか？」

「評判は良かったと思います。細かい部分まで気を使って仕事をしているような所がありました。多分、亡くなられたご主人の事や、仕事を斡旋した会社への恩義と言つか、そういう気持ちがあつたのだと思っていました。ただ、これは事情を知った今だから考える事ですが、総支配人との事があつたから、余計に仕事をきちんとされていたのか、と思います」

「大きなホテルで従業員数も多いかと思いますが、被告の悪口などを聞いた事がありますか？」

「菅原さんの業務は、コスモサービスという外注清掃会社のスタッフと関わる事が多く、そこは女性が多い職場です。それでも、菅原さんの悪口などは、私は聞いた事ありません。余計な事には関わらず、人間関係も上手に出来ていた人だと思います」

「会社にとっては、必要な人材でしたか？」

「どうしても菅原さんが居ないと困る、という事はありませんが、菅原さんが携わっていてくれるので、他のスタッフの仕事がスムーズに運ぶ、という部分がありました。そういう意味で

は必要な人材だと思っていました」

「先程、証人は、被害者は愛妻家で誠実な方だと証言されましたが、その様な人が何故、被告

と不倫関係になったと思いますか？」

「……よく分かりませんが、長い間、奥様とは別居生活でしたので、気持ちの中に淋しい、という部分があったのだと思います」

「被害者に心の隙間があったという事ですね」

「異議あり！ 今の弁護人の発言は誘導尋問です」

「異議を認めます」

「どうして、相手が被告だった。と思いますか？」

「私には分からない魅力があったのだと思います」

「被告は、被害者を誘惑する様なタイプの女性ですか？」

「菅原さんが、ホテルに在籍していた時はそういう女性だとは思っていませんでした。でも、今はそう思います」

「被害者が、被告にホテルの仕事を斡旋したのはどうしてですか？」

「菅原さんのご主人が事故で亡くなった事は、スタッフにとつ

て大きなショックでした。菅原

さんのご主人は、スタッフから慕われていましたし、送迎バスの運転手として、お客様の評判

も良く、ホテルのために尽くされていましたので、その菅原さんに応える、という意味もあつ

たと思います」

「被害者から被告に仕事の話をもちかけ、人件費を増やしてまでも採用する事を会社に頼み込

んだ。と、当時の人事担当者からの証言を得ていますが、その頃から、被害者の気持ちの中に、

被告に対する特別な気持ちがあつたのではないですか？」

「異議あり！ 弁護人の発言は憶測発言です」

「異議を却下します」

「私はその事は分かりません。もし、仮にあつたとしても、会社は、そんな個人的な理由で採

用を認めないと思います。事実、菅原さんが入社してから、改善され、スタッフの仕事がやり

やすくなりました。総支配人は、個人的な気持ちより、亡くなつた菅原さんの事や、業務的な

事を考えていたのだと思います」

「もう一つ伺います。被告は、被害者と関係があつた事で、それを糧に一生懸命に会社に尽く

していた。その事はどう思いますか？」

「……」

「答えてください」

「そういう気持ちは分かります。でも、結果、総支配人をあんな目に合わせて……何をもって

一生懸命に尽くすと言うのですか？ しかも、奥様までをもあんな目に遭わせて……そんな尽

くし方は間違っている。そうじゃないのですか？」

吉野は震えていた。

「証人は聞かれた事だけを答えてください」

裁判長が吉野を制した。

「ありがとうございます。以上です。」

弁護人が尋問を終えた。

3

次に証人席に立ったのは、梓の住んでいた団地の隣家の主婦の片岡ふみ子だった。

証人席に立った片岡ふみ子は、最初に梓に目を向けた。

梓は下を向き、手を握り締めて震えていた。梓を見る片岡ふみ子の目から涙が溢れた。

「被告人とは、お隣同士でどんなお付き合いをされていましたか？」

細野検事が質問に入った。

「家に入り浸るとかそういう事はありませんでしたし、それ程深いお付き合いではありません」

「んでしたが、適度に距離を置いてとても楽でした。お互いによそ者同士だった事もあり、そんな連帯感のような気持ちもありました。いつ会っても気持ちよく挨拶をしてくれました。例えば

「私が風邪を引いたりして干し物が出来なかったりすると、ベランダの様子で分かってくれる

「のでしょうが、具合が悪いのか？　と様子を見に来てくれたりするような事もありました」

「良いお付き合いをされていたのに、それが、どうして急に引越しをする事になったのか、と

「思いますか？」

「いつまでも一人で山梨にいて多分淋しかったのだろう、だから、福島の新田舎にでも帰ったの

「だろうと、最初はそう思いました」

「最初は、と言うのはどういう事ですか？」

「菅原さんから電話をもらう前まではずっとそう思っていました」

「被告から電話があったのはいつですか？」

「川村さんが訪ねてみえた翌日です」

「その時の、被告の様子はどうでしたか？」

「転居先も告げずに引っ越しをした事を謝っていました。それと、私と離れて淋しいとも言っていました」

「被害者の川村さんが訪ねて来た時の事を詳しく話してください。」

「仕事を終えて帰って来たら、菅原さんのドアの前に立っていたので、引越した事を伝えました。とても驚いた様子で、どんなご用ですか？ と尋ねたら、名刺をくれて、菅原さんは結婚して子供が生まれるので、そのお祝いの手続きに来た。とそう言いました。そんな菅原さん

の個人的な事情を、会社の人が簡単に私に話をする事に驚きました。でも、一生懸命な様子で、だから少し可哀相になったので家に入ってもらいました。私も言うてはいけない、と思ったの

ですが、誰にも言わないから自分を信用してください。そう言うので、つい、菅原さんが子供を生めない身体だという事を話してしまいました。以前ご主人が亡くなった時に、そういう話を本人から聞いた事がありました。そして、川村さんから声が出ない事も聞きました。だから、

有り得ません、と本当の事を言いました。だって、私とはベランダ越しに会話していましたし、

鼻歌を歌う声も聞いていましたから」

「被害者はどうされましたか？」

「本当に驚いていました。少し変だと思ったのですが、肩書きもちちゃんとしていて、信用出来

そうな人なので気の毒に思いました。それでも、私が言う事は間違いないと何度も言いました。

納得しないまま、会社に帰ってもう一度考えます。そう言ってお礼を言って帰って行きました。

帰った後、何かあるのか？ と考えたのですが、隣に住んでいて、男の人が訪ねて来る気配を

感じた事もなかったし、だから、疑いは持ちませんでした」

「翌日の被告からの電話の最中に気がついた、と言つのは具体的にどういう事ですか？」

「川村さんの事を伝えたら、電話口の菅原さんの様子が急に変わりました。菅原さんは何でも

ないようにはしていましたが、そういう事は分かります。私が菅原さんの事情を話した事を言っ

たら、驚いた様子で声が出ませんでした」

「どうして川村さんの事を、被告に話したのですか？」

「連絡先も告げず引越して、迷惑をかけていませんか？ み

たいな事を聞いてきたし、川

村さんが訪ね来たのは昨夜の事だったので、覚えていたからです。電話をもらって、ちょうど

良かったと思いました」

「何かある、という事は電話での被告の様子で気がつかれたのですか？」

「さつきも言いましたが、菅原さんの驚き方が尋常ではなかったからです。少し責め口調にな

ったから、私も腹がたつて、ちゃんとしないう菅原さんが悪い、と文句を言いました。菅原さん

は自分が悪いと謝っていましたが、動揺していた様子がハッキリと伝わってきました。それで

分かったのです。川村さんが言った事は本当の事で、川村さんとただならない関係だと。この

電話も私を懐かしがって掛けて来たのではなく、様子を探りたかった、と思いました。タイミ

ングも良すぎましたし」

「分かりました。ありがとうございます。以上です」

細野検事は自席に戻った。

「被告とは適度な距離のお付き合いをされていた、という事でしたが、あなたは被告をどんな

人だと思っていますか？」

「……」

弁護士に問われ、梓をチラッと見たふみ子は声を詰まらせた。

「今は……こういう事を犯した菅原さんは間違っていると思いますよ。だから、いい人でした。

とは言えません……」

「引越しをする前までの被告人について、どういう人だったか、と思う事をお答えください」

「いい人だと思っていました。優しくたし、私に良くしてく

れた事は確かですし、私は菅原
さんが好きです」

「こういう犯罪を犯す様な人に思えましたか？」

「全く思っていませんでした。ご主人の供養も欠かさず、けな
げに生きていると思っていました
た」

「どうして、不倫などしたのだと思いますか？」

「私も、早くに主人を亡くしたから、何となく気持ちは分か
ります。私の場合は、こんなだし、

そういう機会も無かったけれど。誰かに頼りたいという気持
ちは良く分かります」

「被告の部屋を訪れる被害者を目撃などした事はありましたか
？」

「あんなに長い間出入りしていたのに、一度もありません」

「その間、被告の様子が変わった事がありますか？」

「特に変わった様子は見られませんでした」

「被告に何か言いたい事がありますか？」

「ちゃんと罪を償って欲しいと思います。それで、前に刑事さ
んにもお話しましたが、刑務所
から出て来て行く所がなかったら、私の所に戻って来てもいい

んですよ。私は一人だから、ま

た菅原さんと仲良くしたい……そう思っています」

ふみ子はハンカチで目頭を押さえた。

梓は肩を震わせて泣いていた。

「ありがとうございます。以上です」
弁護人は自席に戻った。

4

「最後になりますが、検察側の証人として、被害者の友人である村上健司さんの証人申請をいたします」

細野検事が立ち上がった。

付添人と共に法廷に足を踏み入れた村上は、真っ先に被告人席にいる菅原梓に目を向けた。

じつと下を向いている梓の表情は読み取れないが「この女か！」村上は梓を睨みつけた。

「川村は自身も不貞を犯したが、真理には罪はない。真理は心臓に病がある事を知らず、あんなにも呆気なく逝ってしまった。川村が生きていれば、真理の

身体の変変に気がつき、適正な

治療を受けていられたかもしれない。この女は川村だけではな

く、真理も殺した」

そう思うと、初めて見る梓に怒りが込み上げて来たが、拳を握り締めて怒りを抑えた。

「被害者の川村雄一郎さんとのご関係をお話ください」
細野検事の村上への質問が始まった。

「横浜ロイヤルガーデンホテルの同期入社組です。川村はフロント、私は営業と部署は違いましたが、入社した時から何故か気が合い、親しい付き合いをしていました。20年来の親友で

す。川村が結婚後は奥さんである真理が私の部下になり、家族ぐるみで付き合いもしています。

川村がハケ岳ガーデンリゾートに単身赴任後も、友人関係は続いていましたので、二人の事はずっと見てきました」

「20年来の親友という事ですが、被害者はあなたに、被告人との関係を話していましたか？」

「全く話をしていませんでした。」

「個人的な事をお話するような方ではなかったのですか？」

「そうでもありません。でも、言えなかったのだと思います」

「では、どういう事で関係を知ったのですか？」

「3月の半ば過ぎだったと思います。川村から電話がありまし

た。会って直接話をしたいが、

仕事の都合もあり出向く事は出来ないから、電話で申し訳ない
と言っていました。自分には一

年半程前から付き合っている女性がいる。その女性と再婚を考
えているので、だから、真理と

は別れる事にし、既に別れ話をしている。そう切り出されまし
た。突然の話で驚いて、言っ

ている意味が分からず、何を言っているのか？ というような事
を聞いた記憶があります。子供

が生まれる、という話はありませんでした。その時川村は、私
の言いたい事や聞きたい事は分

かっているが、何も聞かないでくれ。そう言いました。真理は
まだ納得していないが、二人の

間できちんと話がついたら、詳しい事を正直に話すからそれま
では勘弁して欲しい、とも言わ

れました。相手の事は勿論話をしませんでした。話の内容はそ
れだけで、最後に真理も辛いだ

ろうから、相談相手になってやって欲しい。と言われたので、
私は地獄に堕ちる。と言っ

て電話を切りました」

村上は込み上げてきたものを飲み込んだ。

「その後、被害者から連絡はありましたか？」

「真理と話が付いていなかったのでしょう、川村からは連絡は
ありませんでした」

「奥様の真理さんからご相談などはされましたか？」

「真理からは何も言っ

聞いた後、問いました。

自分から、川村の不名誉な事を喋るのは嫌だったのだと思います。真理はそういう女性です」

そう言って、また梓を睨みつけた。

「それから、川村さんとはどうだったのですか？」

「川村とは全く会っていませんし、連絡も取っていませんでした」

「真理さんとはどうでしたか？」

「真理とは何度か飲みに行ったりしましたが、そういう時でも仕事の話が主で、離婚関連の話

はしませんでした。川村の話題が出たのは、4月になって相手が真理の前に現れた時です。真理もシヨックだったようで、呼び出されて一緒に飲みました」

「真理さんはどんなお話をされましたか？」

「相手が直接名乗り出たのではないが、真理は相手の言動や、YKというイニシャルが付いた

携帯電話をこれ見よがしに自分の前に置いた事などで、目の前の相手の正体と妊娠に気がつい

たと言っていました。辛かったようです。でも、その時、川村が可哀相だ、と言いました。い

つかは分かったとしても、その時点では、まだ妊娠の事を真理には伝えてはいない川村の気持

ちを考えた、のだと思います。川村が選んだ相手がその気持ちにじった

と、そう思っていたようです」

「奥様は被告の事をどう話しましたか？」

「嫉妬心は沸かないけれど『嫌な女』と思った、と言いました。川村が妊娠を告げないのは自

分への思いやりであり、その思いやりの気持ちを相手が踏みに
じった。そうも言いました。た

だ……『嫌な女』という表現は、自分に向かう被告に対して感
じた事ではなく、川村の気持ち
を考えて言った言葉だと私は解釈しました。その時は言いませ
んでしたが、川村の葬儀の後、

一度だけ被告の話を真理がした事があります」

「どうお話していましたか？」

「自分では分からない相手の真実に向かい合って全て突き止め
たい。そう言っていました。相

手と面と向い合いたい。その相手とも、いつかはきつと分かり
合える事があるかもしれない。

立場が違っても二人とも彼を愛した。その思いは一緒だから。
そう言いました」

「被告を非難した事がありますか？」

「犯した罪は許せない、と言った事があります。でも、真理は
人を憎むとか、人を非難す

……
るとか、そういう事は出来ない人間でした……」

真理を思ふ村上は、今にも崩れ落ちそうになった。

「話が前後しますが、どうして真理さんは、被告がホテルに現れた日に、村上さん呼び出したのだと思いますか？」

「あの時、私を呼び出したのはショックを癒す事と、ホテルでの極度の緊張感に耐えられなかったからで、川村や相手の悪口を言うためではありませんでした」

「被告がホテルに現れた事を被害者にはお話しましたか？」

「私はしていません。ただ、真理には、辛いのだったらその気持ちを川村にぶつけろ、相手の女性がホテルに来た。と言ってやれ、と言いました」

「真理さんは、その事を被害者にお話しましたか？」

「話はしていません。私は、自分の気持ちをぶつけない真理にイライラしたので、その場で川村の携帯に電話をして、話をさせるようにしましたが、二人は、忙しいの？とかそんな会話しかありませんでした」

「では、最後に被害者とお話したのはいつですか？」

「最後に会って話をしたのは、6月30日です。ですが、その前に一度電話で話をしています。」

相手の偽装妊娠を知った日の深夜です。あの日の夜、真理から電話がありました。川村が真理

に電話を掛けてきたが、泣いている様子なのに本人は何も話をしないまま電話を切った。心配

なので電話をしてくれないか？　そう言っただけで来たのですぐに携帯に電話をかけました。確かに

様子が変でしたが、仕事でミスった、と言い訳をしていました。ウソだと分かったので、話を

させるように導きましたが、気持ちの整理がつかないから待つてくれと言われました。それか

ら10日後位に川村から電話があり、話をしたいと言ってきて、お互いの公休日が重なった3

0日に私が山梨に出向き、八ヶ岳ガーデンリゾートに用意してくれた部屋で話を聞きました」

「被害者は奥様に話をする前に、どうして証人に話をしたのだと思いますか？」

「真理より先に話を聞く事には、私も躊躇しました。川村はその理由については何も言いません

でしたが、多分、相当苦しくて辛かったのだと思います。まず私に話をして、私の考えを聞

いて楽になって、真理と話をしたかったのだらうと思います」

「そこで、被害者はどういうお話をされましたか？」

「出会ったきっかけ、いつからそういう関係になったか、相手や真理への気持ち。生まれて来

ると楽しみにしていた子供への思い、知った現実、これから自分はどうしたら良いのか？　全

て話しました」

「具体的な内容を述べてください」

「川村は二人の事を本当に愛していましたが、二人に対する愛の種類が違うと言っていました。」

二人の女性と一緒にいて、本当に幸せだったようです。いつまでもこの状態が続けば良いと思

っていたのですが、それでも心の何処かに、真理を裏切っているという気持ちはあったと言っ

ていました。別れなくてはいけないと葛藤していたようで、そんな時に妊娠を知り、悩んで悩

んだ挙句、真理と別れて、相手の女性と一緒に子供を育てる道を選択しました。以前、子供を

亡くしているので、子供に対する気持ちは人一倍強いものがありました。それが、突然の失踪

と偽装が分かり混乱しました。その辛く苦しい気持ち、その日の真理への救いの電話だった

のです。その時は非常識で最低な男だと思いましたが、実際非難もしました。でも、私達にど

う思われようが、それ位あいつは、川村は苦しかったと言っていました。その辛い時期から散

々悩んで、考えて、真理とやり直す事を望みました。真理には詫びてやり直して欲しい、そう

言うつもりだと言っていました。それにはこのまま山梨で仕事は出来ないのです、退職も視野に

入れて異動願いを出し、横浜に帰りたい。と言っていました。もし、真理が受け入れてくれな

かったら、受け入れてくれる日が来るまで待つ。それも叶わなかったら覚悟は出来ている。と

も言いました。川村は最後まで知る事が出来ませんでした、真理は川村を許すつもりでいま

した。二人ともお互いなしでは生きていけなかったのです」

「証人は被害者にどういうお話をされましたか？」

「とにかくショックだったので、気の効いた事は言えませんでした。私は、川村を信じている、

真理を幸せにしてやってくれ。とだけ言いました」

「被告の事は何か話をしましたか？」

「名前や年齢など、細かい話はしませんでした」

「それはどうしてだと思いますか？」

「多分……あんな酷い目にあっても、相手の事が好きだったからだと思いました。私が相手を

責める言い方をした時に、言わないでくれ！と止められました。自分も悪いのだから、彼女

の事は悪く言うなど。川村は相手の事を憎んでいる、とか恨んでいるとか、悪口は一切言いま

せんでした。ただ、彼女の気持ちが悲しい。とだけ言いました。その時の川村の顔は、今まで

見た中で一番悲しそうでした。バカな奴です……相手の事も好きだったでしょう。本当にあ

いつは……でも、そういう川村を私は信じます」

ついに……村上は堪えきれず男泣きを始めた。真理が亡くなった昨日から、ずっと堪えていた涙が一気に溢れ出た。

傍聴席のあちこちですすり泣きがまた大きくなった。

梓は何かに耐えるようにずっと下を向いていたが、肩が震えていた。

「ありがとうございました。以上です」

第十六章

1

「ここで被告人質問に入ります。被告人は前に出なさい」刑務官に支えられて、梓が証言台に立った。

裁判員：ご主人の葬儀で被害者に好意を持った、という事ですが、被害者と不倫関係になった

きっかけを話してください

裁判長の隣の席に座っている梓と同じ年頃の女性裁判員が、まず質問を始めた。

梓　：私にはいつも何かを探しているような所がありました。亡くなった主人と駆け落ちし

て千葉に行き、主人の病気が元で山梨に引っ越ししましたが、刺激がなくて退屈でした。

そんな時に主人が亡くなり、葬儀の席で川村さんとお会った時、川村さんが私の探し

ていたものだと感じました。労災の手続きを川村さんが担当すると聞いて……シナリ

才を考えました。失声症を装う事にしました。川村さんはそんな私に同情し、仕事を

始めてからはフォローしてくれました。川村さんが私に好意を持っている、という事

を感じて、そして……夏のイベントが終わった後、私

は病気を装って会社を一週間お

休みしました。川村さんはそんな私を心配して自宅に様子を見に来てくれました。その時に……私から誘いました

裁判員：被告から仕掛けたという事ですね？

梓：そうです

裁判員：あなたは、駆け落ちまでしたご主人の葬儀で被害者に好意を持ち、何ヶ月も経たない

間に被害者と不倫関係を結んでいます、そういう自分の行いについてどう考えていますか？

梓：不謹慎だと思いましたが、倫理に反している事をしていると承知していました。でも、

気持ちは抑える事が出来ませんでした

裁判員：そうだったとしても、亡くなったご主人の時と同じ事の繰り返しをされた、という事

ですね。同じ事をして、相手のご家族の事を考えなかったのですか？

梓：結婚指輪もしていましたし、ホテルで単身赴任をしているという事は聞いていて、だ

いたいの事は分かっていました。でも、本人は一言も家族の事を言わなかった事もあり、割り切った関係と考えていました。

裁判員：割り切った関係と考えていたのに、こういう結果になった。というのはどうしてですか？

梓：言葉で言うのは簡単ですが、好きでしたので気持ちの中で割り切れないものがありました。

裁判員：こういう結果になった。というのはどうしてですか？

梓：愚かだったと思います。相手が何も言わないのだから、それで満足していれば良かった、と後悔しています。でも、同じ職場にいたので、聞かなくていい事を聞いてしまったからです

裁判員：偽装妊娠を考えた理由を教えてください。

梓：職場のホテルで、川村真理さんが雑誌に出ている事を聞きました。本屋でその雑誌を

見てショックを受けました。私が好きな人の奥さんは、私とは全く別次元の世界でこ

んなに輝いている、と思うと悔しくなりました。同じレベルに達する事は絶対に出来

ないと思いましたが、負けたくはありませんでした。私が負けない事、それは川村さ

んを奪う事だと考えて、それには弱点である子供を利用するしかない、と思ったからです。

裁判員：偽装妊娠という事を考えて、それがどういう結果になるか？ という事を考えた事はありますか？

梓：……どういう結果になるか？ と自分で考えるより、相手の出方を見よう、と思いました。
全て相手に賭けようと思っていました

裁判員：ずいぶん身勝手な考えだと思いますし、被害者の誠意を踏みにじる事になると考えませんか？

梓：今は、心から申し訳ないと思っています。

裁判員：あなたが考えた事が全て成功したのに、横浜のホテルに行つて川村真理さんと会つた
のどういう理由からですか？

梓：奥様と離婚の話をしたら、すぐに電話をくれると約束していました。その話をするのはいつ、という事は知っていました。でも、連絡はありませんでした。連絡があつたのは一週間後です。その間に、とても不安な気持ちになりました。二人が申し合わせ
て何か話をしているかもしれない、疑心暗鬼になつた事が原因です。

裁判員：横浜のホテルで川村真理さんと会つた事が原因で、あなたは被害者の前から姿を消す
事になつてしまつたのですが、その事についてはどう

思っていますか？

梓　：私が行なった事の全てが今は愚かだったと思っていますが、あの時は、私が敵わない

川村真理さんにダメージを与えたい。という思いしかありませんでした。間違った考えでした。

裁判員：間違ったと思ったのなら、人間として取る道があったのではありませんか？

梓　：今ならそう考えると思います。でも、あの時は分かりませんでした。

裁判員：突然、川村さんの前から姿を消した理由は何ですか？
また、消す必要などなかった
とは思わなかったのですか？

梓　：川村さんが本当に愛しているのは奥さんだと、改めて分かったからです。でも、そうであっても、川村さんは私を選んでくれた。偽装妊娠を打ち明けるつもりはありません
　　：私の中で、どうにも許せない感情が沸きました。すみません、言葉では
　　：言えない感情です。私が否定されたような……私にとつては辛い気持です。黙って姿を消せば、彼の心の中に、私はいつまでも残る事になる、そう思っていました。

裁判員：「どうにも許せない」という事を言う権利はあなたに

はないと思います。

梓　：申し訳ありません。

裁判員：そのまま姿を消す。という事で終わらせればよかった、
と思いませんでしたか？　ど

うして殺人などという罪を犯したのですか？

梓　：彼に憎まれている。と思ったからです。愛していた人
から憎まれる事程、辛い事はあ
りません。

裁判員：罪を犯すまでの事を考えたのであれば、本人と話をす
る勇気が持てたではありません
んか？

梓　：仰る通りです。でも、その時はそういう事は考えられ
ませんでした。

裁判員：一緒に死のうと思ったのですか？

梓　：もし、一緒に死ねたら、彼に愛されている。そうでな
かったら愛されていない。と考
えました。

裁判員：もう一度質問します。一緒に死のうと思ったのですか？

梓　：思いません……でした。

裁判員：その後、逃走したのはどうしてですか？

梓　：初めからそう計画していました。

裁判員：ホテルから被害者の後をつけて、事故を起こすまでの間の、被告の気持ちを述べてください。

梓　：迷いました。止めようと考えたりもしました。でも、中央道に乗って横に並んだ時、目

が合いましたが、川村さんは表情一つ変えなかったの
で、私の事が気がつかないのか？

と思いました。もう一度並行して走り、また目が合い
ましたが、やはり表情一つ変えま

せんでした。それがショックでした。私に対しての感
情がない……私の全てを否定され
ているような気がしました。

裁判員：一度は止めようかと思いましたが、その事もあって計
画通りに行きにおよんだという事
ですね。

梓　：そうです。

裁判員：殺意があったという事ですか？

梓　：ありました。

裁判員：被害者の事を本当に愛していたのなら、犯した罪を認め、
刑に服そうと思いませんか？
たか？

梓　：自分の気持ちが分かりませんでした。二人が私の事を嘲笑っているような、そんな気がしました。

裁判員：心神喪失を装った理由を教えてください。

梓　：二人に、特に奥様に負けたくなかったからです。不起訴になったら、さぞかし悔しいだろうと思っています。そして、釈放されたら、どこかに行って、全ての過去を棄てて生きていきたいと考えました。

裁判員：心神喪失を装っていて、精神鑑定を受ける可能性があるのに、全て自白した理由を述べてください。

梓　：最初は簡単な事だと思っていましたが、日が経つにつれて、耐えられなくなった部分もありました。そんな時、刑事さんからお話を伺いました。川村さんの気持ちや奥様の気持ちを知って、自分が愚かだったとハッキリと気がつきました。これ以上騙し続けられ、本当の悪魔になってしまうと思いました。私は人間に戻りたいと思いました。

裁判員：あなたは、ご自分のお子さんを二度も自身の手で葬っている。命の重さをどう考えていますか？

梓
……

裁判員：きちんと考えを述べてください。

梓　：何よりも尊いもの……そう思います。その命を奪った私は、生きている価値がないと思います。極刑に値すると覚悟しています。

裁判員：自分は生きる価値はないと考える事、その事自体が、まだ、あなたは命の尊さを分かっ
ていないと思います。人の命を奪って生きる。そのよ
うな生き方を選んだからには、あ
なたは『死んで当然だ』という考えを捨て、奪ってき
た『命』の重さを背負い、悔い改
め、あなた自身の人生をかけてきちんと罪を償う事が、
あなたの努めだと考えます。

梓
……

裁判員：絶縁状態になっている、福島にいらつしゃるご両親や
妹さん達の事は考えた事がありま
すか？

梓　：私には家族はいません。関係ないので、福島にいる人
達の事はそつとしておいてくださ
い。お願いします。

裁判員：昨日、とても悲しい出来事が起きました。川村真理さ
んに対して仰られる事があります
か？

梓　：奥様は素敵な方でした。なのに……本当に私は悪魔だったと……ひどい事をして、心から申し訳ないと思います。

裁判員：先程、被害者のご友人の村上さんから「被害者は一度もあなたの悪口を言わなかった」

という証言がありました。あなたと目が合った時、被害者の表情が変わらなかった。と

いうのは、あなたへの思いやりの気持ちだったのでは
ありませんか？ 被害者はあなた

だという事に気がついていた。無表情を装う事は、お互いに犯した事を反省して、これ

からは別々の道を歩んで行く。過去のあなたを許そう
とっていたからではないのです

か？ その事をもう一度考えてください。

「裁判員からの質問は以上です」

裁判員を代表して、命の尊さを述べた50代半ばの男性裁判員が裁判長に告げた。

2

「では、最終弁論に移ります。検察官は論告求刑を述べてください」

「最終弁論に入る前に、この手紙を読ませて頂きたいと思います。この手紙は、15年前に暴漢

に殺害された佐々木真司さんという方が、被害者宛に書いた手紙です。手紙は被害者の手に渡る

事なく、長い間神奈川県警川崎幸北署に保管されていました。

本事件がきっかけとなり、川崎幸

北署元捜査官から川村真理さんの手に渡りました。手紙の内容は本事件とは関連はありませんが、

裁判長、裁判員及び傍聴されている方に、是非聞いて頂きたいと思います」

「弁護士、異議はありますか？」

細野検事が、檜崎弁護士に手紙を見せた。

「異議はありません」

「ありがとうございます。補足説明をさせて頂きますが、差出人の佐々木真司さんという方は、

川村真理さんの実の父親でありましたが、佐々木真司さんはご家庭がありました。川村真理さん

は実の父親を知らずに育ちましたが、母上が亡くなられた時に、実の父親の存在を知り、ご自身

の手で父親探しをしていました。その事を含んでお聞きください」

法廷内がシーンと静まり返った。細野検事は、緊張をほぐす様に咳払いをして、佐々木真司から雄一郎宛の手紙を朗読し始めた。

手紙を読み終えた時、法廷内のあちらこちらですすり泣きの声が響いた。

「ご静聴ありがとうございます。これより、最終弁論に移らせて頂きます」

細野検事は再度、咳払いをした。

「被害者である川村雄一郎氏は、信じていた被告から偽装失声症や偽装妊娠、そして突然の失踪

という仕打ちを受けました。自身も不貞を犯していましたが、川村雄一郎氏の気持ちを思うと、

到底被告の行いは許されるものではありません。また、全てに気がついた後、自身を悔い改め、

奥様に許しを請い、再出発を望んでいた川村雄一郎氏に対しての、余りにも自己中心的で身勝手

な被告の犯行、そして犯行後の逃走及び心神喪失の演技等は、人間が行なえる行為ではありません。

川村雄一郎氏は誠実で多くの方から愛されていました。もし、生きていられたら、精神的に大き

な痛みを味わった事で、また人間としての幅が広がり、男としてりっぱな人生を歩まれた事だと、

私は考えます。本人も無念の気持ちでいっぱいでしょう。昨日、奥様の川村真理さんが心臓病で

急逝されましたが、川村雄一郎氏が生きていたら、奥様のそばにいられたら、奥様の身体の異変

に気がつき、奥様は適切な処置を受けられ、一命を取り留める事が出来たでしょう。被告の罪は、

川村雄一郎氏だけの殺害には留まらず、川村真理さんをも殺しました」

「異議あり！検察官の発言は、何の根拠もない、憶測であります」

「異議を認めます」

「確かに、医学的には因果関係はありません。また、被告が実際に手を下したわけではありません。んが、心臓病で急逝された川村真理さんの苦しみや辛さ、悲しみを考えると、私は言葉がありません」

細野検事は一旦言葉を切った。

「交通事故を装った殺人の罪で、被告人菅原梓を懲役18年に処するのが相当と考えます。以上です」

「弁護人の意見を述べてください」

「殺意があつた。と認めている被告人の一連の行動には情状酌量の余地はありませんが、被告自

身も精神的に大きなダメージを受けております。また、どういう判決が下されようが、控訴せず

そのまま刑に服す。と自身の行ないを反省し悔い改めている真摯な気持ちを考慮して頂き、判

決を頂けます事を、弁護人としては望んでおります。以上です」

自席に戻った檜崎弁護士は「やるせない……」と深いため息をついた。

「本裁判はこれで結審をいたしますが、最後に述べておきたい事があれば述べてください」

裁判長が、梓に最終陳述の機会を告げた。

倉田は傍聴席で梓を見ていたが、その時、梓と目が合った。

「似ている」

倉田はそう思った。

目の前にいる被告は取調中に「したたかだ」と感じた菅原梓ではなかった。

「一人の男を愛した」梓の目の奥に、川村真理と同じ「一途さ」を感じた。違うのは「真理は不

貞を働いた夫を信じて許そう」と思っていたが、被告は「信じる事が出来ずに許さなかった」と

いう事だ。被告の愛し方は間違っていた。

真理が捜査本部を訪れた時に「愛する事、信じる事、忘れる事は人生の3つの試練」と言っ

ていた言葉を思い出した。犯行前にその言葉を被告が聞いていたら、恐らく被告は気付いただろう。

殺人は行われなかっただろう。裁判員も言っていたが、被害者が被告を無視したのは、被害者の

被告への愛情の証だったのだ。被害者は、まだ被告を愛していたのだろう。

遠藤検事にも話した事があるが「相手を思いやる気持ちとか、真に愛する気持ち、私達が忘れ

ている何か大切な事、そういう事を私達に思い起こさせるために、この夫婦が存在している」ま

さしく、川村夫婦はその通りだったのだ。

「いつかはきつと分かり合える事があるかもしれない。立場が違ってても二人とも彼を愛した。そ

の思いは一緒だから」と言った真理が、今の被告の姿を見たら

どう思うだろうか？

「頂きます判決に素直に従う覚悟であります。私が悔い改め、詫びても二人は帰って来ません。

罪の重さは承知しております。最後にお二人に言わせてください。本当に申し訳ございませんでした。改めて心からお詫びいたします」

前を向きハッキリとした声で告げた梓の言葉で、倉田は我に返った。

「判決は一週間後、法廷にて申し渡します。これにて、被告人菅原梓の裁判は終了いたします」

裁判は終了したが、しばらくの間、誰も動けない状態になっていた。

倉田警部補は目を瞑って天井に顔を向けていた。刑務官が梓に退廷を促したが、梓が何か刑務官に話し、刑務官がうなづいた。

刑務官に付き添われた梓が、ゆっくりと雄一郎と真理の遺影に向かって来るのを見た勲と友美の表情が険しくなった。

「私が間違っていました。謝って許される事ではありませんが、今の私には謝る事しか出来ませ

ん。きちんと罪を償います。本当にごめんなさい」
二人の遺影の前に立った梓は泣きながら訴えた。

「分かりましたから、どうぞお引取りください」

勲が梓から顔を背けて、小さな声で梓に伝えた。

友美は涙が溜まった目でじっと梓を睨んでいた。

「あなたが謝っても二人とも帰って来ません！ 真理ちゃんはどうしても辛かったのですよ！」

穏やかな友美が声を荒げた。

「返してください！ 雄一郎さんと真理ちゃんを、今、ここで私達の前に返してください！」

「やめなさい。お願いだからお引取りください」

勲が友美を制して、刑務官に梓を退廷させるようにお願いをした。

「ダメです！ すぐに二人を返してください！ さあ、早く！」
友美が泣き喚いた。

「いい加減にしないで！ そんな事を言っただって、二人は喜ばない！」

勲が厳しい口調で、友美をたしなめた。

「お願いだから、この人を早く連れて行ってください！」

刑務官に促された梓は観念したようにヨロヨロと立ち上がり
「申し訳ございませんでした」と、

勲と友美に頭を下げて退廷して行った。

同時に、報道関係者が一斉に立ち上がり法廷を飛び出して行ったが、倉田だけは席を立つ事が出来なかった。

第十七章

そして、判決の日を迎えた。

法廷には、村上健司、矢沢夫婦、杉山直樹、倉田警部補、柳田巡查長、笹岡崇の姿があった。

真理は、横浜のマンションで弓恵と一緒にいた。

求刑通りか、それ以上の判決が予想されていて、それを真理にも聞かせたいと思ったが「真理を

法廷に連れ出すのは、雄一郎の本意じゃない」皆がそう考えた。

「真理ちゃんって……不思議な人……」

弓恵は、真理に話しかけた。

友人に紹介された村上健司と初めてデートした時、村上は仕事の話ばかりしていた。

話の中に「川村雄一郎」と「川村真理」の名前が何度も登場していた。

「会ってみたい」

そう言ったが、村上は中々二人に会わせてくれなかった。初めて二人に会ったのは、結納が済

んだ頃だった。

どうして、二人に会わせてくれなかったのか？　すぐに分かった。

……彼女は彼の女神様……だから……村上の表情がそれを表わしていた。

でも、そんな村上の気持ちが分かるような気がした。真理には不思議な魅力があった。

雄一郎と、真理、そして村上の三人の繋がりが羨ましくて、「私もその仲間に入れて欲しい」そう思ったが、仲間に入るまでには時間がかかった。それ位、三人の気持ちの繋がりは強かった。

時々、やきもちを焼いた事もある。

雄一郎が山梨に転勤になった時、夫に単身赴任を強いた真理の事を、村上は本気で怒っていた。

そして、雄一郎の転勤後、真理が頻繁に村上家を訪れるようになった。やきもちを焼く位、村上

の気持ちの中に入り込んでいる真理に対して、最初は品定めのような気持ちで接していたが、す

ぐに弓恵も真理が大好きになった。

少女のようで、でも、大人びていて、脆もろそうで、でも、芯が強くて必死に生きている、

けなげさが可愛かった。それに「お酒が強い」事も気に入った。その内、弓恵の方から「真理ち

ゃんも一緒にね」と真理を誘うようになった。時々、雄一郎も加わり、そして、弓恵がずっと望

んでいた「仲間」に加えてもらう事が出来た。

過ぎ去った青春時代が蘇ってきたようで、四人で一緒にいると本当に楽しかった。

村上から、二人の離婚の話と、雄一郎の不貞の話を聞いた時は、自分の事のようにショックだ

ったが「絶対に何かの間違い。そんな事はある筈がない。二人が元に戻り、また、四人で楽しい時間を過ごせる。そう信じていた。

だから、真理に「愛すること、忘れること、そして許すことは、人生の三つの試練」の言葉を伝えた。

「真理ちゃんはきつと分かってくれる。そして、真理ちゃんの川村さんを愛する気持ちが、川村さんの気持ちを動かす時が来る」

その弓恵の願いは通じた……でも、それは四人が一緒に過ごせる所ではなく「雄一郎と真理」

「村上と弓恵」別々の場所になってしまった……

「真理ちゃんと川村さんには、ずっと、ずっと、私達の傍にいて欲しかったのよ」

弓恵は真理の写真を抱きしめた。

「真理ちゃん、幸せ……なのよね。二人つきりになれて。ずっと離れ離れだったんだものね。だ

から、パパも私も邪魔しちゃいけないのかな？」

「只今より、川村雄一郎氏殺害事件の判決を言い渡します。被告人菅原梓は前に出なさい」

裁判長の声で梓は被告席から立ち上がった。立ち上がる際、二人の遺影をチラッと見て前に出た。

「主文、被告人菅原梓を懲役18年の刑に処する。但し、未決勾留日数中35日間を刑に参入する」

裁判長の朗々とした声が響いた。

一年の月日が流れた……今日は真理の一周忌であった。

村上の妻の弓恵は、母親の容態が思わしくなくて一週間前から、一人息子の和也と共に実家に帰っていた。

公休日のその日、一人自宅に残された村上は昼近くまで睡眠をとり、近所のスポーツジムに出かけた。

「村上さん、だいぶ筋力が落ちてますね。マシンの負荷を少しアップしても良いと思いますよ」

いつもと同じ筋トレメニューをこなしているが、こここのころ「キツイ」と感じていたため、体力測定をしてもらったが、スポーツジムのインストラクターから痛いところを突かれた。

「人間の身体は正直だ」と村上は思った。

精神的な落ち込みは身体にも反映する。健康維持のために通っているスポーツジムだが、その裏

には「川村には負けたくない」という気持ちと「真理の前で、精神的にも肉体的にもタフでいたい」

と思う気持ちがあった。しかし、今の自分にはその「張りの気持ち」がない。「良い意味でライバルであり親友であった雄一郎への思い」と「永遠の恋人であつた真理への思い」は「家族に対する

思い」とは全く異質だった。

改めてその事を思い知らされ自宅に戻った村上は、以前から考えていた「真理の一周忌にする事」を実行した。

目の前には、雄一郎が好きだったバーボンと、15年の間、開ける事が出来なかった箱が用意されていた。

「そろそろ開けるか」

ひとり言を言って、カッターを用意して、箱にしっかりと付着していたガムテープを剥がし蓋を

開けた。箱の中に入っているのは、雄一郎と真理の結婚式のアルバム写真であつたが、村上は一度

もそのアルバムを見た事はなかつた。

まず、箱の一番上に置かれている、横浜の有名なレース店で特別に作ってもらつた薄いピンクの

布袋から、額に入つた写真を取り出した。取り出した額に入っている写真は、横浜ロイヤルガーデ

ンホテルのチャペルで行なわれた、雄一郎と真理の結婚式の集合写真だつた。

写真の中心にいる、花嫁姿の真理はキラキラ輝いていた。写真を少し眺めて、また、袋にしまつた。

次に、レザーの表紙に「Kenji・Murakami」と印字された小さなアルバムを手に取り開いた。雄一郎と真理が結婚式に出席した人全てに、手作りで贈つたオリジナルのアルバムであつた。

フロントで初めて会つた時に、真理に一目惚れをした村上だったが、思いを打ち明ける事がない間に、雄一郎にさらわれてしまった。失恋の痛手は大きく、立ち直れないまま迎えた二人の結婚式

前夜には、居酒屋で喧嘩騒ぎを起こした。結婚後、その真理は自分の部下になり、自身もその後結

婚をし、二人とは家族ぐるみの付き合いをしていたが、真理へ

の思いはずっと胸に残っていた。

だから、二人が自分のために作ってくれたアルバムであったが、どうしても見る事が出来ず、し

っかりとガムテープを貼り付け「業務」と書いて押入れの奥深くにしまっておいた。

15年経った今……そのアルバムを慈しむように村上は一頁ずつめくった。

アルバムの中には、幸せそうな雄一郎と真理がいっぱい存在していた。

写真を見つめる村上の目から涙が溢れた。ゆっくりと全部の写真に目を通して、その中から一枚の写真をアルバムから抜き出した。

雄一郎と村上に腕を回した真理が「世界で一番私が幸せ」そう言っている様な笑顔を向けていた。

雄一郎もリラックスした様子で嬉しそうに笑っている。そして自分……「俺が一番嬉しそうな顔をしている！」

村上はその写真の自分の顔を見て驚いた。

まるで、自分が花婿であるかのように……満面の笑みを浮かべていた。

「あの時はかなり辛かったが、それでも、二人の結婚を喜んでいたのか……」

当時の気持ちを思い出した。と、突然、雄一郎と共に歩んできた20数年が、走馬灯のように浮

かんできた。

目を閉じて、しばらくの間、過去にタイムスリップした。

グラスが空になっていのに気付き、写真をテーブルの上に置き、グラスにバーボンを注いで、写真に向けて乾杯の仕草をした。

「俺も、お前と同じように二人の女性を愛していたんだ。真理と弓恵を。そうだよ、愛の種類も違っていった。ただ、俺は片想いだったけどな。それでも幸せだったよ」

雄一郎に向って話しかけた。

「お前も真理もいなくなって……俺は淋しいよ。この一年間、夢中で仕事をしてきて、秋から本部の事業企画部だ。お前も真理もないから、俺は自信がないんだよ」

珍しく弱気な村上がいた。また大粒の涙が溢れた。

「弓恵と和也も支えだが、お前達だって俺の支えだったんだよ。お前達に傍にしてほしかったんだ

よ。俺だって……お前達がいなくては……片翼がなくなつて……俺はどうやって頑張ればいいんだよ？ 教えてくれよ……」

「……らしくない」
真理が笑っていた。

「情けない事言うなよ。俺の分も頑張つて、二人で話していた夢を実現させてくれよ。お前なら出

来るよ。それに……真理と俺は、ずっとお前の傍にいるよ」

雄一郎も笑っていた。

「バカヤロー！ 他人事だと思つて簡単に言うな！」

付けっぱなしのラジオのFM局から、クイーンの「ボヘミアンラプソディ」が流れて来た……

……村上は声をあげて、いつまでも泣いていた……

村上が自宅で一人、雄一郎と真理を思つて涙している頃、杉山は真理が大好きだったコスモスの

花束を抱えて、二人の墓前にいた。

コスモスを探すのは難しかったが、ホテル出入りの花業者に無理を言つて前日に届けてもらつて

いた。

「真心、少女の純潔、美麗」の花言葉の赤やピンク、白の可愛いコスモスは、真理そのものだった。

「二人で仲良くしている？」

川村家の墓石に向つて話しかける杉山の隣には、早瀬奈々子

が寄り添っていた。

今日の午前中までは「早瀬奈々子」であつたが、今はもう「杉山奈々子」になっていた。

二人は真理の一周忌に合わせて、港区役所に婚姻届を提出していた。

真理の葬儀で二人は再会を果たした。当時のヤンキー高校生は素敵なレディに変身していた。杉

山は、眩しい気持ちでそんな奈々子を見ていたが「真理が結び付けてくれた」運命の導くままに結

ばれた。

「真理さん、私達は今日結婚しました。来年には赤ちゃんが生まれます。真理さんのようなりっぱ

なホテルウーマンにはなり損ねましたが、りっぱな母親になります」

奈々子はそう報告した。

「真理は何て言つてた？」

「杉山君は頼りがいのある男になつた？ 逃げない？ って、心配してたよ」

「奈々子は何て答えたの？」

「時々、都合が悪くなると逃げちゃうし、ちょっと、まだ頼りない。そう言つたの」

「余計な事言つなよ！ また、真理に怒られるんだからさ」

「ウソよ。もう逃げないし、頼りになるよ、って。杉山君は、真理さんの大事なチーフに負けない位に素敵な人よ。そう言ったらね、真理さん、やきもち焼いてみたい」

杉山は、真理と過ごした昔を思い出した。甘酸っぱい気持ち
が蘇り涙が溢れた。

「私、あの時の事を思い出したの」
奈々子の目からも涙が溢れた。

16年前のあの日……いつもと同じように退屈な一日だった。
駅ビルのトイレで制服から私服に着替え「誰か来ないかな」横
浜駅西口のデパートの前で、遊び仲
間を待っていたが、待っている時に限って誰も現われなかった。
場所を変えようと思っていたところで、突然、杉山にナンパ
された。

「好みのタイプ」と思って誘われるまま杉山に連いて行き、ラ
ブホテルで一日過ごした。

過ごしている間に「こんな人が彼氏だったらいいな」と本気
で思うようになった。本名すら名乗
らない相手は「どうせ、私の事は『通りすがりの身体目的の遊
び相手』としか思っていないんだ」そ
う思っていた。それでも相手の正体を知りたくて、シャワーを
浴びている間に、バッグを探って名
刺を抜き取った。別れるのが淋しくなったから最後に試してみ
た。

「実は私……高校生」と自分の身分を明かしたら……案の定、
顔色を変えた。

「やっぱり、まともな恋愛対象としては見てくれていない」
自分が悲しくなった……「これじゃいけない」……目が覚めた。

その事を気付かせてくれた杉山にお礼を言いたくて、ホテルに行ったが会えなかった。代わりに
対応してくれたのは真理だった。

「せっかく訪ねて来てくれたのに、杉山君は会議中なの。ごめんなさいね」

それは『ウソ』……だと思った。

「自分を変えよう。と思っていたのに、まともに私の事を見てくれる人なんていないんだ」

杉山に対して猛烈に腹が立った。

「私で良かったら杉山君への伝言を聞くから、話をしてくれる？」

真理にそう言われた。

「こんな一流のホテルに勤めている大人が、高校生を弄ぶのは良くないと思う」

相手もウソを言っているのだから、自分に都合の良い様に話をでっち上げて、杉山を非難して悪者に仕立てた。

「そんな事があつたの……」
真理の自分を見る目は優しかったが、悲しそうな表情をしていた。

「分かったわ。でも、あなたが杉山君にちゃんと伝えるべきよ。今日は会議中だから無理だけど、

私がセッティングするわ」

……この人は自分を信用してくれている……それが嬉しかった。自分の目を真っ直ぐに見つめて、じっと作り話を聞いてくれた。辛い事があって遊び歩くようになってから、家族も周りのみんなも、ずっと自分を腫れ物に触るように扱い、真っ直ぐな視線を向けてくれる事はなかった。でも、目の前の真理は違った。優しく暖かい眼差しで、自分と向き合ってくれる人に出会ったのは久しぶりだった。

「こんな素敵な人が傍にいるのなら、私をちゃんと見てはくれないのは当たり前」……そう思った。

「いいんです。あなたが私の話を聞いてくれた。それだけで充分です。それで、杉山さんに『あり

がとう』とだけ伝えて頂けますか？」

何故か、素直な気持ちになれた。

「ねえ、一つお願いしてもいい？ 本当の事を話してくれる？」

……やっぱり、ウソだと見破られていた……

「ごめんなさい」

不思議だった……今まで、素直に謝る事なんて出来なかった……思わず涙が溢れた……

「私は……」

奈々子は本当の事と、杉山に対する本当の気持ちを真理に話した。

「やっぱり、機会があったら、あなたからその話を杉山君に伝えて欲しいな。私は杉山君が大好きなの。彼は素敵な人よ」

それがきっかけで「立ち直ろう」と決心して、そして、真理と杉山の面影を胸に抱いて頑張つて来た。大学を卒業し外資系航空会社に就職して、チーフキャビンアテンダントになった時、東洋ビジネスという雑誌で真理と再会した。

雑誌の中の真理を見た瞬間「この人の元で仕事をしたい！」いてもたってもいられず、チーフに

引き上げてくれた航空会社に辞職届けを出して、横浜ロイヤルガーデンホテルに売り込みをかけた。

「杉山は転職をした」と聞いた時はショックだったが、憧れの真理の部下になる事が出来た。

その真理が、プライベートで大きな悩みを抱えているという事は、事故が起きた後の報道で知っ

た。葬儀が済み、仕事復帰を果たした真理は「心の痛みを経験した」事で「人に対しての思いやり
の気持ちが増した」と奈々子は感じた。だから「ずっと真理に連いていこう」そう決心をしていた。

……それなのに……尊敬していた真理も……

「あの時、真理さんは私の気持ちを分かってくれていたのね」
奈々子は、真理の墓前に向かって話しかけた。

真理の葬儀で杉山と再会した奈々子は、全てを杉山に話した。

中学三年の時に、憧れていた先輩にレイプされた事。しかも複数の人に。それから、男の人が

信じられなくなって自暴自棄になった事。親が臭い物には蓋をしる的な対応をした事と、何故か母

親の自分を見る目が変わった事で、親も信じられなくなって、悪い仲間と遊び歩く様になった事。

いつまでも人間不信になっていったって、自分の人生を棄てるようなもの。だから、これからは気持ち

ちを新たににして、杉山のように、人に感謝される人間になりたい。その事を気付かせてくれた杉山

に、ちゃんと見てもらいたくて頑張ってきた事。

「真理さんが私達を結びつけてくれたの、そうでしょう？」

奈々子は涙をいっぱい溜めた目で、杉山を見た。

「うん。真理は……そうなんだよ……周りの人間を幸せにしてくれる……」

杉山は声を詰まらせた。

……真理は幸せだったのだろうか？……

「杉山君、本当に心配してくれているの？ 私は幸せだったの」

昔の……新入社員当時の世間知らずで、生意気でお茶目な真理が答えた。

「そうか……それで安心したよ」

杉山の顔に笑顔が戻った。

「そして……私達の幸せを祝福している？」

「勿論だよ！ チーフも真理もきつと喜んでるよ！」

自信たっぷりに、そして嬉しそうに言う杉山に顔を向けた奈々子は「見て！」と思わず声をあげた。

杉山は奈々子の目線の方に顔を向けた。

雨上がりの空に、はつきりと虹が出ていた。

そして、その虹に向って鳥が二羽、大きな鳥が小さな鳥を庇うように、虹に向って羽ばたいて行った。

「チーフと真理だ！」

杉山が嬉しそうな声をあげた。

「真理が言ってるよ。チーフと一緒に二人で幸せなんだから邪魔しないで、って。だから、俺たちは退散するか」

そう言って、奈々子の肩を抱いた。

「傍にいて欲しい。って言わなくても、チーフと真理はいつでも傍にいてくれる……」

また杉山の目から涙が溢れた。

「悲しみの涙」にはしないよ……「幸せの涙」にするよ……

二人が、自分と奈々子を笑顔で見送ってくれている……杉山はその気配を感じていた。

奈々子の肩を抱いて歩き始めたが、後ろは振り向かなかった。

終

第十七章（後書き）

長い間、お付き合い頂きありがとうございました。
この作品の感想、ご意見など頂けましたら嬉しく思いますので、
宜しくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6663p/>

STAY WITH ME ~ 続編 ~

2011年10月8日09時40分発行